

令和元年度

教 育 研 究 集 録

令和 2 年 3 月刊行

公益財団法人 日本教育公務員弘済会岡山支部

令和元年度「教育研究集録」刊行に当たって ～実践研究の深まりと広がり～



教職員の皆様には、希望に満ちあふれた子どもたちを迎え、新鮮な気持ちで教育活動等に勤まれていることと存じます。また、新型コロナウイルス感染防止に苦慮しながらも、子どもたちのために種々ご尽力されていますことに敬意を表しますとともに、平素から、公益財団法人日本教育公務員弘済会岡山支部の各種事業の推進にご理解とご協力を賜っておりますことに、深く感謝を申し上げます。

当弘済会では、「最終受益者は子どもたち」という理念の下、青少年の健やかな成長を願い、子どもたちや教職員、学校の応援団として教育振興事業等を実施しています。その一つとして、教育研究論文・著書の募集を行っていますが、これは、教育関係者が使命感を持って、日々行っている教育実践の優れた結果の報告の場として行うとともに、「学校の実態を踏まえ、明日の教育を考える」という立場から有益な研究成果を普及することで、教育の振興に資することを目的としたものです。

本年度、学校部門・個人部門・著書部門の3部門で募集を行い、学校部門で18編、個人部門で20編、著書部門で2編の合計40編の応募をいただきました。

内容としては、防災・減災教育や復興支援活動、キャリア教育やプログラミング教育に関するものなど、多岐にわたりつつも最近の教育の方向性や課題を踏まえた正に時宜を得たものでした。

当弘済会としましては、このような実践研究が更に広がるよう、優良以上の論文を冊子にまとめ、学校に配布しています。皆様方の素晴らしい実践が、各学校や教職員の取組の刺激やヒントになり、本県教育の質が一層高まることを願っています。

結びに、論文審査に当たっていただきました中国学園大学副学長の住野好久先生をはじめ、審査委員の先生方に厚くお礼を申し上げます。

なお、この冊子の終末には、本年度の日教弘教育賞の全国最優秀論文も掲載していますので、教育研究実践やまとめ方の参考にしていただければ幸いです。

令和2年3月

公益財団法人 日本教育公務員弘済会岡山支部
支部長 竹井千庫

巻 頭 言



審査委員長（中国学園大学・中国短期大学 副学長）住 野 好 久

新しい学習指導要領は、「社会に開かれた教育課程」を通して、21世紀後半を生きていく子どもたちに求められる資質・能力を、主体的・対話的で深い学びを通して獲得できるようにカリキュラム・マネジメントを確立すること等を提起し、2020年度から小学校で全面実施になります。各学校は、新しい教育課題に取り組みながら、働き方改革を推進するという困難に直面することになります。

こうした状況の中で学校教員に求められるのは、「実践研究力」ではないかと私は考えています。新しい教育課題に取り組み、新しい教育実践を生み出していくためには、そして、どのような教育実践がどのような成果を生み出し、どのような教育実践が成果なくただ繰り返されているかを見極めるためには、教育実践を研究的に分析－考察する力量が不可欠と考えるからです。

日本教育公務員弘済会による教育研究論文・著書の表彰は、このような学校教員の実践研究力の向上にとって大きな意義を持つものです。今年度も、論文・著書あわせて40編が応募されました。困難な状況の中、自らの実践を研究し、論文化された先生方のご努力に敬意を表したいと思います。

さて、今年度から、日本教育公務員弘済会岡山支部の「教育研究論文・著書」の審査方法が変更になりました。これまでは、一次審査委員会が学校部門・個人部門から上位4編を選考し、次に二次審査委員会がその中から各部門の最優秀賞と優秀賞を選考するという仕組みでした。今年度は、一次・二次の区別なく、全審査員で応募された論文・著書の中から最優秀・優秀・優良・奨励・選外を選考することになりました。（私はこれまで8編を読めばよかったのですが、今年度は40編を読みましたから、大変な審査でした。）

以上のように審査方法が変更されましたが、今年度も厳正かつ公正・中立に審査を行い、とても素晴らしい実践研究論文を最優秀賞に選考することができました。

論文の部学校部門の最優秀賞は、岡山県立瀬戸高等学校（校長：乙部憲彦）「キャリア意識・自己肯定感の向上と社会の構成者としての意識を高める探究サイクル—これからの社会に求められる資質・能力（エージェンシー）の育成を目指して—」でした。本論文は、「真面目で受け身の生徒が多く、一歩踏み出せない生徒が多い」大都市周辺の普通科高校で、自己肯定感とキャリア意識を向上させるという課題意識のもと、総合的な学習の時間で地域課題を探究する学習に取り組むことで、社会の構成員として持続可能な社会づくりに参画する意識を育成することに成功した実践を、アンケート調査の結果を示しながら論じたものです。実践としての魅力・力動性や他校での応用可能性、論文としての論理性・客観性などが、審査委員に高く評価されました。本校は、「瀬戸高6つの力」をループリックで評価する試みや、様々な社会資源と連携したキャリア教育に取り組み

ています。引き続き実践を展開し、発表し続けて欲しいと思います。

論文の部個人部門の最優秀賞は、倉敷天城高等学校の小山大輔先生による「学校図書館利用を組み込んだ世界史探究学習論—不読率の改善と「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて—」でした。本論文は、本を読まない生徒の増加に対し、「学校図書館の機能を計画的に利活用し、『主体的・対話的で深い学び』の視点から授業改善を図ることで、主体的・対話的な学習活動や読書活動を充実させる」という第4次岡山県子ども読書推進計画（平成31年3月策定）の提起を世界史の授業で取り組んだものです。学校図書館利用を組み込んだ探究学習によって、生徒たちはより豊かな世界史認識と、主体的で協働的な学び方を獲得していることが生徒たちの記述から読み取れます。この授業構成モデルは他の教科・科目、他の学校でも応用可能なものであり、多くの学校教員が本論文に学び、追試（同様の実践が同じように有効かを検証すること）に取り組むことが期待されます。

最後に、今後応募されようとしている皆さんに2つのお願いがあります。一つ目は、本書に掲載されている論文をよく読み、優れた教育実践のイメージや教育研究論文としてのまとめ方を学び、その形式をまねてほしいということです。二つ目は、他の論文集・雑誌等に既に発表した内容を投稿しないでほしいということです。二重投稿はできません。

来年度もたくさんの応募を期待しております。どうぞよろしく申し上げます。

祝 辞



岡山県教育委員会 教育長 鍵本 芳明

公益財団法人日本教育公務員弘済会岡山支部の令和元年度「教育研究集録」が上梓されるに当たり、並々ならぬ御研鑽を重ねられ、このたび教育研究論文及び著書の部で受賞されました方々に、心からお祝いを申し上げます。

さて、グローバル化や情報通信技術の進展に伴い、社会環境が大きく変化していく中、教育においては、こうした変化に的確に対応し、生涯にわたって、心豊かにたくましく生きていく力と、活力ある社会を築き支えていく意欲や実践力を備えた人材の育成がますます重要となっております。

来年度から順次全面実施される新学習指導要領においても、これまで学校教育で目指してきた知徳体のバランスのとれた生きる力の育成を継続するとともに、知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力の育成、学びに向かう力・人間性の涵養を重視し、未来社会を切り拓くための資質能力を育むことが求められております。

こうした状況の中、本県では、「新晴れの国おかやま生き生きプラン」において、「教育県岡山の復活」を重点戦略の第一に位置付け、学力向上、徳育推進、グローバル人材育成を重点プログラムとして掲げ、様々な分野で主体的に活躍でき、地方創生を支える人材の育成に取り組んでいるところでありますが、このようなときに、教職員が学校現場で創造的に教育実践に取り組み、それを実践研究として取りまとめ、お互いに研鑽を重ねることは非常に意義深いことであります。

このたび、受賞されました教育研究論文や著書は、キャリア教育や授業改善、SDGsの視点を踏まえた取組等、多岐にわたっておりますが、いずれもそれぞれの学校や地域の実態を踏まえ、課題を検証し、重点化・具体化した改善策を示す研究であり、多くの教職員の資質・能力の向上のため、広く活用していただけるものと考えております。

そして、受賞された皆様方には、今回の受賞を更なる契機として、引き続き実践や研究を深められ、それぞれの学校や地域の先導役として御活躍いただけることを期待しております。

終わりにになりましたが、教育研究助成事業の実施に当たり、御尽力いただきました関係者の皆様方に心から感謝申し上げますとともに、公益財団法人日本教育公務員弘済会岡山支部の今後ますますの御発展を祈念いたしまして、祝辞とさせていただきます。

令和元年度 教育研究論文・著書

審査委員名簿

(敬称略)

審査委員長	中国学園大学・中国短期大学副学長	住野好久
審査副委員長	岡山県総合教育センター企画調整監	矢吹玲子
審査委員	岡山大学特任教授	荒尾真一
審査委員	岡山市立石井小学校長	竹本俊哉
審査委員	岡山県立笠岡高等学校長	鳥越信行
審査委員	岡山大学特任教授	平野和司
審査委員	元小学校長	武藤幹夫
審査委員	岡山市立建部中学校長	松浦敏之
審査委員	元高等学校長	山本近信

目 次

(所属は令和2年3月31日現在)

論文 (学校部門)

〈最優秀・日教弘教育賞奨励賞〉

1. キャリア意識・自己肯定感の向上と社会の構成者としての意識を高める探究サイクル
—これからの社会に求められる資質・能力（エージェンシー）の育成を目指して—
岡山県立瀬戸高等学校 校長 乙 部 憲 彦 …………… 1

〈優 秀〉

2. 命の大切さを実感し、命を自ら守ることのできる幼児をめざして
—カイコやアカハライモリの飼育を通して—
総社市立池田幼稚園 園長 横 山 木 実 …………… 5
3. 協同学習を核にした思考力と学習意欲の育成
—「まなボード」を活用した算数科の指導を通して—
総社市立総社東小学校 校長 室 山 和 久 …………… 9
4. ポジティブな行動で支援し、非認知能力の育成で、温かい集団作り
—PBISに向けた学年による先行実践から—
里庄町立里庄中学校 校長 池 田 敬 治 …………… 13

〈優 良〉

5. 教職員の意識が学校を変える
—自主・協働のチーム制による働き方改革を通して—
赤磐市立山陽北小学校 校長 末 長 光 人 …………… 17
6. 体力向上を突破口に生活意欲を高め、生きる力を育む学校づくり
—若手を生かすOJT組織の構築から—
真庭市立落合小学校 校長 奥 山 仁 …………… 21
7. 自立した大人になるために小学校で身に付けておきたいこと
—異校種間交流から見えてくる課題に取り組んで—
赤磐市立笹岡小学校 校長 秋 山 祥 子 …………… 25
8. よりよく生きる美川の子の育成を目指して
—板書型指導案を核に据えた取組で授業力向上を図る—
真庭市立美川小学校 校長 森 岡 浩 美 …………… 29
9. 全校で 共生社会の形成を 目指して
—「5S」で整理 中学校 特別支援教育—
勝央町立勝央中学校 校長 光 井 一 恵 …………… 33

論文 (個人部門)

〈最優秀・日教弘教育賞奨励賞〉

1. 学校図書館利用を組み込んだ世界史探究学習論
—不読率の改善と「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて—
岡山県立倉敷天城高等学校 教諭 小 山 大 輔 …………… 37

〈優 秀〉

2. 学校間国際交流でグローバル人材を育てる
—持続可能な国際交流を創る—
岡山市立三勲小学校 教諭 浅 野 智 宏 …………… 41
3. 中学校技術・家庭科（家庭分野）の3年間を見通したカリキュラムの工夫
—SDGsを意識し持続可能な社会の構築の視点で全領域において意思決定できる生徒の育成を目指して—
岡山大学教育学部附属中学校 教諭 川 上 祥 子 …………… 45

4. 「情報活用能力」の視点で目指す「書くこと」における主体的・対話的で深い学び —Googleフォームを用いた「夢十夜」における創作活動と相互鑑賞— 岡山県立岡山操山高等学校	教諭 平野 優	49
〈優良〉		
5. 探求心を活性化する「読む力」の育成 —入門期における継続的な読み聞かせの実践を通して— 新見市立本郷小学校	指導教諭 大月 ちとせ	53
6. PBISの考え方を取り入れた生徒指導の実践に関する考察 —取組の更新を見据えた生徒指導主事の立場からの課題の指摘と対策の提案— 岡山市立福浜中学校	教諭 岩井 俊 暁	57
7. 中学2年 動物単元での探究学習 —細胞観察からカエルの解剖への体験重視の学習— 倉敷市立玉島東中学校	教諭 山本 芳 幸	61
8. SDGsと関連づけた「総合的な学習の時間」の推進 —持続可能な社会の創り手となる生徒集団の育成を目指して— 岡山大学教育学部附属中学校第2学年団	教諭 竹 島 潤	65
9. 「地方創生」に応える商業高校の実践的研究 —地域課題の理解を促すRESAS活用と繊維産業発信の取組— 岡山県立倉敷商業高等学校	教諭 川崎 好 美	69

著書部門

〈優秀〉

1. 明治 大正 昭和 旭東の教育と文化 邑久郡を中心として 退職者 石原 史 雄	73
--	----

令和元年度「日教弘教育賞」

〈最優秀賞・学校部門〉

Society5.0を生き抜く資質・能力の育成

—子どもの未来に責任もてる教育活動をめざして—

兵庫県洲本市立加茂小学校	校長 美濃 正 明	77
--------------	-----------	----

〈最優秀賞・個人部門〉

生徒の「主体的な学び」を追究した歴史的分野の授業づくり

—認知や感情への効果的な刺激を考慮した単元構成の工夫—

石川県白山市立松任中学校	教諭 平 真由子	81
--------------	----------	----

奨励賞の所属・代表者名（氏名）・研究題目の一覧表〈参考〉

論文（学校部門）

所 属	代表者名	研 究 題 目
真庭市立 草加部小学校	校長 白石 周二	防災力を高めるための学校の取り組み 「自助」と「地域連携」を柱にして活動を進める
高梁市立 落合小学校	校長 浅沼 常宏	基礎・基本を身に付け、進んで表現できる児童の育成 話す活動を中心として
津山市立 一宮小学校	校長 尾崎 文雄	「落ち着いた学習環境づくり」を目指しチームで取り組む学校づくり —「普通を磨く」—
新見市立 千屋小学校	校長 金森 誠	自分の思いや考えを伝え合い、深め合う子どもの育成 —自己実現を図る話し合い活動を通して—
岡山市立 藤田中学校	校長 梅原 信芳	自らの持ち味を生かして地域づくりに貢献しようとする生徒の育成 岡山市地域協働学校・岡山型一貫教育・ESDを柱とした教育の推進を通して
倉敷市立 精思高等学校	校長 土肥 直樹	SDG s の観点から考える被災地復興支援活動 —企業×NPO×地域×学校—
岡山県立 高梁城南高等学校	校長 松下 泰久	生徒の自己肯定感を高める“城南モザイクプロジェクト”の実践 —“城南プライド”の育成—
倉敷市立 真備陵南高等学校	校長 石田 桂子	被災地における教育課題への対応について —災害を乗り越え、防災・減災教育への取組へ—

論文（個人部門）

所 属	氏 名	研 究 題 目
備前市立 日生幼稚園	教諭 若本 佑允	意欲的、主体的に運動に取り組む幼児の育成 —「運動大好き！」を目指して—
真庭市立 草加部小学校	教諭 小林 芳朗	児童の地域貢献活動で、中山間地域諸問題に活力を与える —サイクルを意識して活動を構成する—
瀬戸内市立 国府小学校	教諭 近藤 斎	プログラミング教育実施に向けての一実践
瀬戸内市長船中学校 第72期生・教職員集団	教諭 久次 博文	人権教育を基軸とした学年集団づくりに取り組んで —〈「これってどうするん？」に答える仲間として〉の三年間を通して—
岡山市立 高島中学校	主幹教諭 小山 真二	技術・家庭科（技術分野）における指導法の工夫 —学習内容を有機的・横断的に関連付けた指導の効果について—
岡山市立 操山中学校	教諭 林田 亜紀	中学校論証指導の単元横断的指導に関する研究 —中学校2年生の文字式と図形の論証での指導内容に焦点を当てて—
岡山県立岡山工業高等学校 グローバル推進係	教諭 山口 貴之	工業高校におけるグローバル人材育成の取り組み —カンボジア姉妹校との交流活動を通して—
岡山県立 倉敷まきび支援学校	教諭 大月 永子	地域を学び 地域とふれ合い 地域を愛する生徒の育成 —吉備真備公の調べ学習を通して—

著書部門

所 属	氏 名	研 究 題 目
退職者	岡 長平	明治岡山の新聞雑誌

とする力)」として明示し、学校経営目標に位置づけた。さらに、ルーブリック評価を取り入れ、各学年で取組開始時と終了時で自己評価をさせた(図1)。2年生の発表時には、来てもらった外部の方に発表会用のルーブリック評価(全体のルーブリックを基に発表時の目標を具体化したもの)を実施してもらい、生徒にフィードバックしている【工夫1:付きたい力の明確化・ルーブリック評価】。さらに、発表会で発表を聞く際には「質問」「いいね」「辛口」のカードを聴衆の生徒等に引かせ、引いた内容でコメントの発言をさせる【工夫2:役目を持って発表を聞かせる】。また、発表を聞いた全員(生徒と外部の方)から、感想(いいね!カード)を付箋に記入してもらい、発表者に返却している【工夫3:「いいね!カード」で自己肯定感を高める】。

(1) 1年生の取組 セト☆ラボ(地域での探究学習)

セト☆ラボは、出身中学校別に3名程度のチームを作り、地域課題について考える探究学習を行っている。

まず、生徒の居住地の役所と連携し、役所の方に来てもらい地域課題を聞き取った。これまでの取組では地域課題は生徒が調べていたが、ネット等で一般的な課題しか調べることができなかった。役所の方から実際の地域課題で生徒が取り上げやすい具体的な課題を聞き取ることで、探究が取り組み易いものとなった(例:特産の桃を海外にPRする方法→特産の桃をフランスにPRする方法)【工夫4:具体的な課題の聞き取り探究を行う】。さらに、生徒が最も多く住む赤磐市から市の戦略プログラム担当者9名に来てもらい、全員が自分の進路を意識したプログラムの話を聞き取った。

探究学習を進める中でまとめる方向性を、シンプル型(聞き取ったことを中心に課題や対策をまとめる)、比較型(赤磐市と自分の住む自治体の取組を比較し、課題や対策をまとめる)、提案型(聞き取った課題から独自に提案する)から選んでいる。本格的な探究学習に初めて取り組む1年生には、まとめる型を示すことで取り組み易いものとなっている【工夫5:探究の型を示すことでまとめる形を知る】。

その後、探究するテーマを決めてフィールドワーク先を考える時に、3年生が同じ出身中学校の1年生へ指導に行き、探究テーマとフィールドワーク先について助言を行う異学年交流を行った。その後、役所等にフィールドワークを行い、これまで聞き取ったことも

踏まえポスターを作成した。最終発表の前には2年生がポスターの内容やプレゼンのやり方を指導する異学年交流を再び行った【工夫6:先輩が家庭教師】。

今年度から「総合的な探究の時間」が始まり、1年生のみ、従来1単位で実施していたものを2単位とし、2時間連続で実施している。これまでセト☆ラボは1年間取り組み、2月に発表会を行っていたが、今年度は1学期間取り組み、7月末に発表会を実施した。

(2) 2年生の取組 S☆ラボ(SDGsを学び、地域課題から学びたい学問分野につなげる探究学習)

平成29年入学生の1年時の発表に、国連の持続可能開発目標(SDGs)を取り上げ、地域課題が世界課題に繋がっていることを指摘したチームがあった。単に地域課題で終わるだけでなく、世界においても意義のある課題探究であるという意識を持たせることと、将来進みたい進路を意識させるために、SDGsの17の項目に関連させる探究学習を行った【工夫7:地域課題から将来の進路への意識をSDGsを通して考える】。

まず、SDGsに先進的に取り組んでいる岡山大学に協力を依頼した。生徒は「文化・国際、経済・流通、工学・環境、教育、医療・看護・福祉」の5分野の中から2分野を選び、大学の先生方から「SDGsと学問」という題で講義を受けた。さらに上記の5分野別に企業等に来てもらい、希望する2分野でSDGsの取組や課題等を聞き取った。その後、探究するチームを決定している。チーム作りの際には、図2の表の中心に自分の興味ある学部やSDGs番号を記入し、その周囲に大学、企業等の講演から聞き取った興味あるキーワードを記入する。次に中央の学部(SDGs番号)ごと

福祉	医療	在宅医療
動物心理	看護(3)	健康
介護サービス	理学療法	食事

図2

に分かれ、周囲に書いたキーワードを比べ、同じキーワードがある者で3名程度のチームを作っている【工夫8:同じ興味を持つ者でチーム分け】。チームで聞き取ったことから探究する方向性を決め、1年生で学んだ探究の型に当てはめポスターを作成して中間発表を行った。今年度の中間発表は、1学期末に1年生のセト☆ラボ発表と同時に、1・2年生がお互いに発表を聞いている。

中間発表後に、探究したいテーマを考え直す機会を与えている。探究学習を進めると進路希望が変わる場

合もあり、学びたい内容に取り組みさせることを優先し、再度、図2を使いチームの再編成を行っている。毎年、約3分の1のチームが再編成されている【工夫9：学びたい内容の再確認、探究チームの再編成】。

その後、チームで課題を設定し、フィールドワークを行い、1年生の時よりも一歩進んだ探究学習に取り組み、プレゼンシートを作成して発表している。

(3) 3年生の取組 D☆ラボ（自分の夢をデザイン）

3年生は、これまでの探究活動を総括し、自分の進路を明確に示すために、個人でレポート形式の「学びの設計書」を作成している【工夫10：一人一人が自分の学びの設計書を作る】。さらに、必要に応じて新たな探究活動を個人で行っている。

今年の7月末の1年生最終発表・2年生中間発表時に、体育館で全校生徒と外部の方を前に、3年生代表者2名がステージ発表をした。この2名は、1年生、2年生と探究のサイクルを経験し、その後も個人で探究活動を行った生徒である。1名は、これまでの1・2年生の取組を総括し、2年生の後半から取り組んでいるビジネスプラン「岡山にブランド養殖業“桃鯛”」について発表した。このビジネスプランは、岡山での企業支援「岡山イノベーションスクール」に応募し選出され、この生徒は一般人と一緒にビジネススクール3期生として学んでいる。もう1名はAI等が発達する社会で生きていくためにどんな教育が必要かを考え、「スパイダー討論」を提案し、それを実践した報告と、今後大学で何を学びたいかを発表した。

4 成果

年々、発表会に来られる外部の方も増え、昨年度2月の発表会では80名（前年度39名）が来校された。

1年生からの探究サイクルで、「中学校の時は“地味”だったが、高校に来て自ら動くことで変わった」、「発表会で褒めてもらい自信がついた」、「探究は楽しいから予習や課題にも取り組める」など、自信や学びへの意欲が増した生徒や、面談で自らの進路を具体的な理由とともに話せる生徒が増加した。さらに、地元企業の協力によって商品開発に至ったチームや新しいアイデアを創出したチームなど、イノベーションに繋がったチームがある。

食品ロスについて考えたチームは、家庭で捨てられる食材について親に調査を行い、その食材（ブロッコリーの茎など）を使ったパンを地元のパン屋に製造し

てもらい、発表会時に試食販売し、食品ロスについて訴えた（図3）。福祉分野へ進学を希望しているチームは、福祉施設にフィールドワークを行い、食事前の嚥下障害を予防する体操（「ぱぱぱ、たたた・・・」と声を出し口を動かす）を見学し、施設の利用者の方が楽しくできないかを考え、「さくらさくら」の音楽で体操を行えば良いと提案し、利用者の前で実演した（図4）。LGBTを探究したチームは、ファスナーをつ



図3



図4

けたジェンダーレスのブレザーの制服デザインを提案し、コンテストに応募した。「今までにない斬新なアイデアだ」と評価され優秀賞を受賞した。防災意識を高めたいチームは、地元企業に相談し非常用に携帯保存できる醤油アメを提案した。パッケージに防災意識を高めたい思いを表現した「防災can do」という醤油アメを商品化し、連携先の自治体に備蓄を提案した。赤磐市と岡山市東区は生徒の提案を受け、「備蓄品としては消費期限が短いので使用できないが、防災イベント等での啓発には利用できる」と購入してもらった。本校ではこのチームの提案を受け、水の備蓄とともにこの醤油アメを備蓄している。非常用として使用しない場合は、毎年体育祭で熱中症予防のために塩分補給として配布し、新しい物を備蓄している。担当した生徒達は「企業の商品開発のスピードに対応するのが難しかった、ビジネスとして成立させるためには発想の転換が必要、交渉の重要性を痛感した」など、実社会と繋がった探究学習ならではの成果を得ていた。多くの連携先を見つけ、地元で捨てられる桃を使ってハンドクリームの試作にこぎ着けたチームは、薬事法の壁を越えられず商品化を断念したが、代表生徒がこの体験をOECD教育局アンドレアス・シュライヒャー局長が参加するシンポジウムで発表した。シュライヒャー局長から「勇気と自信を感じた」とのコメントを頂き、生徒は「先生が限界を作らず自分たちの自由な活動を応援してくれたからできた」と振り返っていた。

毎年、本校で実施しているアンケート調査にある「地

域や社会で起こっている問題や出来事に関心があるか(図5)」に対して、以前の取組の平成28年入学生に比べ、本研究を実施した平成29・30年入学生の方が高い伸びを示している。また、「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがあるか(図6)」に対しては、2度の探究のサイクルを体験し、1年の時よりも具体的な提案や行動を行ったため、平成29年入学生は3年での値が大きく伸びており、社会の構成者としての意識も高まっていると言える。

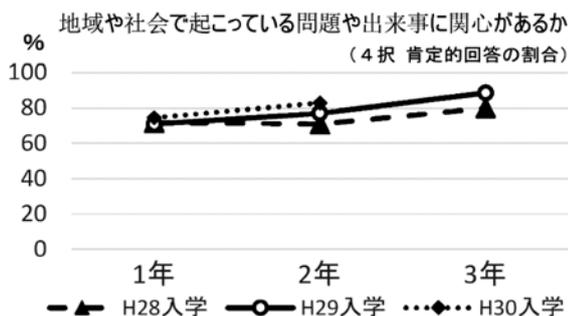


図5

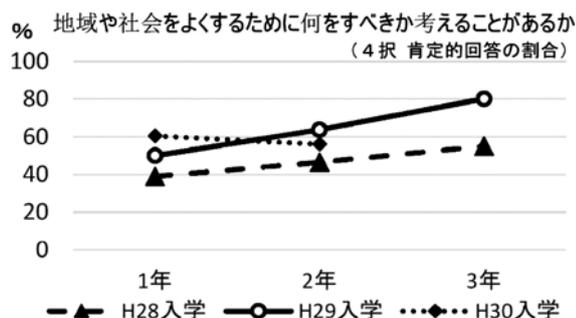


図6

京都大学と河合塾が共同実施した「学校と社会をつなぐ調査」(2014)の高校2年生の結果と本校の平成29年入学生の2年時の最終段階を比較してみると(図7)、どの問いも10%以上高い結果を示しており、地域課題やSDGsを踏まえた探究の成果(①・②)、商品化や新しいアイデアの創出の成果(③)が見られたと考える。

本校 H29入学生と全国 高2 (5択 肯定的回答) の比較

京都大学・河合塾:学校と社会をつなぐ調査 第1回調査(2013年秋実施)

① 社会の問題に対して分析したり考えたりすることができる	全国 高2 40.7%	本校 高2 52.9%
② 異文化や世界に関心を持つことができる	全国 高2 54.4%	本校 高2 66.4%
③ 新しいアイデアを得たり発見したりすることができる	全国 高2 39.7%	本校 高2 55.7%

図7

また、前述の「高校生の心と体の健康に関する意識調査(2018)」で、全国の高校生は「私は価値のある人間だと思うか」の問いに44.9%が肯定的回答をした

のに対して、本校の平成29年入学生は2年時の最終段階で53.3%が肯定的回答をしており、探究のサイクルを体験することで自己肯定感も高まったと考える(図8)。

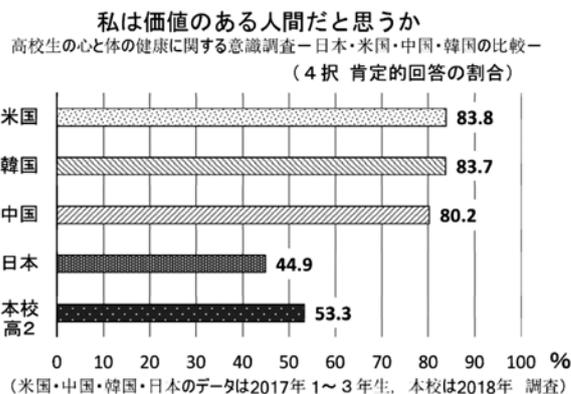


図8

本研究では、3年間で系統的に大学、行政、企業と広範囲に連携して、生徒が地域課題やSDGsを学び、課題を見つけ、より良くしようと提案を行っていることから、社会の構成者としての意識や社会参画の意識が高まっている。さらに、探究のサイクルを体験し、アイデアの創出や商品化から、イノベーションの体感に繋がっており、「エージェンシー(よりよい社会を目指して、責任を持ち社会参画し、イノベーションを起こすこと)」の育成にも一定の成果があったと考える。

5 まとめ

本研究によって、キャリア意識、自己肯定感の向上とともに、社会の構成者として意識を高めることも検証され、I S N2.0が目指す「エージェンシー」の育成に繋がった例も見られた。最近、幾つかの雑誌の取材を受けたが、3年間で系統的に大学、行政、企業と広範囲に連携している事例は全国でもないと高評価を頂いた。今後、さらに多くの生徒がイノベーションを体感できるような探究サイクルの確立とこれからの社会に求められる資質・能力の育成を目指していきたい。

6 引用文献

京都大学・河合塾(2014):学校と社会をつなぐ調査第1回調査(2013年秋実施) 分析結果報告

乙部憲彦(2017):生徒の主体的な行動を促し、社会人としての基礎力の養成を目指すプログラム開発、日弘教岡山支部

国立青少年教育振興機構(2018):高校生の心と体の健康に関する意識調査-日本・米国・中国・韓国の比較-

(執筆:乙部憲彦・絹田昌代)



命の大切さを実感し、 命を自ら守ることのできる幼児をめざして

—カイコやアカハライモリの飼育を通して—

総社市立池田幼稚園 園長 横山 木実

I はじめに

4月に白いウサギのサクラが死んだ。かわいがっていたので、幼児たちは悲しみ、お墓を作ってサクラを埋めた。その後、誰からともなく「早く戻ってくるといいね。」「いつ戻るかなあ。」「早いといいな。」という声が上がった。ゲームで命が何度も復活するように、死んでもすぐ簡単に戻ってくると思っていることが分かり、がく然とした。命はたった一つしかない大切なものだという実感を高めなければならないと感じた。

また、危険と分かっているにもかかわらず遊びに夢中になると、自転車を猛スピードでこぎ、あえて友達にぶついたり、廊下を走って転んだりすることがよくあった。道路を横断する際にはきちんと「手を挙げて右、左、後ろ、前、車は来ていません。気を付けて渡りましょう。」と唱えることはできるが、周りをよく見ず先生について渡るといことも見られた。命を大切にと言われてはいるが、自分の命を守るためにどうしなければならないかが理解できていないことが分かる。これらのことから幼児といえども、自分の命の大切さを感じ、自分の命を守るために取るべき行動を身に付けさせたいと考えた。本論文では、カイコとアカハライモリの飼育を通して命の大切さを実感し、命を自ら守ることのできる幼児をめざした本年度の実践を報告したい。

II 研究の概要

1 命の大切さの実感につながる研究仮説

(1) 研究仮説

幼児一人一人が身近な生き物に深く関わり、心を動かされるような経験をしたり、自分自身の命を感じる場を設定したりすることで、生命の不思議さや尊さに気づき、命の大切さを実感するとともに自分の命を自ら守ろうとするだろう。

(2) 仮説設定の理由

① 身近な生き物に深く関わり心を動かされる経験

幼児にとって、小さくてかわいい生き物との触れ合いや誕生や死を見守る経験は、忘れられない思い出となるとともに命の大切さを実感することにつながる

考える。そこで、約2か月で一生涯を終えるカイコと食欲が旺盛なアカハライモリの飼育をすることで命を身近で実感させたい。

② 自分の命を自ら守る

生き物の命の尊さや大切さを感じた幼児が、自分たちにも命があり、大切な命を守らなければならないと感じることができるよう、カイコやアカハライモリの飼育時期に自分自身の命と向き合うような行事を行う。小学校、保護者、地域と連携を図って避難訓練、交通教室等を行うことで、自分自身の命にも向き合い、命を大切だと実感したり、命を自分で守らなければならないと感じたりすることができると思う。

2 研究の実際

(1) 命のつながりを実感したカイコの飼育



写真1 カイコの世話をする幼児

園で毎年飼ってきたカイコはなじみの深い生き物である。毎年飼ってきているので、芋虫状態の時にも抵抗なく触ることができる。しかし、

ただ単に園の生き物というとらえであり、カイコの成長の神秘や不思議さまでは感じていなかった。そこで、全員で世話をするカイコとは別に、自分の身近にある命として実感できるように一人2匹ずつ飼うことにした。

① 自分だけのカイコ

飼う前には、「カイコは5000年以上前から人間に飼われていたこと、桑の葉しか食べないこと、いつも餌を貰ってきたから自分では餌を取りにいかないこと、みんながカイコのお父さん、お母さんとして毎日桑の葉をあげなければ、餓死してしまうこと」を伝えた。すると、幼児はそれぞれ自分のカイコに「かいこちゃん」「はなちゃん」「かくれんぼちゃん」等と1匹ずつ命名して、毎朝登園後すぐに様子を見に行き、桑の葉を与えるようになった。「おはよう、はなちゃん。」と

声を掛ける幼児もいた。

毎日ウンチを捨ててきれいに掃除する際には、「どんなウンチ？」と声を掛けることで、ウンチの大きさにも注目できるようにした。すると、「最初より、ウンチが大きくなった。」「ウンチが、大きいから模様（縦筋）が見える。」「カイコのウンチはコロコロしてる。」と幼児は次々と新たな発見をしていった。

じっとして動かなくなった時には、「葉っぱを食べないけど、大丈夫かなあ。」と心配そうに見守る様子が見られた。「眠」の状態でカイコは眠っていると伝え、と、「カイコも寝るんだ。」と驚いていた。ずっと眺めている時には「こっくり、こっくり居眠りしてるみたい。」という幼児らしい声も聞こえた。

「眠」の後でカイコが脱皮した時には、「ウンチじゃない茶色い物が落ちている。」と皮をすぐ見付けてきた。「脱皮することで体を大きくすることができる。」と伝え、と他のカイコと自分のカイコを比べ、大きくなっていることを心から喜んでいて、実際、幼児が育てているカイコの方が餌の桑の葉が多い分、体が大きかった。また、体をなでたり、手の上に置いたり、服にくっ付けたりする中で、カイコの体が冷たくツルツルして気持ちいいことにも気付いていった。「カイコの体は気持ちいい。」とカイコにはおぼろりする幼児もいた。

繭を作り始めた時には、「どこから糸を出しているかな？」「糸を出す時に、ある数字を描くよ。分かるかな？」とクイズを出した。すると一生懸命観察して、「口から糸を出している。」「8の数字じゃ。」と発見したことを興奮して教えに来てくれた。なかなか繭にならない幼児は、カイコにさらに葉を与えたり、休みに家に連れて帰って葉っぱを食べさせたりして、一生懸命世話をしていた。全員、黄色や白色の美しい繭を作った時には、お互い嬉しそうに繭を見せ合っていた。

繭を作った後はどうなるのか心配になった幼児は、すぐそばに置いていたカイコの絵本で調べ始めた。繭



写真2 カイコの絵本で調べる幼児

の中でサナギになってじっとしていると分かって「良かった。」という声が聞こえてきた。この絵本からも、幼児はいろいろな発見をしていった。繭が一本

の糸からできており、伸ばすと1500メートルにもなることに大変驚き、友達や先生に教えたくてたまらない様子であった。その後カイコは繭を溶かす液を口から出して繭から出てき始めた。溶かした穴から一生懸命体を動かして出てくる様を見た幼児は、「がんばれ、ぼくのかいこちゃん。」「もうちょっと。」と声を掛けて応援していた。出てきたカイコは真っ白で美しかった。

② 命のつながり

成虫が出てき始めた時に、幼児が「何を食べるのだろう。」「桑の葉かな？」とにぎやかに話していた。そこで、「このカイコは、何も食べないんだよ。」と伝えた。すると、「食べないと死んでしまう。」「かわいそう。」とびっくりしたようだった。「食べることはできないけれど、一番大切なものを作るために生まれてくるよ。」と言うと「命？」と即座に答えが返ってきた。「そう、カイコは大切な命を作るために生まれてくる。命を作るためには、お父さんカイコとお母さんカイコが結婚しないといけない。もし、生まれてきたら、結婚させてやってね。」と言うと、みんなから「はい。」という大きな声が聞こえてきた。実際に自分のカイコが生まれてくると「私のお父さんの？お母さんの？」「だれか結婚して。」とにぎやかだった。何とか結婚して卵を産ませてあげなければという気持ちを強く持ったようである。交尾をする際に雌はフェロモンを出す管をお尻から出し、雄は羽ばたいて匂いを触覚でかき取り交尾する。その様子を幼児は真剣な表情で見ていた。無事に交尾が始まると大きな拍手が起きていた。交尾後は卵を産み、幼児のカイコは短い一生を終えた。産んだ卵の数に驚いていたが、自分のカイコ



写真3 カイコのお墓で拝む

が死に「〇〇ちゃんが死んじゃった。もうちょっと一緒にいたかった。」と悲しんでいた。お墓を作って埋めた時、幼児たちは、サクラの時とは違って、もう戻ってくるとは言わなかった。「命は次の卵に受け継がれ、みんなのカイコはもう戻ってこない。一つしかない命とはこういうものだ。」ということを感じていた。

埋めた後には、カイコが残してくれた繭を使って親子でキーホルダー作りをした。繭の中には、カイコが脱いだ幼虫の殻とサナギの殻が残っていたので、カイコの体の不思議にまた、触れることができた。作った

キーホルダーは、今もナップサックにつけて、大切にしている。

(2) 命をいただき生きるアカハライモリの飼育



写真4 食欲旺盛なアカハライモリとオタマジャクシ

園には食欲旺盛なアカハライモリが4匹いる。餌は、乾燥糸ミミズを与えていた。餌を食べる際には、縦泳ぎをして赤と黒の模様のある腹側を見せながら登ってくる。その泳ぐ様子や餌をパクパク食べる様子を見るのが幼児は大好きだった。

① 命について考えたオタマジャクシとの関わり

園外行事で、近くの砂防公園に行った時、魚やサワガニ、オタマジャクシ等を捕まえることができた。その際、「オタマジャクシは、アカハライモリにとってご馳走だよ。」と伝えると幼児は「持って帰ってアカハライモリに食べさせたい。」と言ってきた。そこで、園に持ち帰り、食べさせることにした。最初はアカハライモリがオタマジャクシをパクッと一飲みにする様子に、幼児はびっくりしていたが、興味を持って最後まで食べる様子を見ていた。その後も家でオタマジャクシを取ってきては、食べさせる幼児もいた。

ある日、足が生えかけたオタマジャクシがいたので、「このオタマジャクシたちは、アカハライモリの餌になっているけれど、命はあるのかな。」と問い掛けると、幼児は「はっ。」とした顔になり、「命がある。」と答えた。そこで、「食べさせると命はなくなるけれど、どうする？」と聞いた。すると、「アカハライモリも食べないと死んでしまう。」「オタマジャクシがかわいそう。」「どうする？」と幼児たちは真剣に相談をしていた。その結果、足が生えたオタマジャクシ2匹だけをカエルにし、他のオタマジャクシを食べさせることにした。「アカハライモリも私たち人間も、生き物は、ほかの生き物の命をいただいて生きているよ。だから、お弁当の前にもいただきますと言うでしょ。」という話をすると、「だから、お弁当やごはんを残したらだめなんだ。」としみじみと話してくれる幼児がいた。

② 小さな命も大切にしようとしたカエルとの関わり



写真5 カエルを手に載せる幼児

無事カエルになった1匹は、幼児たちの希望で、園庭に逃がした。「カエルになれて良かったね。お庭で楽しく遊んでね。」と言って大事そうに手のひらから花の上を下ろした。残りの1匹は、まだ前足が

出かけだったので、どうするか聞くと、「夏休み中は家に持って帰って世話をしてカエルにする。」という返事が返ってきた。小さな命も大切にしようという気持ちがあるのが嬉しかった。

(3) 自分自身の命に向き合うことができる行事

カイコやアカハライモリを飼育している時期に自分自身の命と向き合い、自分を守る行動をとることができる避難訓練、合同土砂災害訓練等を行った。

① 避難訓練



写真6 担任から指導を受ける幼児

5月の火災避難訓練では、火元の湯沸し室から遠いドアを選んで逃げることができたが、普通の時よりも慎重にゆっくり歩

いていた。火災の際は炎や煙に巻かれて死ぬこともあるので急ぐことも大切なことであるということに気付いていなかった。

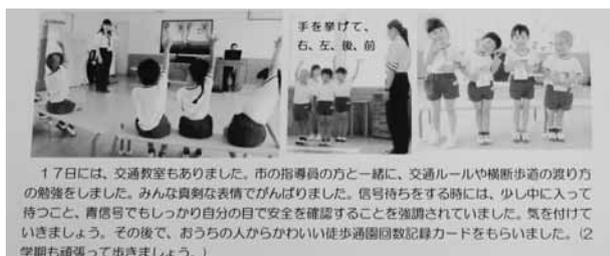
5月の土砂災害避難訓練では、テラスで保護者への引き渡し訓練も行った。実際に土砂災害に見舞われた地区でもあるので、幼児も保護者も真剣に訓練に参加してくれた。

6月には、裏山からの土砂崩れに備えて、小学校と合同の土砂災害避難訓練を行った。隣接する小学校の3階まで避難するというので不安であったが、昨年度災害を経験した幼児もおり、黙って一生懸命逃げることができた。昨年度の豪雨災害のことを思い出した幼児もおり、「去年はたくさん雨が降って、泥水が流れてきたよな。」「足のところまで水がきたよ。」という声も聞こえてきた。また、「カイコちゃんも連れて逃げたかった。」と自分のカイコのことを思いやる言葉

も聞かれた。

② 保護者・地域との連携

幼稚園においては教育的効果を上げるために、保護者や地域との連携は欠かせない。訓練を合同で行うだけでなく、その時の幼児の様子や思いを園便りで詳しく発信するようにした。すると地域の人や保護者から「がんばっているね。」と幼児に声を掛けてくれることが増えた。人から褒められることが意欲的な活動へつながっていった。



真7 園便りNo.23抜粋 交通教室について

3 研究の結果

(1) 一人2匹のカイコを飼う

名前を付けて世話をするなど自分だけのペットという思いを抱きカイコに対する愛着が強まっている。よく見て、大切に育てたからこそカイコの生態に気付き、カイコの命を感じることができた。

(2) 命のつながり

カイコの産んだ卵を見て、幼児たちから「いつ生まれるの。」「早く生まれなかな。楽しみ。」という声が出た。新しい命の誕生を意識することにつながった。

(3) 命をいただくアカハライモリ

アカハライモリがオタマジャクシを食べる様子は、弱肉強食の世界であり、命を目の当たりにすることにつながった。

(4) 飼育時期に合わせた訓練

避難訓練の時「私のカイコも一緒に連れて行く。」と言う幼児がいた。訓練が大切な命を守るためのものであることを理解している。

Ⅲ 研究の成果と課題

○カイコを飼い始めてから、小学校で大きなクスサンの幼虫が地面を這っているのを見た時に「カイコと一緒にじゃ。」と愛着を持って見るすることができた。蛾が室内に飛んできた時にも「逃がしてやろう。」と小さい生き物への愛情を示し、命あるものを大切にしようとしていることが分かった。1学期末保護者

アンケートでも「幼稚園は子どもに生き物を大切に育てようとしている」で、当てはまるが100%だった。また、「小動物に対して優しくできるようになった」という意見も書かれていた。園での取組が成果を上げている。ただ、来年春には、卵からカイコが生まれるところを見せて、命がつながっていることを実感させる必要がある。

- アカハライモリの飼育を通して、「私たち人間もそれぞれの生き物も、ほかの生き物の命をいただいて生きている」ということを学んだ。そのおかげで好き嫌いの激しい幼児も「苦手じゃけど、半分は食べる」と言うようになった。
- 地域の人は園便りを見て、幼児たちに「がんばっているね。」と声を掛けてくれるようになった。また、幼児からも「ままはいつもいけだしんぶんをみています。とてもよろこんでいます。」というメッセージをもらった。このように、園便りが保護者や地域の人との連携に役目を果たしていると感じる。今後も幼児のがんばりの様子が伝わるような園便りを定期的に発行していく必要がある。

Ⅳ 終わりに

「一番大切なものは何？」と幼児に聞くとすぐさま「命！」と答える。カイコやアカハライモリの飼育を通して、命の大切さを実感したからだ。これからも様々な生き物に深く関わり、生命の不思議さや尊さに気付く体験を積み重ね、たった一つの命をもつ生き物をいたわり、大切に育てていきたい。

また、その大切な命は自分たちにもあり、自分の命は自分で守らなければならないということを実感し、自分の命をしっかり守れるようになってほしい。

毎朝、元気のいい声で「おはようございます。」と笑顔で園門をくぐってくる幼児たちを見て、切に願う。

参考文献

うまれたよ！カイコ 小杉みのり著 岩崎書店



協同学習を核にした思考力と学習意欲の育成

—「まなボード」を活用した算数科の指導を通して—

総社市立総社東小学校 校長 室山和久

1 児童主体の学習へ

来年度から新しい指導要領が完全実施される。文部科学省の保護者向けパンフレットにも、「生きる力 学びの、その先へ」と記され、保護者への啓発も進んでいる。しかし実際に参観日に保護者が目にする授業に明確な変化はあるのだろうか。現在は、主体的・対話的で深い学びのある授業をめざして研究を進めているが、まだまだ主体が指導者である授業を目にすることが多い。岡山県から授業ファイブが示され、若い教員にも基本的な流れは定着し、日々の授業は進んでいるが、45分の学習を通して子どもたちに自分たちで学んだという実感や、主体的に学習に取り組む力が身に付いたかどうかという視点で見ると、まだまだ十分ではない。教師が教えようとするあまり、教師主導の学習になりがちである。教師からすると「力を入れて教えたから身に付いているはず」と思うのだが、実際に定着度を調べると十分な結果が出ないことも多い。こうした現状は本校でも見られ、特に算数科の意欲向上や学力向上が長年の課題となっている。新しい時代に向けて、より児童が主体となる授業への改善が喫緊の課題である。

2 本校がめざす授業改善—東小スタイルをめざして—

学びの主体は子どもたちである。児童が主体となる授業に向けて特に重要なことは次の二点である。

- ・習熟の違いや興味関心の度合いが異なる子どもたちが主体的に意欲をもって学習を進め、達成感を得るため、指導者はめあてと45分の学習後の姿を明確にして子どもたちに分かりやすく示すこと。
- ・子どもたちの習熟度や興味関心の違いに対応するためには教師主導の授業ではなく、対話による学び合いが不可欠であること。

日々の学びを確かなものにするために、本校ではこれまで総社市全体で推進している協同学習を学習の核に置き、学び合いを通じた思考力や表現力の育成、学習意欲の育成をめざしてきた。

(1) これまでの研究の経緯

- ・平成27年度…「自分の学びを表現できる児童の育成をめざして」～学び合いを通じて思考力・表現力を育む指導の工夫～（国語科・算数科）
- ・平成28年度…「自分の考えをまとめ、表現する児童の育成」～思考力を育てる授業づくりを通して～（算数科）

この2年間の研究を通して、低学年ではペアによる話し合い活動、中・高学年ではペアや学習班の協同学習での話し合い活動を重視してきた。その結果、自分の考えを友達に伝える力は育成することができた。しかしながら、協同学習の時間や練習問題に取り組む時間が十分とれず、思考力や算数科の学習意欲はなかなか向上させることができないという課題が残った。

- ・平成29年度…「仲間と関わり合いながら主体的・対話的な学びをする児童の育成」～学び合いのできる学級づくりと思考力・表現力を育てる授業づくりを通して～（算数科）

- ・平成30年度…「主体的・対話的に学び、考えを広げ、深めていく児童の育成」～互いに認め合いながら学び合う、児童主体の算数の授業づくりを通して～（算数科）

- ・令和元年度…「主体的・対話的に学び、考えを広げ、深めていく児童の育成」～聞くこと・書くこと・伝えることを大切にする授業づくりを通して～（低学年：国語科，中高学年：算数科）

各種学力調査からも、算数科の学力と学習意欲について課題が見られたため、平成28年度から教科を算数科に固定して研究を進めることとした。

(2) 平成29年度からの研究仮説

本校の課題を解決するためには、子どもたちがより主体的に学習に取り組む工夫が必要であると考え、「協同学習をより主体的・対話的な学び合いにすれば、児童の思考力や学習意欲が向上する」という仮説に基づき、協同学習を核にした学習スタイルを考えることにした。こうした中、話し合いの活性化をねらい、平成29

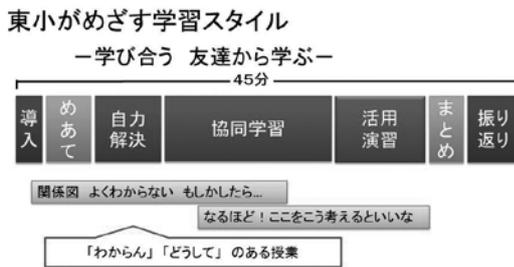
年度より「まなボード」を導入した。

(3) 東小がめざす学習スタイル

本校では、授業改善に向け以下の四点を設定した。

- ①児童主体で対話的な授業
- ②協同学習の充実と思考力・表現力の育成
- ③振り返りの時間の重視
- ④学力の定着

(4) 東小の算数科での学習の流れ



(図1)

「まなボード」を導入した平成29年度より、東小学校が算数科でめざす学習スタイル「東小スタイル」を設定した。(図1) 具体的な学習の流れと留意事項は以下の通りである。

- ①導入…授業の導入においては前時の活動を振り返り、前時の既習事項を確認し、新たな疑問や課題について簡単に話し合う。
- ②めあて…導入の振り返りを基に本時のめあてを設定する。本校では「めあて3分」を合い言葉にしている。授業が始まってめあて設定までの時間を効率よく行うことによって児童の学習意欲の低下を防ぐ。
- ③自力解決…既習事項を生かして、7～8分程度の時間で本時の課題を自力で追求する。効率よく机間指導し、つまずきの見られる児童を支援し、分からないところはどこなのかを明確にする。
- ④協同学習…10～15分、各自の自力解決した結果を基に学習班で話し合い、班の中での課題解決方法をまとめる。このとき、単なる情報交換ではなく、活動のねらいやゴールの姿を明確に示す。
- ⑤活用・演習…みんなで考えた課題解決方法を用いて演習問題に挑戦し、学習内容の定着を図る。
- ⑥まとめ…めあてに対する本時のまとめを考え、学びを文章化する。まとめの位置付けについては、活用・演習後に固定するのではなく、課題によつ

ては協同学習後に設定することもある。

- ⑦振り返り…「この時間に学んだこと」「感心したこと」「学習の仕方について」などの視点から自分の学びと友達との学びを振り返り、学びに向かう学習意欲を育て、一人一人に達成感をもたせる。

3 「まなボード」を活用した協同学習について

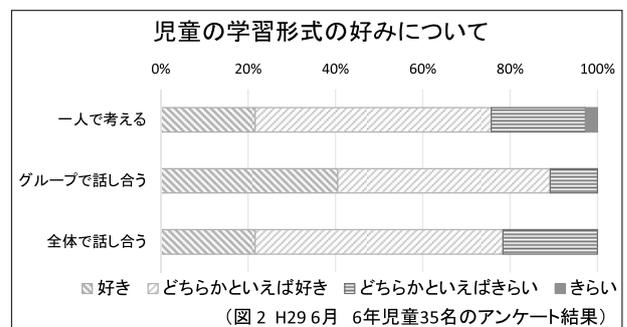
中高学年では、これまでも協同学習に重点を置いた学習を進めてきていたが、グループによっては話し合い活動が十分できず、自分の考えをグループ内で発表するだけで学習が終わる児童も数多く見られた。また、グループの考えをまとめる場面では、一部の児童がホワイトボード等に記入し、後の児童はそれを見守るだけで終わるといった姿も多かった。平成29年に岡山県総合教育センターの指導主事より、「まなボード」を紹介され、実験的に使ってみることにした。研究主任を中心として、「まなボード」の使い方を工夫することにより、協同学習が劇的に変化し、児童の思考力や学習意欲を大きく向上させる可能性があることに気が付いた。

(1) 「まなボード」について

東小が導入した「まなボード」は、簡単な仕組みの教具で、B4サイズの用紙2枚程度の大きさのストレッチボードにワークシートを挟むことができ書き込み可能な透明シートが付いている。裏面の磁石は掲示にも便利である。

(2) 協同学習での思考力・学習意欲の向上について

これまでの本校の研究実践において、子どもたちは算数の問題について、グループで考えることを好む傾向が見られた。(図2)

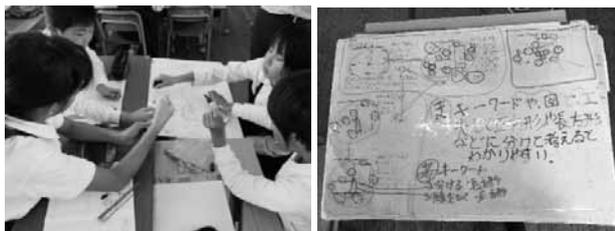


6年生は一人で考えることよりグループで考えることを好む児童が1.8倍。5年生は1.2倍、4年生は1.6倍という結果であった。(H29 6月調査) 本校児童は、

全体的に対話を好む傾向が見られた。これは、複数年に渡り、ペア学習や協同学習に重点を置いた結果であると考え。高学年では、自力解決できない不安や自信のなさもペア学習を好む一因であると考え。

こうした児童の状況を踏まえ、協同学習を充実させるためには、自分の考えを明確にして学習に参加することが必要であると考え、平成29年度より自力解決の時間と協同学習の時間を十分確保するよう努めた。課題は、協同学習でどのように一人一人の思考力を伸ばしていくかということである。

本校では、協同学習において思考の深まるプロセスを個々の考えを「要約すること」「分類すること」「関連付けること」「まとめること」と捉えた。協同学習では、児童が自力解決したワークシートを「まなボード」の透明シートの下に挟み込み、各自が自分の考えを説明した後、対話しながら四つのプロセスをシートに直接書き込むことにより思考が深まることを期待した。3年生から「まなボード」を導入しているが、互いのワークシートをグループ全員で見合いながら、同じ考えを青のマーカーで繋ぎ、異なる考えのものを赤のマーカーで記入することにした。指導者は、協同学習でめざすゴールの姿を示し、「わかったこと」「おすすめの考え方」など黒のマーカーで記述させるようにした。(図3) 各自に3色のマーカーを持たせることにより傍観者となる児童がいなくなり、非常に活発な学習が行われるようになった。



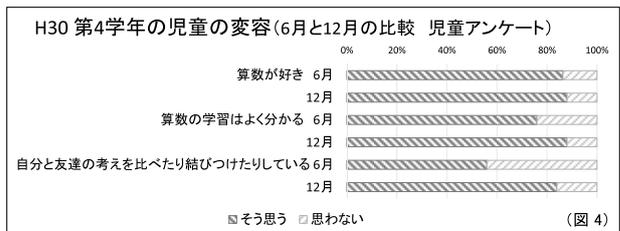
(図3 まなボードを用いた協同学習)

(3) 「まなボード」を用いた授業例

平成30年の校内研究で「まなボード」を活用した4年の算数科の授業を紹介する。めあて「L字型をした図形の面積の求め方を考え、説明しよう」について、自力解決した後、協同学習に移った。始めに各自の考えを紹介した後、同じ考えや異なる考えを分類した。

その後、求積方法を説明するため、各グループの活発な話し合いが続いた。「まなボード」を使うことで、各自の考えの共通点や異なる考え方が明確になり、全員の児童が学習に参加することができた。全体で話し合う場面でも、グループの学習の流れを示すことがで

きるよさがある。児童が見つけた「長方形や正方形に分けて考えればよい」をまとめとして、学びを生かす練習問題に取り組んだ。協同学習で追求する課題を示すことでまとめまで到達できるため、練習問題に取り組む時間の確保が容易になった。振り返りの場面では、この授業では、①自分の目標達成に係る自己評価、②「～を使えばとくことができた」、③「友達の考えのよかったところ」の三点を振り返りの視点とした。



この学年において、算数について6月と12月にアンケートを実施した。(図4)「まなボード」を用いた協同学習による学習はよく分かったと児童に好評であった。また、互いの考えを違いや同じ部分に着目し、比較して課題解決しようとする姿勢が身に付いてきていることは思考力を育成する上で大変望ましいことである。

4 成果と課題

(1) 「まなボード」を用いた協同学習の成果

大きな成果は以下の三点である。

- ・全員のワークシートを透明シートに挟み、対話しながら分類・要約・関係付け等を色別にマーカーで書き込みまとめていくことで全員参加のこれまでにない活気ある学習ができるようになったこと。
- ・班全員の学びを発表するため、相手意識をもち、分かりやすく伝えようとする姿が見られるようになったこと。
- ・算数の学習意欲の向上と思考力の向上。

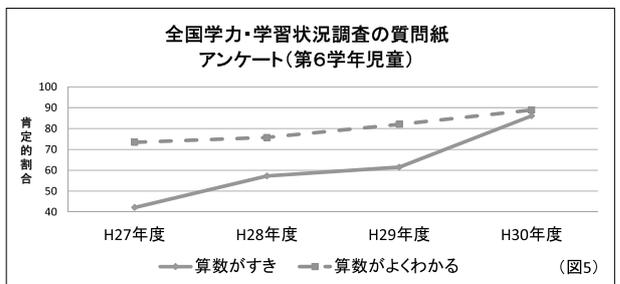
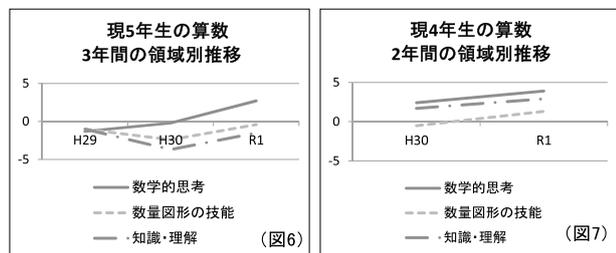
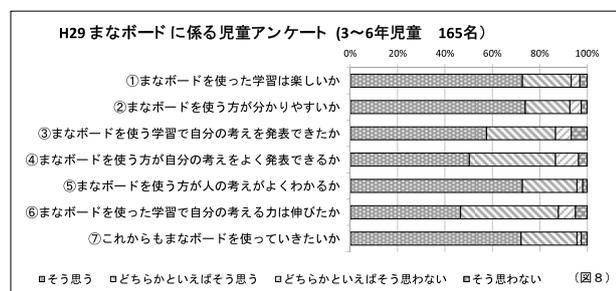


図5のグラフは、6年生の全国学力学習状況調査児童質問紙のアンケート結果の推移である。協同学習を通じて児童の主体性や対話的な学習の実践をめざした結果、理解度の向上や意欲の向上が認められた。思考

力の向上について岡山県学力調査の県平均値を0として領域別の推移を見ると、現在の5年生（図6）と4年生（図7）において、数学的思考の領域に顕著な向上が見られた。6年生においても、30年度の岡山県学力調査と今年度の全国学力調査の算数の標準スコアを比較すると、3.8ポイントの向上が見られた。

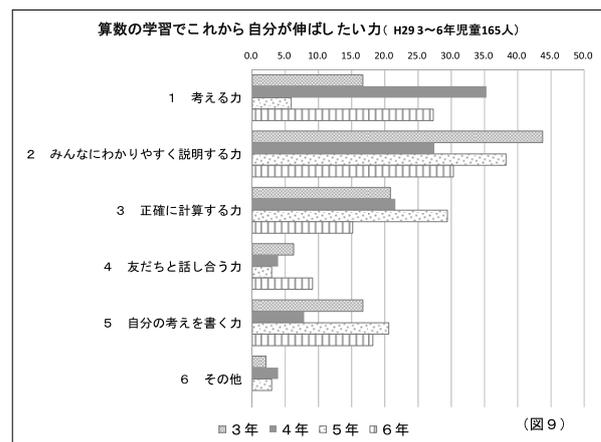


平成29年度に「まなボード」の活用について調査した児童アンケート（図8）では、すべての質問において肯定的な回答が85%を超えた。特に子どもたちにとって「まなボード」を使った学習では、友達の考えが分かりやすいという回答が多かった。普段の学習でも、協同学習時に、相手意識をもち、分かりやすく説明や発表をしようと努力している姿を目にすることが多くなった。話し合いを通して学び合うことを体感することができた結果であると考え。学び合いは、学習内容の理解を促進させるために非常に効果的である。



これまで本校が課題としていた、算数への意欲関心について実態を把握するため、3年生以上の児童にこれから算数の時間に自分のどんな力を伸ばしたいかアンケートを実施した。（図9）その結果、相手に分かりやすく説明する力を伸ばしたいと回答した児童が多かった。学年によっては考える力を伸ばしたいと回答した児童が多数を占める場合もあり、各学年での普段の指導の成果が反映される結果となった。また、協同学習での学び合いや振り返りを重視したことで、児童一人一人が学習を通じて自分の課題を把握し、さらに力を伸ばそうとする学びに向かう力の育成にも繋がったのではないかと考える。本校では考え方を説明する評価テストも実施しているが、「まなボード」を導入したばかりの3年生においても、考えを分類・比較し

ようとする姿勢が身に付いていることが分かった。



(2) これからの授業に向けての課題

多くの成果の得られた「まなボード」を使った協同学習であるが、ボードに挟み込むため常にワークシートを必要とする点は課題と考えている。しかし、話し合いの場面において、考えを比較して要約・分類し、まとめる学習には大きな利点がある。今後は、「まなボード」で対話しながら課題解決する方法をしっかりと身に付けさせ、様々な課題に対して友達と力を合わせて解決できる力を育成していきたい。

研究を通じて、改めて分かったことは、児童が主体的に学習するためには、協同学習で追求する内容を児童に明確に示すことである。協同学習のアウトプットを明示しておけば児童のモチベーションも維持することが可能であった。学習のまとめに当たる内容を追求するよう課題提起すれば、協同学習の成果がそのまま全体のまとめとなり、45分という限られた学習時間の中、練習問題や振り返りの時間を確保することが可能となった。協同学習を活性化することで、指導者が全体に指示したりまとめたりする時間も大幅に短縮でき、個別の支援も可能となった。思い切って協同学習を核にした学習に転換した結果、児童はこれまで以上に達成感をもつことができ、意欲の向上にも繋がった。

「まなボード」を使った学習は、若手にも授業のイメージがつかみやすく、授業を改善しやすいよさがある。

今年度は、これまで算数科を主として活用した「まなボード」を国語科や他教科でも活用したいと考えている。また、「まなボード」で学んだ学習解決の手立てを生かし、ノートを活用した協同学習の活性化にも取り組み、子どもたちの力を伸ばしていきたい。



ポジティブな行動で支援し、 非認知能力の育成で、^{あった}温かい集団作り

—PBISに向けた学年による先行実践から—

里庄町立里庄中学校 校長 池田 敬治

はじめに

里庄町は、岡山県の南西部に位置し、笠岡市の東に隣接している。国道2号線が町を二分するように東西に走り、2号線沿いには精密機械や食品などの会社が多く立ち並んでいる。また、現代物理学の父と呼ばれた故仁科芳雄博士生誕の地であり、仁科芳雄賞や科学講演会など、将来を担う子どもたちを称揚する様々な行事があり、教育には大変熱心な土地柄である。

そんな環境にある里庄中学校は、JRC（青少年赤十字）の理念を掲げ、「気づき・考え・実行する」をモットーに、通常クラス9クラス、特別支援クラス2クラスの合計11クラスの、落ち着いた環境の中にある中学校である。

それでも数年前には、感情のコントロールが苦手な人間関係を作ることが不得手な生徒が一部に見られ、そのためか不登校の出現率が高く、友だちへの暴力行為等のトラブルが多くみられる時期があった。

そこで、「二度とあのときの苦しい生徒との関係と指導を繰り返さない」を合言葉に、それまでの学校全般に関わる教育活動の方針や生徒指導を見直し、ベテラン教師の経験だけに頼る指導から、チームによる指導への転換を図った。さらにエビデンスに基づいた生徒目線での取組を図るべく、平成28年度より、キーワードを4つの「心」、**喜**・**怒**・**哀**・**楽**として、「自己肯定感を高める集団作り」を目指した。

キーワードは、「心」	
喜	分かる喜び、認められる喜びを感じられる。
怒	怒りを理解し、コントロールできる。
哀	人のつらさを理解し、相手を思いやれる。
楽	クラスや学校が楽しいと感じられる。

【取り組みの概要】

集団作り	
○SEL	自他の感情を理解し、社会性を高める等の授業の充実
○規範意識を育て、よりよい生活習慣を形成する道徳教育の充実	

〈各学年でSEL時間数目標を設定〉
◇中間目標の設定
・学活等を利用して学期2～3回実施
◇学年末目標の設定
・年間7回以上は実施

授業づくり	
○「分かった」「できた」を体験できる授業	
・ICTを効果的に使用した授業	
・アクティブラーニングの手法を取り入れた授業	
〈各担当で数目標を設定〉	
◇中間目標の設定	
・定期テスト得点など	
◇学年末目標の設定	
・得点や得点分布人数など	

また、校内の研究主題に基づいて、目指す生徒像を以下のように定めた。

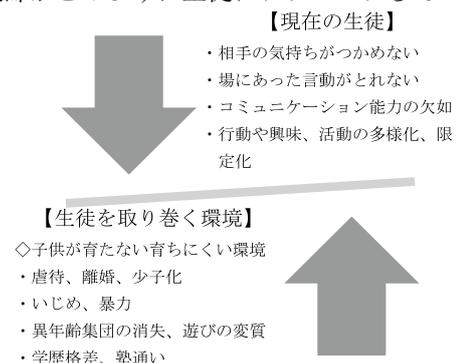
【目指す生徒像】

- ◇「分かった」「できた」を体験し、**意欲**をもって学習に取り組む生徒
- ◇**自分を大切に**に、**人を大切に**に、**思いやり**と**感謝**の心を持つ生徒
- ◇**責任ある行動**を身につけ、**心身ともに健康**な生徒

そこに、PBISを導入し、生徒の実態に合わせて生徒自身の手で自己肯定感を育て、教師と生徒によるポジティブな行動支援で里庄中学校の学習と生活をつくることを目指すこととした。

生徒指導の基本的な考え方

生徒が変わり家庭や地域の教育力が低下している現在、教師がどのように生徒にアプローチしていくかを



考えることは急務であると捉え、教師の目指す生徒指導を、生徒自身による「自己指導力の育成」とし、具体的な行動に着目し、望ましい行動を増やすといういわば叱責や禁止の指導ではなく、ほめて認める指導で生徒自らが自分の行動をコントロールしていく生徒指導を目標設定した。

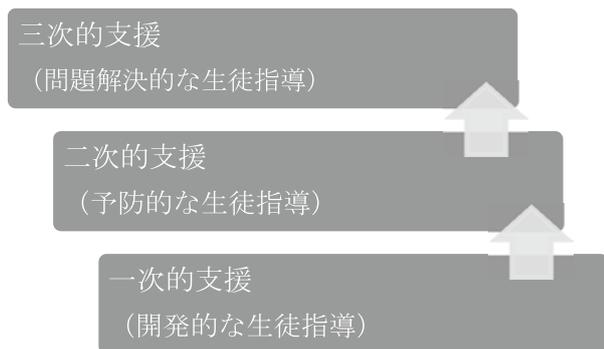
その育成のためのポイントとして、PBISに着目し、3つのポイントを示した。

3つのPOINT

- ① 時間と場所にあった行動を考える。
- ② 「～しない！」から「～しよう！」への転換。
否定的な言葉ではなく、肯定的な言葉で。
- ③ 少しでもできたことを評価する。

生徒指導（生徒支援）の考え方と手立て

一次的支援とは、すべての生徒に対して規範意識を育て、人間関係作りや社会的スキルの育成をいい、それを自分たちで行えるようにする指導（支援）である。



全人的成長を目指し、自己指導力を育成していくために、この一次的支援（開発的な生徒指導）があり、そのための、「褒めて・認めて・伸ばす」PBISやSEL、ピア・サポートやソーシャル・トレーニングにアンガーマネジメントなどの取組があるといえる。

だが、様々な活動領域や内容、場面で行われる生徒の、何をどう具体的に「褒めて、認め」、結果的に何を育ててきたといえるのか。

ここに昨年度の第一学年での取組を見ていきながら、その部分を考察し明らかにしていきたい。

「リアル通信」でPBIS

リアル通信とは、学年通信（昨年度一年生）のことである。「リアル」とあるように、リアルタイムに学年の様子を伝えた「生徒たちの日常通信」、学年だよりである。

5月10日に第一号が出され、その後一年間で約84回発行された。

A4版を基本スタイルに、日々の学校での生徒たちの様子と様々な学校行事や学習、生活についてのコメントが主な内容だが、特徴的なのは、そこに生徒の名前が『温かい』言動として取り上げられたことにある。



約84回の「リアル」に、延べ535名の生徒名が載った。学年の生徒数が支援学級を含め、93名であることを考えると、ほぼ全員を網羅し約6倍の回数となる。

これが第1学年による、PBISを意識した、自己肯定感を育てるためのポジティブな行動支援を目指した先行実践といえる。

「褒めて認める」効果的な手順と具体的な内容

教師がどのように生徒にアプローチし、生徒自身による「自己指導力の育成」をさせていくのか。それは、生徒のどんな具体的な行動に着目し、どう望ましいかを認め、褒めるかの手順と項目だといえる。

この「リアル」には、約100以上もの生徒の日々の学習や生活の様子や行事、委員会活動や部活動といった話題が挙がっているが、それを項目ごとに大きくまとめると、次のように分類される。

- (1)生活編 (2)学習編 (3)行事編 (4)委員会編
- (5)部活動編 (6)温かい生徒編

もちろんこれらに収まらないものもあるが、どれも日々の生徒を取り巻く生活や学習、活動の内容ばかりである。

また、大きな項目に関連した形で、「ロッカー整頓上手で賞」や「生活ノート丁寧で賞」、「提出物完璧だったで賞」や「本をたくさん借りたで賞」といったものがあり、それらが最終的に『温カード』へとつながり、さらにそれがたまることで得られる『ゴールドカード』へと結実していく。

「リアル通信」で培われたもの

ただ、ここで見逃してはならないのは、褒めて認める具体的な内容が、事前に生徒たちに告知され意識させられている点にある。「リアル」のコメントをつぶさに見ていくと、何気にそのようなメッセージに多く出会う。

例えば、二学期終了前には、「温かい学年にするための温かい人」として、

- ◇大掃除で、めんどくさい!?ことができる人
- ◇球技大会で、全員が少しでも楽しめ合える会に（いろんな協力があるよね）
- ◇学年集会で、人の話が最後まできちんと聞くことができる人
- ◇卒業式で、身なり・姿勢で気持ちが表現できる人
- ◇最後の学活で、友達に先生に「ありがとう」感謝の言葉が伝えられる人

その他にも、「卒業式に向けた～私たちにできること～」、「温かい行動は温かい準備が始まる」、「卒業式に向けての心得と準備」、「卒業式予行の様子と本番に向けて」の内容やコメントなどで、具体的な行動指標が示され意識づけ、動機づけがされている。

「リアル」に載った生徒はもちろん、それを目にした周りの生徒は、ただ褒められたのではなく、何を具体的に褒められたのか、そのことでどう周囲が温かくなったのかを知る。同時にコメントや丁寧な解説で、何を集団の一員として意識していかなければいけないかの規範意識や行動、態度を共に理解し感じていく。

褒めて認めた先に生まれたもの

生徒たちは褒められて「うれしい」から、次の「うれしい」の循環の中で、学校での学習や生活、集団に必要な、◇学習への意欲◇自他を大切に、思いやりと感謝の心◇責任ある行動を身につけた、心と体の健康を確認しながら培っていったことになる。

これらは、4つの「心」のキーワード、喜・怒・哀・楽による、「自己肯定感を高める集団作り」を通して求めた【目指す生徒像】に示されていたものであり、「意欲」、「思いやり」、「感謝」、「責任ある行動」、「心身の健康」といったものは、どれもメンタルな部分、すなわち、数値によって測りにくく現れにくいとされる能力、『非認知能力』といえる。

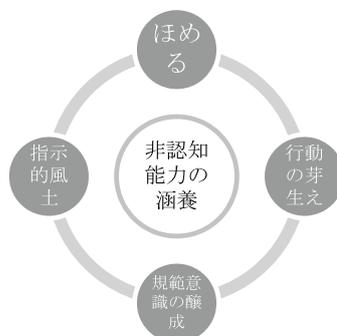
「学習への意欲」＝（学習に対するやる気や好きになる気持ち）は、当然自他を含む学習集団への「思いやり」や「感謝」へとつながる。そして学習規律をはじめとする様々な規範への「責任ある行動」につながっていき、「心身の健康」＝（ちょっとした心遣いができまた気づける、少々のことではくじけないしなやかな心と体のこなし方）を身に着けていくともいえる。

こうした「心」＝「非認知能力」の良好な循環こそが、「リアル通信」による、ポジティブな行動「褒めて認めて伸ばす」で支援するPBISの核心部分だったといえよう。

成果と課題

成果の考え方

教育活動の成果は、入れたものがすぐに形になって表れにくい、inputしたものが即座にoutputにならないという時間差の問題や、inputしたものが長い時間を経て形を変えてoutputされるという変性の問題を



含んでいるといわれる。しかしそれは、教育の特性ともいえるものであり、教育がエビデンスベーストのビジネスモデルではなく、独自の教育

モデルに依っていることを明らかにしているともいえる。

しかし教育活動が指標を持ち、ある効果を求めてなされる以上、成果を求める基準をもって一定期間のうちに評価されなければならないのも事実である。

「リアル通信」の成果

「リアル」がメンタルな部分、数値によって測りにくく現れにくいとされる能力、『非認知能力』を生徒たちの中に培ったとすれば、その成果は何でどう測るべきなのか。

通常こうした教育活動で考えられる成果は、ある特定の行為（褒めて認められるいい行為）が、数値的に増えていくということである。しかしここには、「行動チャート」を教師と生徒自らがともに示してその数をカウントしていくという活動はなく、客観的な数値結果は残念なならない。

ただ、学年後半での、第一回目「温カード」紹介から、それが数枚貯まってもらえる「ゴールドカード」獲得第一号が出るまでに、数日しかたっていない。また、その次回号には、「続出ゴールデンカード」として11名が獲得し、その後、「ゴールドカード（以下GC）紹介者」で8名、「GC紹介」で7名、「GC発行まじか」で6名、「今回のGC」で1名、「あなたたちもGC」で6名、最終的には、「GC合計57名」となる。この期間は非常に短い。ということは、短期間のうちに連鎖というより、一気に学年の空気（雰囲気）が変わったと読め、学年生徒の半数以上がGCを得たことにな

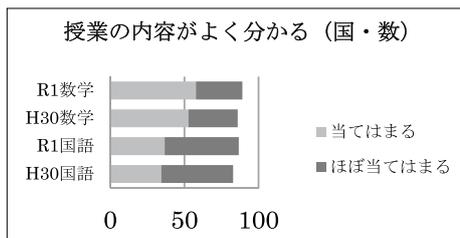


る。その後の学年行事の感想で、「誰かが何かを成功したときに、全員喜んでいたので、すごくよい雰囲気だった。」とあったが、まさに達成とその喜びに巻き込まれ、「そうしなければ損だ」と思えるような好循環の空気、すなわち支持的風土が生まれたと見ることができる。



学習成果として

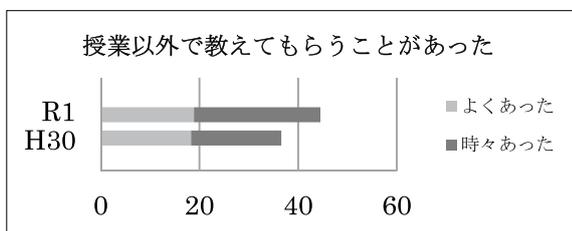
本年度の岡山県学習状況調査の経年変化を見てみると、国語では、応用について若干県平均を下回ったものの、基礎と全体については県と全国平均を上回っており、数学については、基礎が若干下回ったものの、応用と全体は県と全国平均を上回った。また、前年度との比較で言えば、前年度の国語では、ほぼ県とも全国ともポイント差がなかったが、今年度でいえば、3～1ポイント上回った。数学についても、昨年度は



県、全国とのポイント差はほとんどなかったが、今年度では、最大

で3.9ポイント上回る差があった。

生活意識調査では、1年生から2年生で上がった質問項目だったのは、「国語の授業はよく分かる」「数学の授業はよく分かる」「放課後など授業時間以外に先生から勉強を教えてもらうことができましたか」の項目であった。



その他、前年度とほぼ変化のなかった、「授業の中で目標が示されていると思う」「先生は授業やテストで間違えたところや理解していないところについて分かるまで教えてくれていた」「家の人と将来のことについて話すことができましたか」「学習によっていろいろな考え方ができるようになった」である。

学年が上がるほどに生活アンケートはどの項目も伸

び悩むことを思えば、特に1年生から2年生に上がる段階で、これらの項目に伸びや継続があったことは、学習することの楽しさや意欲として注目すべきことだと思われる。

今後への課題

応用行動分析という理論に基づいたPBISは、もうすでに先進的に取り組まれている学校がいくつもあるが、先行事例をもとに、「何を」(褒めて・認めて・伸ばして)、「どう見て」(褒めて・認めて・伸ばして)、「どこにつなげて」(褒めて・認めて・伸ばして)いくのか。また、捉えにくい意識や行動の変化、「向き合い」「高め合い」「つながる」能力といわれる「非認知能力」をどう見取り、効果として評価していくのかは、今後の大きな課題と言えよう。

また、里庄中学校オリジナルで、多面的な行動支援を考えるために、よりポジティブな意識や行動を促すための視点やアイデアを様々な事例から掘り起こし、教師や地域を含めた周囲の人たちの積極的で肯定的な支援(褒めて認める)によって、生徒の「できる・できた」から「よりよくなりたい」を増やし強化していく手立ても、これから急務の課題であるといえる。

最後に

生徒観、教師観、学校観が肯定的な意識に変われば、お互いの関係もよくなり、様々な教育活動に変化があるのは当然である。そしてそこには、自らが進んで楽しみ、学習や生活、活動できる好循環の中にある生徒がいて、集団が



あるはずである。なぜ私たちは、落ち着いた生活、学習環境をつくり、その好循環を求めるのか。それは、そこに「～し合う」という、自他を認める中で、支え、押し上げ、引き上げる、「学び合い育ち合う」という教育本来の力があるからに他ならない。生徒と生徒の、生徒と教師の、教師と教師の「育ち合い学び合い」にこそ、私たちが求めるPBISが、お互いが積極的に生きる、生かされる環境、学びの場があるといえるからである。



教職員の意識が学校を変える

—自主・協働のチーム制による働き方改革を通して—

赤磐市立山陽北小学校 校長 末長 光 人

I はじめに

2019年1月、中央教育審議会は「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について（答申）」を取りまとめた。そこには、学校における働き方改革の目的をはじめとし、勤務時間や業務内容等について具体的な方策が示され、これまでに例をみない学校現場に即した答申であった。

しかし、本校教職員の働き方改革に対する意識は希薄で、管理職が呼びかけてはきたが遅々として改革は進まず、その実感も伴わない状況にあった。

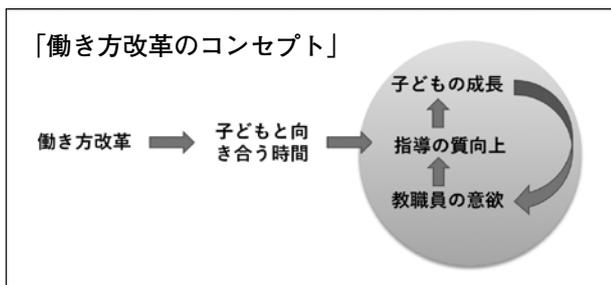
そこで、本答申を契機とし、本校における働き方改革の目的を明確にし、教職員が主体となり協働する働き方改革の取組を研究し、実践することにした。

II 研究概要

1 研究の目的

教職員が主体的に働き方改革を意識し、取組を進めることにより、子どもと向き合う時間の充実を図り、子どもの成長と教職員の意欲が相互に高まる好循環を育む（「働き方改革のコンセプト」(図1参照)）。

<図1>



2 研究内容

「教職員が自らの働き方を意識する取組を通して、教職員一人一人の自主性・協働性が高まるとともに、職務遂行における負担感、及び超過勤務時間は減少する」との仮説に基づき、実践と評価・改善を繰り返しながら成果と課題を明らかにしていく。

3 研究方法

- (1) 各学年3学級の職員構成を活用し、次の3つのグループで働き方改革プロジェクトチーム（以下

P Tと記す）を編成し、各P Tの提案、企画委員会の承認により取組を行う。

- ア 意識改革チーム
- イ 行事改革チーム
- ウ 事務改革チーム

- (2) 1ヶ月を見直しの期間とし、取組の評価・改善を繰り返す。
- (3) 教職員の意識調査等により効果検証を行う。

III 各P Tの取組

1 意識改革

- (1) 業務終了宣言

改善前は、各自が退庁時刻を「かえるボード」に記入していた。

現在は各学年団等のグループで各自が申告し合い、可能な限り業務内容をシェアし合い、学年団等で退庁時刻を

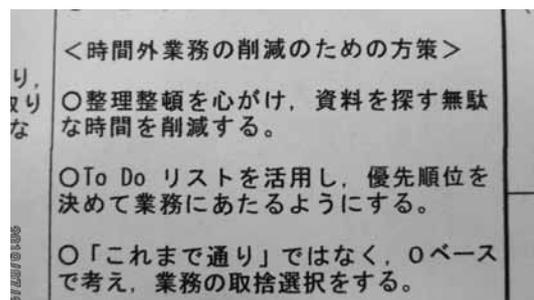


すり合わせ宣言している。記入ボードは、職務を単なる作業ではなく、業務として意識するよう工夫がなされた。

- (2) 自己目標シートへの位置づけ

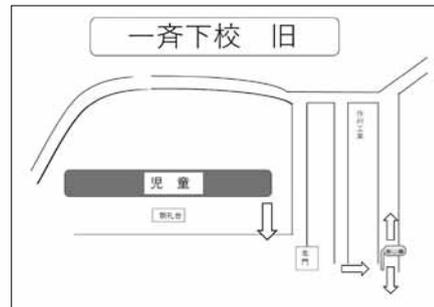
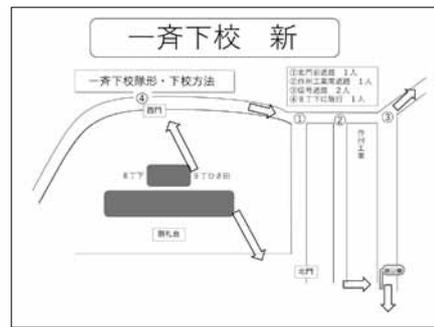
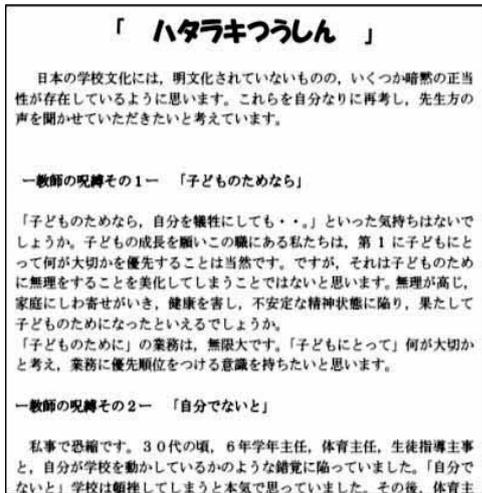
教職員の育成・評価システムで用いる自己目標シートの「校務分掌等」の欄に、時間外勤務削減のための方策を各自が記入することにした。当初面談は学年等の集団面談で行い、相互に情報共有を図った。今後、中間、最終面談で進捗状況や成果と課題について確認する予定である。

<自己目標シートの一例>



(3) 通信による啓発

管理職が中心となり次のような「ハタラキつうしん」を発行し、ミライム（教職員共有電子掲示板）を使って啓発に努めている。



2 行事改革

(1) 一斉家庭訪問の見直し

昨年度まで年度初めに行っていた一斉家庭訪問は行わず、自宅確認及び希望懇談に変更した。自宅確認は最短ルートで回ることができるため、要した時間は平均2時間であった。希望懇談は、保護者の約6割の希望があった。従来の家庭訪問と比較し、トータルで平均6時間が削減された。保護者対象のアンケート調査の結果、85%の保護者から肯定的な賛同を得た。日程調整や急な変更への対応を含めると、教員にとって大きな負担軽減につながったと考える。

(2) 運動会の見直し

本年度は、開閉会式の簡略化と種目の削減を行い、練習に要す時間と労力の軽減を図る予定である。現在PTAの役員会とも話し合い、次年度以降、午前中開催の方向で検討中である。

(3) 集合の見直し

従来、児童が集合する際、「黙ってすばやく」を約束としていたが、徹底はなされていなかった。そこで、行事PTが「北小サイレント集合」とネーミングし、「静かをつくる」を合言葉に全教職員の意思統一の徹底化を図ってきた。特に、全校朝会や一斉下校での変化が顕著で、集合に要す時間短縮のみならず、厳粛な雰囲気の中、真剣に話を聞く態度も育ってきている。併せて、次の図のように一斉下校の方法も変更した。

3 事務改革

(1) 通知表所見欄の省略

1学期末に保護者全員を対象に個人懇談を行っていることから、通知表の1学期の所見欄への記述を懇談での説明に代えることにした。本件について保護者からの問い合わせや苦情は皆無であり、担任からは大幅な負担軽減になったと好評を得た。

(2) 学校日誌・卒業証書の電子化

これまで学校日誌は、日直や事務職員が全て手書きで記入していた。校内行事や出張が多い日は、記入に相当な時間と労力を費やしていた。そこで、学校日誌の電子化を図り、教務主任が作成していた校内行事予定表と、教頭が作成していた勤務管理表をリンクさせ日誌に反映するようにした。これにより、記入者は日付を入力した後、その日の出欠等を入力するだけでよかった。

<学校日誌の一部>

令和元年 7月22日(月)		ダブルクリックで日付を入力し曜日を入力不要!	正社	嘱
姓	名	教	職	種
＜行事及び記事＞				
赤松教室	9:00-11:30			
夏休みプール教室	16-9:00			
ハイパーQひばり教室	13:30-16:00			
コンクライアブス部	16:30-18:00			
第1回校内地学発表会	16:00-18:30			
発表者の監視				
講師の監視				
プール当番	体育部			
学年	班	出席	欠席	欠席
		男	女	男
1	た	3	2	
	ひ	3	1	
	ひ	7	1	
	ひ	8		
2	点	15	13	
	B	15	13	
	C	15	13	
3	点	11	14	
	B	11	14	
	C	11	13	
4	点	12	14	
	B	12	14	
	C	11	14	
5	点	12	13	
	B	12	13	

卒業証書もこれまで手書きで作成していたが、PTA役員会での賛同を得て、印刷業者との交渉により、児童名簿からの差し込み印刷で作成することにした。手書きのよさは失われることになるが、手書き、押印、乾燥等の作業を考慮し、決定した。

(3) 留守番電話対応

これまで時間制限のない電話対応を行っていたため、勤務時間外に必ずしも必要としない対応に追われる傾向にあった。そこで、PM6時から翌朝7時30分までを留守番電話での対応にした。併せて非通知着信の拒否設定も行った。現在は、留守番電話設定をし忘れていても外部からの着信はなく、また本件について一件の苦情等も届いていない。

(4) 「よく分かる山陽北小」の作成

学校には、様々な約束や規則が存在し、問い合わせに対する対応に苦慮していた。そこで、こうした情報を1枚のプリントに集約し、教職員及び各家庭に保存版として年度初めに配付した。以来問い合わせは格段に減少し、誰が問い合わせを受けても速やかに対応ができるようになった。

(5) その他

- ・電子掲示板を活用した連絡・共通理解
- ・各種会議のタイムテーブル化
- ・保護者対応における時間制限（30分以内）

IV 自主・協働性の芽ばえ

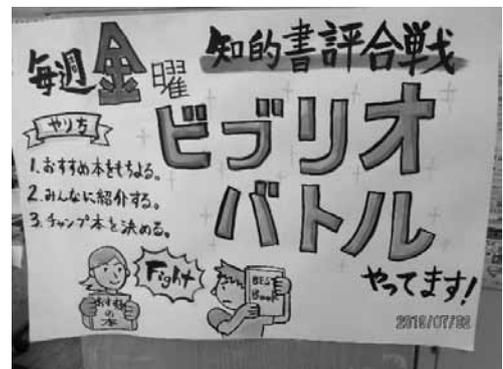
1 下からの働き方改革

これまで述べた各PTの取組は、管理職からの指示によって始まった、いわば上からの働き方改革だといえる。しかし、II-2「研究内容」で述べたように本研究は、最終段階として教職員から

自発的に改革の提案がなされ、賛同者を誘発することで協働性が育まれることを目指してきた。そのため、各PTにリーダーは置かず、また情報交換会以外の会議開催の時間や場の設定も行っていなかった。こうした中、自主・協働的な活動、いわゆる下からの改革が次第に見受けられるようになってきた。その最たる活動が「この指研」である。

「この指研」とは、「この指とまれ」のように、いつでも誰でも提案・リクエストができる自主研修である。提案者は、ミライム（電子掲示板）やポスターで参加者を募る。教科指導をはじめ、「夢中になる運動ゲーム」「保護者対応」「いい汗流そう」「ビブリオバトル」等々、これまで様々なジャンルの研修が行われてきた。

＜職員室に貼られているポスター＞



中でも次の案内にある「自分でできる働き方改革～教師も子どもも笑顔になるために～」が開催された。校内外から16人の参加者があり、提案者の進行によりワークショップ形式で研修が行われた。正に目指してきた自主・協働の教職員の姿だった。

＜「この指研」の案内＞

2019/4/26

平成31年度
山陽北小「この指研」(自主研修会)
レベルアップ研修会の案内

新年度が始まり、僅たしい毎日を通じておられると思います。さて、本年度も放課後の時間を使って、自主研修を行います。月1～2回のペースで開催していきます。

仕事場や保護者対応、生徒指導の基本、道徳科を中心とした授業づくり等々、明日から使えるものやすぐ使える内容を扱う予定です。ちょっと勉強したいと思われている先生方、指導に悩んでいる先生方、何かヒントが見つかるかもしれません。一緒に学んでいきましょう！皆さんの参加をお待ちしています。開催場所は山陽北小学校ですが、他校の先生も参加可能です。ぜひ誘ってみてください。

第1回 5月10日(金)18時～19時
場所: 赤穂市立山陽北小学校 6年C組教室

「自分でできる働き方改革
～教師も子どもも笑顔になるために～」
山陽北小学校 森山陽介

＜参加方法＞
○山陽北小の先生は、ミライムのコメント欄に書きこんでください。
○他校の先生は、北小の先生に直接連絡をお願いいたします。森山までご連絡ください。
森山: fliflollow_26ers@yahoo.co.jp

＜備考＞
○校内事情により、急遽中止となる場合があります。その際は連絡をします。

2 拡がる自主・協働的な活動

自主・協働的な活動は、「この指研」に留まらず様々な活動へと拡がりつつある。例えば、「シャワー室を使えるようにしませんか」の呼びかけに多くの有志が賛同し、それまで物置となっていたシャワー室が見事によみがえった。教室以外のワックスがけ、トイレ掃除、廃材整理など、これまで長期休業中に職員作業として設定していたことが、「この指研」のような形で行われている。現在（夏季休業中）は、水泳指導前の45分間、「朝活」と称し体育館で軽スポーツが行われている。



3 自主・協働性の象徴

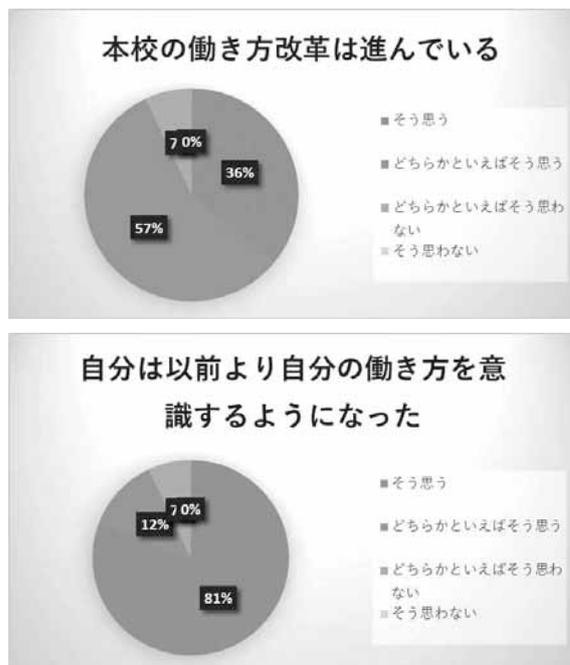
「新しい北小シャツと帽子をつくりませんか」の呼びかけに、ほとんどの教職員が賛同した。さらにその提案には続きがあり、「ただし自分の好きな色で」だった。こうして、デザインは同じでも十人十色の北小シャツが誕生した。自主性を重んじながら協働性を尊ぶ、そうした本校教職員の自主・協働性の象徴ともいえる。



V 取組の成果

1 教職員の意識の変化

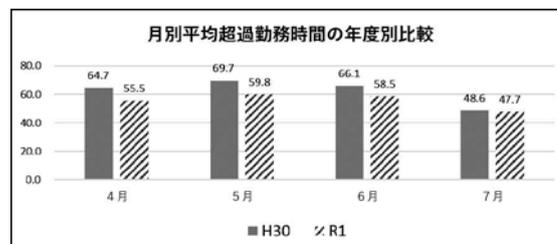
次のグラフは、本校教職員に対して行った意識調査（令和元年8月）の結果である。



取組期間が短く、経年変化を見ることはできなかったが、どちらの質問も肯定的な回答は90%を超えていた。働き方について、教職員の意識は着実に変容しつつあると考える。

2 超過勤務時間の減少

次のグラフは、4月から7月までの教職員一人あたりの平均超過勤務時間について昨年度と比較した結果である。



7月期は夏季休業に入るため、変化は認められないが、その他の月については、昨年度と比較し、10時間程度の減少となった。しかし、本校教職員の超過勤務は、未だ喫緊の課題である。

VI おわりに

「学校が楽しい」という声が、教職員からも子どもからも聞かれるようになった。「8月末の職員会議の昼食はバーベキューにしませんか」との提案が出されている。「この指とまれ」的な活動がさらに充実し、本校ならではの自主・協働の文化が育まれるよう、今後もチャレンジしていきたい。



体力向上を突破口に生活意欲を高め、 生きる力を育む学校づくり

—若手を生かすOJT組織の構築から—

真庭市立落合小学校 校長 奥山 仁

1 はじめに

現在、教員の大量退職が続き若手教員が急増している。それに伴い指導力・学級経営力の未熟さが新たな教育課題となっている。若手教員は、職場に活気を与える効果がある一方で大きなリスクにもなる。

また、児童生徒数が減少する中、不登校児童生徒数は平成24年度を底に上昇傾向に転じ過去最多となっている。これは、脱ゆとり教育を謳って学力向上へと舵を切った時期に重なる。次の表は、全国学力・学習状況調査（小学校）の平成21・31年度の高知県・沖縄県の順位だ。両県とも急激に順位を上げているが不登校の多さも最上位を争っているのは偶然だろうか。

県	学力H21→H31	不登校出現率
高知	44位→16位	H27小中計7-81位
沖縄	47位→6位	H27・28小7-81位

岡山県も例外ではない。学力向上をめざす取組の陰で体力の急激な低下と不登校児童の増加を招いている。

新学習指導要領で育てたい力は現行学習指導要領と同じく「生きる力」である。「生きる力」とは、知・徳・体のバランスのとれた力のことだ。前述のようなバランスを欠く実態は、大きな問題である。

これらは本校の学校課題そのものでもある。

本論文は、若手を生かしたOJT組織の構築により、体力向上を突破口にして、知・徳・体をバランスよく伸ばそうとした「生きる力」を育む取組である。

2 研究を始めるにあたって

本校は、スーパーや病院、公共施設に恵まれ利便性は良い。児童の3割が新興住宅地から通うが、地域コミュニティが機能し、保護者や地域から学校への協力が得られやすい。児童の学習意欲は高くないが、相対的に落ち着き学力はふつうである。ところが運動の苦手な子が非常に多く、10年以上にわたり新体力テストの結果が芳しくない。また、不登校児童はいないが、中学校へ進学後、毎年のように不登校になる子がいる。

さらに、若手教員の育成は急務である。毎年新任者

が配置され担任の平均年齢は30.4歳である。

(1) 本校の課題

- ▲児童の体力が非常に低い
- ▲児童の学習意欲・生活意欲がやや低い
- ▲指導経験の浅い担任が多い

(2) 仮説

学校課題の解決をめざし、「生きる力」を育むために以下の仮説を立てた。

- 体力で自信がつくと生活全般の意欲が高まる
 - 生活意欲が高まると、友達関係や学習意欲も高まる
- また、若手教員と「体力向上」は比較的親和性が高く、結果が目に見え指導者の達成感を得られやすい。そこで、研究テーマを以下のようにした。

体力向上を突破口に生活意欲を高め
生きる力を育む学校づくり
～若手を生かすOJT組織の構築から～

(3) 「生きる力」を育む、組織でほめるシステム

校務分掌の中心となる三部会（教務・研究部、保健・体育部、生徒指導部）が連携し、それぞれの立場で研究を意識した取組をする。研究内容は次の通り。

- ①教務・研究部：伸びを実感するシステム(知・徳・体)
- ②保健・体育部：家庭連携体力向上システム(徳・体)
- ③生徒指導部：人の温かさを実感するシステム(徳)

(4) 検証方法・指標

- ①体力：新体力テスト
- ②生活意欲：Q-U
- ③学力：NRT
- ④学習意欲：Q-U
- ⑤その他、アンケートや作文等。

3 研究の実際

新体力テスト結果から運動がとても苦手（E段階）な児童15名の内9名が低学力（NRT45以下）だった。また、Q-U満足群が60.7%の時、同じく10名が満足群をはずれていた。勉強も運動も苦手、居場所がない子は高い確率で重なる。体力向上をきっかけに生きる力の弱い子に対し、学校の組織力を総動員し、知・徳・体をバランスよく伸ばすことに力を注いだ。

(1) 教務・研究部 伸びを実感するシステム

① 時程の見直し 自由時間の増加

特に、体力づくりにつながる時間を生み出すために次のような見直しをし、PTAや保護者の理解を得た。

- 朝自習と放課後学習を統合し朝学習に
⇒メリット：昼休みの自由時間が10分増加35分に
- 水曜日の掃除をやめロング昼休み（50分間）に
⇒同：自発的遊びが増えることで友達とのかかわりや運動時間が増える。若手が運動場へ出ることが増え、ベテラン教員も自然に運動場へ出るようになる。
- 登校後の朝の自由時間に外遊びを奨励
⇒同：外遊びをする子が増え学習への集中力が高まる

② 組織の見直し 若手を生かすOJT組織

若手教員は、仕事の優先順位を決め軽重をつけて取り組むのが苦手である。そこで、注力すべき点がわかりやすくなるよう単純化したものを提示した。また、失敗してもフォローがある組織にして安心させた。

【単純化】 特性を生かす

- 支援対象は、勉強や運動の苦手な子・居場所のない子
- 授業を通し子ども同士が仲良くなる方法を学ばせる
- 運動量・問題量を2倍にする授業を45分の中で
- 逆上がりができ、二重跳び50回以上を跳べる子に
- 漢字テストでは全員に100点をとらせる
※国語の言語事項(NRT全国比)105以上を目標に
- すきま時間の活用（健診等の待ち時間に漢字ドリル）

若手教員の長所はなんといっても若さである。体を動かすことを厭わず、挑戦意欲が高い。そこで、上記のような単純化した経営方針や指示に努め、職員会議等で口癖のように伝えてきた。

【助け合う組織】 チーム連携評価

低中高学年に各1人の副担任をつけ、集金や会計業務を担当したり、若手の相談にのったり担任業務の負担軽減をはかった。また、校務分掌では複数担当者を配置し、教職員育成評価において次の点を強調した。

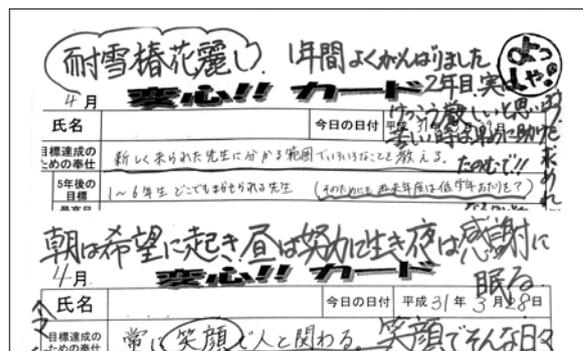
- 教職員育成評価は、個人評価+チーム連携評価
- 目標シートに目標とする先輩や育てたい後輩の名前と具体的な取組を挙げる
- 人生の評価者は校長ではなく、あなたの家族である

③ チャンスをちりばめ ほめて ほめて・・・

若手を育て生かすために職員研修・初任者キャリア研修を大切にしたい。初任者2年目の体育主任、20代の研究主任などやる気と適性を見極め挑戦させた。

【変心カード】 初任者キャリア研修

初任者を含め、勤務経験の浅い職員に対し変心カードによる研修を進めた。毎月、A4用紙1枚に大・中・小目標と日常的に達成できる目標等を書き込み、達成予定日を入れて校長に提出した。校長は赤ペンで励ましや助言を書き込む。教師である前に「どんな人生を歩みたいのか」という問いかけを大切にしたい。見通しを持たせることがポイントである。初任者の親や家族にも連絡をとり励ましや感謝を伝えることもあった。



【炎のラジオ体操講習会】 地域に若手の活躍の場を

夏休みラジオ体操は、生活リズムをつくるうえで大切にしたいが、多くの地域で消滅の危機にある。PTAや町内会の協力を得て体力向上の機会として夏休み直前に実施。若手教員は事前にNHKラジオ体操指導者の講習を受け講習会の中心指導をしている。

炎のラジオ体操講習会で指導者を務める若手



令和元年7月13日（土）

児童・保護者・地域住民約100人が参加し、夏休みを迎える良い動機づけになっている。また、地域によっては子どもの数より大人が多い地区もある。

④ 生きる力 学習意欲向上のために

学習意欲がやや低く、自主学習への取組が弱かった。そこで、以下の取組に力を注いだ。

- 自主学習：宿題として2年生以上は毎日1P以上
- 漢字：朝学習、すきま時間の活用で確実な定着を
- 新聞投書：3年間で40名を目標（現在33名）
- 校長宿題：「校長先生を驚かせる取組」という条件で春夏秋冬休みに勉強や運動、自由研究などに挑戦

模範的な自主学習や漢字学習の取組は、児童玄関に掲示し、月ごとに張り替えている。新聞投書や校長宿題は、特に挑戦意欲を刺激するように投げかけている。6年生では三重跳びを12回も跳ぶ子が現れるなど、全校的な挑戦意欲の高まりを感じている。

(2) 保健・体育部 家庭連携体力向上システム

すでにある組織や取組を生かしつつ、効率が上がるように工夫し取組方法を見直した。

① 生きる力の弱い子の把握

組織として支援すべき子を明確にするために、年度初めには学力や発達に課題のある子の情報を共有している。さらに、Q-U検査実施後すみやかに、要支援群や長期欠席傾向の子を情報共有した。生きる力の弱い子の確実な把握のためである。

② 校内運動サーキット 運動を生活習慣に

休憩時間や移動のついでに様々な運動に挑戦できるよう校内に運動コーナーを設置した。コーナーは、バトン投げ、ストラックアウト、ダンス、垂直跳び、幅跳び、縄跳び（ジャンプ台）、逆上がり（段階別補助台）などである。特に、最も苦手とする投力の向上をめざして8か所に設置した「めざせダルビッシュ・大谷翔平コーナー」は大好評である。学校に来たついでに親子で挑戦する姿をよく目にするようになった。この取組の成果は顕著である。平成26年度から29年度まですべての学年が全国平均を大きく下回っていた。しかし、今年度は男女ともに2学年が全国平均を超え、すべての学年が全国平均との差を大きく縮めている。



③ 逆上がりキャンペーン 運動のきっかけづくり

逆上がりは努力種目だが1年生にも可能だ。体力づくりの良いきっかけにもなる。そこで、毎学期1か月程度、長期休業中は3日間の特別キャンペーンを実施。平成29年度の1学期にはできる子は33.7%だった。平成30年度の1学期には50%を超え年度末には73.1%の子ができるようになった。練習のコツは無理をさせず、「朝、業間、昼休みに3回挑戦」することだ。遊びの

ついでに挑戦する習慣づけを奨励している。

④ あるものを効果的に生かす

【マラソン大会・水泳大会の復活】やる気の充填

働き方改革と逆行するイメージを持つかもしれないが体育の授業で実施していたものを、2学年合同の授業で大会形式にし、保護者の応援を可能にした。これだけで、子どもたちのやる気は一気に高まり自己ベストが続出した。大切なことは、最小限の負担でいかに子どものやる気を引き出すかである。

【自然の中でこそ】

本校には、PTAが作った山のアスレチック（ジャングルランド）がある。自然の中で遊びながら体を鍛えてほしいとの願いからだ。50年の歴史がありながら、近年はほとんど活用されていなかった。そのジャングルランドを整備し年間30回以上も活用するようになった。子どものためを思った先人に感謝である。

【そうじ時間も体力づくり】

机・椅子の移動、床拭きなど、場所によりかなりの体力が必要だ。清掃活動本来の目的から外れてはいけないが、敬遠されがちな床拭きは体力づくりの観点からも大切にしたい。



⑤ その他

運動も習慣化されると負担感がなくなる。毎日の宿題にスクワット（1分運動）、体育授業の導入はリズムジャンプという習慣化である。入学説明会や子ども園の卒業式では学校だより「1分運動特別号」を配布し、運動の大切さを就学前から保護者に訴えた。

(3) 生徒指導部 人の温かさを実感するシステム

後追いの生徒指導ではなく、積極的生徒指導の一環。児童の良い面に目を向け、ほめることに徹する取組。

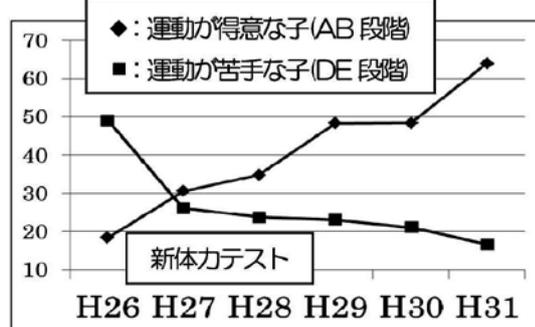
① ほめほめカード

自己有用感・肯定感を高めるために、全職員で模範的な行動をした児童に対し手渡している。「生きる力」の弱い子にこそ、カードが届くよう組織で配慮している。宝物ファイルに保管したカードを満足そうに眺める子が多い。子ども同士でカードを渡したり、PTAも参加したりする想定外の活用も広がっている。

② ほめる手は多いほど・・・

ほめるチャンスを増やすために関係機関の力も借りている。可能な限り作品応募や研究などに挑戦できるようにし、科学研究や二宮金次郎賞では受賞常連校となっている。スポ少や音楽発表での活躍も紹介している。ほめる手は多いほど良い。このほか家庭でのふれあいと役立ち感を高めるための「お手伝いマッサージカード」、校長が特に良い行いを表彰する「落小魂MVP」や廊下には子どもたちの「ほめほめ写真」もある。また、毎日黒板に書かれる担任からのメッセージは感動的である。ありがたいことに次のような感想が届く。

毎日黒板に子ども達の頑張りやいいところを書いてくださる先生の思いには頭が下がります。あれだけのことを書こうと思うと日々を何となく過ごすのではなく一人一人を意識して見ていないと書けません。学校全体で子どものいいところを見てくださっているのかなと思います。(保護者感想)



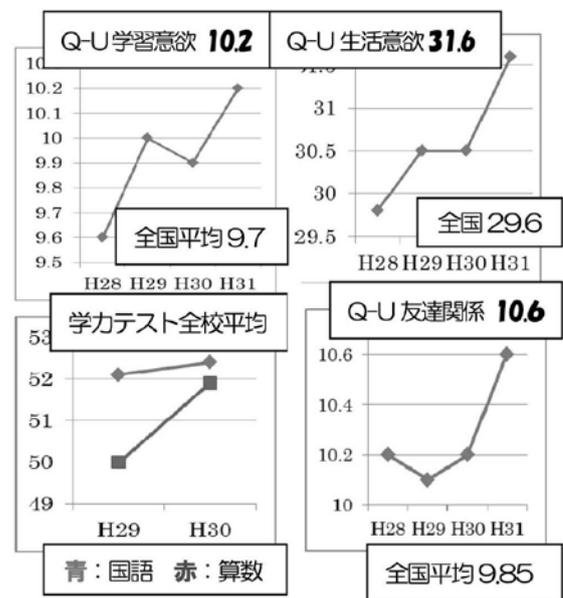
4 成果と課題

「生きる力」を育むための検証指標すべてがプラス評価となった。新体力テストでは、記録が残る11年間で最高の数値である。運動の得意な子（A B段階）の増加だけでなく、苦手な子（D E段階）が大きく減少したことがうれしい。それは、「生きる力」の弱い、勉強や運動の苦手な子・居場所のない子を意識して支援してきたからだ。生活意欲も31.6と最高値となった。また、友達関係や学習意欲も最高値だ。さらに、学力も国語、算数ともに上昇傾向にある。

体力で自信がつくと生活全般の意欲が高まる。生活意欲が高まると、友達関係や学習意欲も高まる。指標データを見る限り「生きる力」を育むための何らかの効果はあったと信じたい。人は自信が持てるものが一つであれば、誰でも生活意欲は増すはずだ。そのきっかけに体力向上を手段として選んだだけである。

逆上がりや二重跳びができるようになった経験は、必ず学びに向かう集中力や自信に繋がるはずだ。

また、若手の育成は簡単ではないが、国語の言語事項の成績は、ベテランの学級と遜色がなかった。愛心カードを通した教師としての使命感の高まりも感じている、A教諭は、こう誓っていた。「妻への感謝を言葉にし、地域でも職場でも頼りにされる教師になる」と。



課題もある。運動がとても苦手なE段階の子が一定数存在し、ほとんどが新生児だったこと。就学前の体力作りについて子ども園等と情報共有する必要がある。

また、大きな人事異動は脅威である。学校力の低下を招く危険が大いにある。「A先生は力をつけたね」とほめてもらう一方で、教職を断念する先生の姿には心が痛んだ。人材育成は永遠の課題である。

文科省は子どもの体力低下の原因に「保護者をはじめとした国民の意識の中で、子どもの外遊びやスポーツの重要性を軽視するなどにより、子どもに積極的に体を動かすことをさせなくなった」ことを挙げている。この研究を通し改めて感じたことは、「勉強以外を軽視すると生きる力が弱くなり勉強さえできなくなるのではないか」ということだ。今後も知・徳・体のバランスを大切に育んでいきたい。



自立した大人になるために小学校で 身に付けておきたいこと

—異校種間交流から見えてくる課題に取り組んで—

赤磐市立笹岡小学校 校長 秋山祥子

1 はじめに

本校は、児童数25名、複式学級3クラスの小規模校である。学区は静かな農村地帯であり、地域は学校の活動に対して協力的であり、様々な活動に参加してくれている。児童の多くの家庭が三世同居かまたは祖父母が近くに住んでいる。保護者も学校に協力的で、PTA行事も盛んである。そのためか情緒的に安定している児童が多く、素直で明るく、指示されたことに一生懸命取り組める。

しかし、平成29年度に赴任した当時、小規模校ならではの課題もいくつかあった。その中でも次の2点が特に気になることであった。

- ① 笹岡小学校から中学校に進学した児童が毎年不登校になっている。
- ② 全国学力学習状況調査や岡山県学力調査では、途中までしか解いていない児童が多く、基礎学力が身につけていない。

そこで、平成29年度から今日まで、次の二つの目標を決め、中学校で指導教諭として国語を教えていた経験や生徒指導、教育相談、不登校を担当した経験、特別支援学級（知的・情緒）の国語を教えた経験等を生かして課題解決のための取り組みを行った。

【目標】

- ・ 中学校進学後に不登校になる児童を0にする。
- ・ 平成29年度に特に課題の多かった4年生の学力を全国平均まで引き上げる。

目標を決めた後、担任・養護教諭・管理職で学校分析を行った。

学校分析の結果として次のことが分かった。

（笹岡小の強み）

- ・ 地域と保護者は学校に協力的である。
- ・ 明るく素直な児童が多い。
- ・ 異学年集団で活動することが多い。
- ・ 高学年が中心となって、自分たちで学校をよくしていこうという取り組みを続けている。

（笹岡小の弱み）

- ・ 人間関係が固定しており、競争心・向上心に欠ける児童が多い。
- ・ 教員も保護者も過保護である。
- ・ 語彙力が不足しているためか、自分の思いをしっかりと伝えることができない児童が多い。
- ・ 計算力が十分でない児童がいる。特にスピードについては遅い児童がほとんどである。
- ・ 本を読む児童と読まない児童の差が大きい。

これらの分析から次のような仮説を立てた。

【仮説】

- ・ 予防的な指導を行ったり、いろいろな人と触れあったりすることで人間関係が高まり、不登校になることはないのではないか。
- ・ 読解力、計算力が充分身につけていないため、問題の途中までしか解けないのではないか。そのため、語彙を豊かにし、読むスピードを速める取り組みが必要である。また、計算については、正確性と共にスピードを身に付ける取り組みが必要である。

2 研究の概要

(1) 不登校になる児童を0にする取り組み

赴任当初、本校の児童が進学する中学校で、本校から進学する生徒が毎年一人不登校になっていると聞いた。進学先の中学校には、本校を含め3小学校の児童が進学するが、他の小学校は毎年不登校になることはない。

そこで、小学校の時の担任に話を聞くと、小学校当時も多少トラブルもあったものの、周りの児童の協力もあり、大きな問題はなかったということだった。

今まで勤務してきた中学校でも、小規模校から入学してきた生徒の中に、小学校では登校できていても、中学校になって不登校等のトラブルを抱えてしまう生徒が多くいて、原因は少人数で人間関係が固定しているためと予想していたが、それ以上不明

だった。

しかし、小規模校の小学校に赴任して初めて、次の2つが原因ではないかと考えるようになった。

- ・保育園から小学校までクラス替えもなく、一緒に育つためお互いのことが分かりすぎ、問題が起こらないように周囲が動くため、本人・保護者はあまり困ることがない。
- ・児童の数が少ないために目がしっかり届き、教職員が過保護になりすぎて、児童の負担を少なくしよう、問題が起こらないようにしようと先回りして動く。

そこで、この課題を解決するため、次のことに取り組んだ。

① 晩会の持ち方の見直し

トラブルを担任だけで解決しようとして、結果的に問題が大きくなるまで表面化しないことがあるため、どんな小さなトラブルでも、何か変化や気になることがあった場合は、晩会で報告するように改善した。情報を共有して、誰でも同じ指導をすることが出来るようになった。また、情報交換の場を設けたことで、担任だけでなく、事務職員などからも気になる児童の情報が入り、児童理解がより深まった。

② 予防的な取り組み

(ア) 課題の明確化

現在の状況から、中学進学後に生活態度や人間関係などでトラブルを抱えそうな児童について、小学校卒業までにクリアすべき課題を担任・生徒指導・管理職で話し合い、全職員が共通理解の元に指導を行った。また、児童にどう支援をするのがいいのを知るために、岡山県総合教育センターのアセスメントシート分析パッケージを使った。日頃から気にしている児童だけでなく、他の児童についても支援の必要性が分かり有効であった。

(イ) 挨拶の徹底

人間関係の基本は、挨拶だと思う。校内で教職員には大きな声で挨拶が出来ても校外で地域の方に挨拶が十分出来ているとは言いがたい状況であった。児童にそのことを話すと5・6年生が学校をよくする取り組みの一つとして、挨拶リーダーの取り組みをした。登校班の中から一番挨拶の声が大きい児童がリーダーになり、手作りの腕章をする取り組みだが、低学年はリーダーに選ば

れたり腕章を付けたりすることがうれしいようで、この運動をきっかけに大きな声で挨拶できるようになった児童も多い。

また、職員室に入る際、用件を述べない児童が多かったことから、学年・名前・用件を言うように徹底するなどマナーや礼儀について指導した。

(ウ) 外部との交流活動

もともと地域との交流が盛んな学校だが、いろいろな経験をさせたいと日頃から伝えている。5・6年の米作りの際に地域の老人クラブの餅つきに招待されたり、地域の特産の梨であるパスクラサンの試食をさせていただいたり、学校の隣に引越してきた陶芸家の方に陶芸を教わったり、その方の作品を見に行ったりと多くの活動をしている。

また、児童が地域の方に感謝を伝える「笹っこ祭り」には、もともと学区にあった保育園が統合して学区外にこども園が出来たが、学区外の5歳児も含めて全員が参加してくれている。学区に5歳児がいなくても全員で来てくれるのはありがたい。

中学校との連携では、陸上競技会の前に中学校の体育の教員が授業を行っている。この授業は専門的なアドバイスをしてもらえると児童に好評である。

また、平成30年度より、文部科学省の遠隔教育システム導入実証研究事業に参加し、隣接する仁美小学校や信州大学等と合同でプログラミング教育を取り入れた授業を行っている。今年度は、さらに県外の小学校とも一緒に授業を行う予定である。

(エ) 社会教育との連携

平成29年度までは、水曜日の放課後にPTA主催で本校図書室やグラウンドを使って放課後教室を立ち上げていたが、平成30年度より赤磐市教育委員会社教育課の補助をいただき、PTA以外の方にもスタッフとして関わってもらっている。児童の中には、今までとの違いに戸惑う児童もいたが、いろいろな方と手芸・工作・パン作りなどいろいろな体験ができ、児童も保護者・スタッフも人間関係作りのよい機会になっている。

(2) 学力向上の取り組み

① 教員の意識改革

6年生が3年後に直面する進路について中学校の進路指導や実態について、現在いる6年生の様子をもとに教職員に説明して、基礎学力の定着、特に読解力や計算を早く正確に行うことの重要性について説明した。小学校の教員の中には、進路指導の実態についての知識のない教員もいて具体的な話は有効であった。

また、低学年を主に担任する教員の中には、6年生の学習内容を把握していない担任もいた。そのため全教員が全国学力・学習状況調査の問題の一部を解き、それぞれの学年で必ず身に付けるべき事について話し合い、確認した。

② 意識のベクトルあわせ

せっかく意識改革を行って、共通理解をしてもそのことを全員が行動に移さなければ課題解決に繋がらない。そこで、次のような取り組みを行った。

(ア) 自己目標シートを作成するとき、学校経営目標を再度配付して学校経営目標に即した自己目標をたてるようアドバイスを行った。「表現力の向上」については全員が目標とするようにした。

(イ) 平成31年度の間面談は、グループ面談としたが、最初に再度学校経営目標について確認した。グループ面談にしたことで、それぞれの目標がわかり刺激になるとともに、アドバイスし合うなどお互いを高めるために効果があった。

③ 朝学習の強化

(ア) 教材の工夫

平成30年度からは、算数の学習に使用する教材を変更した。新しい教材は、計算のスピードを測って計算力・集中力をアップする問題と文章題などに取り組んでイメージ力・表現力をアップする問題が交互にある。また、前半は、一学年前の学習の復習である。一学年前の問題から学習するため、学習内容が確実に定着でき、算数が苦手な児童も取り組みやすいという利点があった。また、計算スピードも速くなったことを児童自身が実感できるため、より速く正確に計算しようという意欲が向上した。

(イ) 時間の確保

平成29年度は、朝学習の時間は10分間で、火・木が算数、水・金が漢字学習だった。平成30年度からは、水・金の8時15分から40分までを国語の授業をすることで外国語の授業時間を生み出した

ため、朝学習の時間は週2回となった。平成30年度までは、朝学習後に図書室に集まって全校で歌や音読を行っていたが、週2回の朝学習が10分では学習効果も薄れるので、平成31年度より朝学習を週2回25分間することとした。歌や音読は各学級で取り組み、歌は全校朝会で全校合唱をしている

④ 読書年間80冊の目標

読解力の向上のため、児童一人当たり1年に80冊以上読書することを平成30年度より学級経営目標に掲げ、担任・学校司書が協力して取り組んだ。平成29年度の一人あたりの貸し出し冊数は68冊、特に3・4年生の貸し出し冊数が少なく28.4冊であった。そこで、市内の公共図書館から学校司書が借りてきた本を学級文庫として置いて、いつでも本を手に取りやすい環境にしたり、「おすすめブックリスト50」を低・中・高学年用に作成したり、委員会活動を活発にしたりして読書量を増やした。その結果、平成30年度末には、読書・貸し出し冊数が一人当たり105.3冊、80冊の目標に達成した児童が9割以上となった。

⑤ 新聞を読んでの意見交換

平成29年度の5・6年生で、新聞やテレビ等でニュースを見る児童はほとんどいなかった。そのため、話題が自分の身の回りや興味関心がある分野だけに偏っていた。そこで、多様な意見を引き出すため、5・6年生の担任が週1回学校に届く子ども新聞から記事を選び、5・6年全員がその記事の感想を自主勉強ノートに書いてきて、4人ぐらいのグループで意見交換する取り組みを行った。児童の中には、「日頃聞けない友達の考えが聞けて新鮮だった。」という感想を述べる児童もおり、児童にも好評であった。今年度は、3・4年生教室にも子ども新聞を置いて、いつでも児童が手に取るようになっていくようにしている。

⑥ 作文の表彰

本校に赴任してから、月に一回校長先生からの宿題として作文を書かせて、低・中・高学年から1名ずつ良い作文を全校の前で披露して表彰している。作文の内容は、行事のことが多いが、「相手に伝わるように自分の気持ちや考えを書く」ように指導している。添削・講評も必ずするようにしている。良い作文を聞くことと、自分も選ばれたいという気持ち

ちもあって、作文力も向上してきた。

⑦ 生活スケジュール

笹岡小学校でもメディアコントロールの問題がある。スマホやネットとの付き合い方については企業の方をお願いして授業を行ったり、参観日に中学校の先生に来てもらい話をしてもらったりしたが、児童は自身自分のこととして捉えていない様子だった。そこで、自分の生活態度について確かめられるように、3～6年生で「生活スケジュール」の取り組みを行った。以前より学区の中学校の定期考査前の1週間に「元気アップカード」という取り組みを行っていたが、「元気アップカード」には、勉強や読書、メディアの時間だけを記入するようになっていた。そこで、以前勤務していた中学校でテスト週間に生徒に取り組みさせていたテスト勉強の予定表を参考に、いつ、どれだけ勉強や読書をしたり、メディアと接していたりしたか、いつ起床して、いつ就寝したか一日の自分の動きが分かるようにした。その結果、自分の生活習慣に関心をもつようになり、「以外とテレビを見ていることが分かった」「寝る時間が遅いから先に勉強をしたい」などの感想が聞けた。この取り組みは平成29年度は本校だけで行ったが、平成30年度より同じ中学校区の小学校の6年生も取り組んでいる。

3 成果と課題

(1) 成果

令和元年度7月現在、平成29年度以降中学校に進学した児童で不登校になった児童は一人もいない。

また、平成31年度の6年生の全国学力・学習状況調査の標準スコアと平成31年度の6年生が4年生だった平成29年度の岡山県学力・学習状況調査の標準スコアを比較すると国語が7.3ポイント、算数が8.4ポイントアップして全国平均以上という目標を達成した。

さらに、平成31年度の全国学力・学習状況調査の国語の無回答率は全国6.2に対して本校は2.4となっている。また、平均正答率は短答式と記述式が全国より高い結果となった。どの児童もあきらめずに最後まで問題に取り組んでいる様子が自校採点でもわかった。また、この傾向は6年生だけでなく、ほぼ全学年が全国平均以上、またはもう少しで全国平均に届く結果となった。

これだけの成果が出せたのは、全校で目標に取り

組んだこと、学習だけでなく、生活習慣や態度も改善しようと努力したこと、また、日頃から「楽しいではなく、楽しむ」ように自分が自主的に楽しい場に変えようと私が話していることを、行事などで児童・教職員全員が行動で示している結果だと思う。赴任した当時は、初めての小学校で初めての校長という職に戸惑うことも多かったが、いろいろなことを提案しても私のことを信じてついてきてくれる児童・教職員・保護者・地域の方のおかげだと思っている。

(2) 課題

一定の成果を上げたが、課題もある。今回は授業改革に取り組んでいないが、授業の中で児童が主体的・対話的で深い学びが出来ているかという点はまだである。今年度は、表現力として「相手に伝わるように説明したり、報告したりする」活動を授業に中で取り入れることを学校経営目標に書いている。その活動を単元の中で、いつするのか、その目的は何かなど単元の目標に迫るものでなければならない。今後は、授業改革にも取り組み、児童一人一人が自信をもって中学校に進学し、自立した大人になるように学び続けられるようにしたい。



よりよく生きる美川の子の育成を目指して —板書型指導案を核に据えた取組で授業力向上を図る—

真庭市立美川小学校 校長 森岡 浩美

1 はじめに

(1) 現状分析

美川小学校が目指す「よりよく生きる美川の子」の育成に向け、平成29年度から【自分の考えをもとに、生き生きと学習する児童の育成】を研究テーマに定めて取り組んできた。平成29年度は全学年共通の取組として、次の5点に注力した。

- 同じ流れの授業をする。
- 自分の考えをもつための支援をする。
- ペアやグループ学習で説明力を育てる。
- 算数用語を適切に使い、前者の発表に繋げる発表の仕方を指導する。
- 認め合う集団づくりをする。

実践を通して、自分の考えを意欲的に発表する児童は増えてきた。しかし、児童同士が主体的に関わって考えを練り合い、自分の考えを深めたり広げたりする力の育成は不十分であった。

私たち教職員は、子どもたちの未来を創り出す仕事をしている。授業を通して、子どもたちに意欲と自信を育てよう。ごちそう授業ではなく、日常授業で学力を伸ばす。毎日の授業を大切に、目の前の子どもたちが問題を解くことができるように全力を尽くそうと話し合った。

本校は1学年1学級の小規模校であり、若手教師とベテラン教師に2極化している。OJTが機能した協働体制の中、若手教師が育つ環境であるが、学級担任は、学級経営や分掌の仕事に時間をとられ、教材研究の時間は限られている。

そこで、研究分野を算数科に絞り、「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの活性化を図る」というサブテーマを設定した。毎日の算数科の授業を充実させ、家庭学習に繋げるためには、板書の構造化と板書とリンクさせたノート指導が重要であること、確かな学力の定着に向けては、落ち着いた学習環境の整備をベースに朝夕チャレンジ（基礎学力定着タイム）を充実させ、全校自学の取組を推し進めることが必要であることを共通理解して、ベクトル合わせを行うことができた。

授業改善の視点は、教師の集団思考の場のコーディネート力と、1単位時間のマネジメント力を高めることにあった。その手立てを探る中で、平成30年度から板書型指導案を導入することとした。

(2) 板書型指導案導入の理由

山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第42号「板書型指導案による一考察：前原隆志」に次のような記述がある。

○板書型指導案の特徴

- ・授業イメージの可視化
- ・学習内容の整理
- ・授業記録としての活用

○板書型指導案の利点

- ・授業の可視化＝板書はカリキュラムマネジメントの最小単位
- ・指導技術の共有化＝一人一人の教師がもつ優れた指導のノウハウをワンペーパーで共有できる

また、「分かりやすい板書型指導案を作成するには教師の高い思考力や判断力が求められる。教師（特に若い教師）に付けたい力は、授業を組み立てる思考力や公開授業で鍛えていく判断力、授業のイメージを他の教師に伝えていく表現力だと考えている。」という記述にも賛同できた。

従来型の指導案は、その作成に多大な時間を要するが、板書型であれば、比較的短時間で作成が可能だ。効果が期待できるとともに、教師の負担軽減にも繋がることから、板書型指導案を核に据えた校内研究に取り組むこととした。

2 取組の概要

(1) 目的

研究テーマに迫るため、全教職員で構成する研究組織として「授業づくり部会」と「環境づくり部会」を立ち上げた。部会ごとに研究の重点を設定して、仮説を立てて具体策を実践し検証してきた。

「授業づくり部会」においては、【板書型指導案を取り入れた教材研究・授業研究と授業公開を通して、授業力を向上させる】ことを目指した。

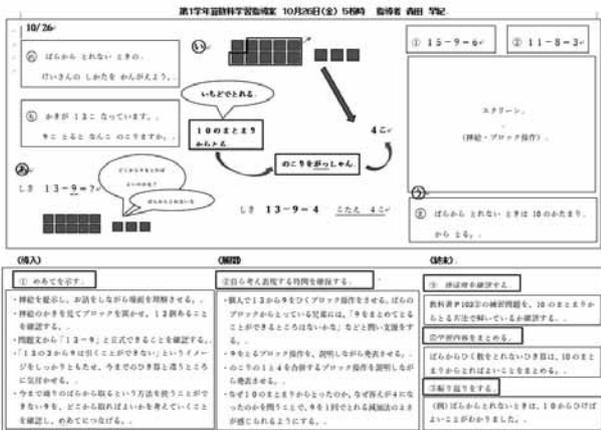
①…学び合い

②…確かめ・振り返り

- ・板書……④①②を位置付ける
- ・学習活動

- ① めあてを示す
- ② 自ら考え表現する時間を確保する
- ③ (④) 学習内容をまとめる
- ④ (③) 達成度を確認する
- ⑤ 振り返りをする

裏面が本時案に当たるので、毎時間作成するのは裏面のみとした。研究授業を行う際には、表面も作成することとし、表面と重複する内容を省いて板書スペースを広くとるようにした。(下図参照)



② 板書型指導案をもとに公開授業を行う

平成30年度、各担任は全員に公開する授業を1回、部会員に公開する授業を1回、合計2回の授業を公開した。従って、研究授業を12回行ったことになる。

全員公開の授業については、全員で指導案検討会をもった。部会公開授業については、部会で指導案検討会を行い、部会員に授業を公開することを基本として取り組んだ。



学び合いの様子



その結果、OJT機能を生かした部会内における授業研究が活発に行われた。板書型指導案をもとに話し合うので授業の全体像がイメージしやすく、模擬授業を通して授業研究が深まった。

また、授業を途中から参観しても、板書型指導案と実際の板書を見比べれば、学習活動がどのように進んでいるか瞬時に捉えることができた。

全員公開授業、部会公開授業とも、中学校区内の各小中学校に案内を出して、参加を呼びかけた。

③ 板書をもとに授業を振り返る

授業を振り返る会では、2グループに分かれ、協議の柱【=研究の柱】を設定して話し合い、交流した。

協議の柱

めあてづくり……⑥

課題把握場面において明確な「問い」をもたせ、気付きなどを生かしながらめあてをつくることができたか。

学び合い……①

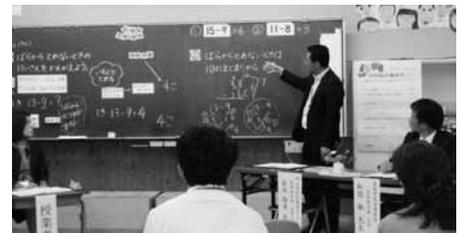
目的に応じた「問い返し」や「揺さぶり」により、学びを深めることができたか。

確かめ・振り返り……③

適用題で達成度を確認したり、振り返りの時間を確保したりして、学びを確かなものにする事ができたか。

板書

板書は、計画にとらわれず、児童の思考過程に沿ったもの、思考過程が分かるものになっていたか。



公開授業（1学年ひきざん②）の振り返り会の様子

3 成果と課題

(1) 教職員の校内研究に関わる評価から

① 板書型指導案について

・授業マネジメント力の向上とノート指導に有効で

あった。

- ・どの学年でも同じ流れの授業を行うことは、児童に学び方を定着させることに繋がった。
- ・計画と実際の板書を比較することで、教師と児童の考えのずれが見つかるなど、授業改善のポイントが明確になり、授業者と参観者で共有して検討できた。

② めあてづくりについて

- ・レディネスチェックを行い、対話によって既習内容に気付かせる（生かす）ように指導することが、児童の主体的な活動を促した。
- ・既習内容を生かそうとするあまり、めあて提示までに時間がかかりすぎるがあった。短時間で収まるようにすることが課題である。

③ 学び合いについて

- ・自分の考えを図や言葉でノートなどに記述して説明することを重視したことは、協働的な学びをコーディネートする上で有効であった。
- ・友達のかいた式や図を説明させたり、友達の考えの続きを説明させたりすることは、考えを共有し学習内容の理解を深めるのに有効であった。
- ・児童の話合いをコーディネートするために、ゴールの姿を描いて、目的に迫れる「問い返し」を吟味することが課題である。

④ 確かめ・振り返りについて

- ・自分のノートにまとめや振り返りを書くことを重視したことにより、次時の導入段階で既習内容を想起しやすくなった。
- ・児童自身が板書で確認しながら、めあてに沿って学習をまとめることができるようになってきた。
- ・確かな学びにするため、適用題に取り組む時間の確保や、自力解決に至らなかった児童への支援が課題である。

⑤ その他

- ・算数科の授業の中で、主体的・協働的な学習場面を意図的に設けたことは、学級全体で学んでいるという一体感の醸成に繋がった。
- ・研究を通して、算数科の学力向上と、現在の子どもたちに身に付けてほしい力を追究することができた。
- ・低学年部と高学年部に分かれ、児童の実態に近い学年で指導案検討などができたので、その結果を自分の授業に反映することができた。
- ・ノート指導を徹底したことで、児童は自分のノートを学びの確認や次の学習の見通しに繋げていた。

(2) 平成31年度全国学力・学習状況調査結果から

○解答結果について

- ・平均正答率65% …全国や県とほぼ同じ
- ・標準スコア49.4 …前年度よりやや下降
- ・記述式問題の正答率38% …全国や県より低い

○質問紙調査結果について

- ・新しい問題を解きたいと思う…91.3% 高い
- ・諦めずいろいろ考える…87.0% 高い
- ・考えが分かるように書いている…100% 高い

以上のような結果から、板書型指導案を核に据えた取組を通して、教師は授業力向上を実感することができた。また、明らかな学力の向上とは言えないが、学力の要素である学習態度の向上には繋がったと考える。

(3) 【美川小スタイル】の設定

授業力向上の取組の充実に向け、学習指導において特に意識することを、【美川小スタイル】にまとめた。

- ・板書型指導案の実践とノート指導の徹底
- ・友達と話し合って考えを広げたり深めたりしたいと思える学習課題の設定と話し合いの充実
- ・一人でできるようになるまで、学級全員で支える気持ちと態度の育成
- ・朝夕チャレンジタイムの充実と取組状況の可視化
- ・家庭学習の点検・評価と、直しの徹底

4 おわりに

み…魅力的な授業・活動等を創る教職員
か…関わりと繋がりを大切にする教職員
わ…和の心で協働する教職員

これまで続けてきた取組が実を結び、児童は落ち着いて学習に向かい、人間関係も良好である。平成30年12月に実施した保護者アンケートの「子どもは喜んで学校に通っている」という項目で、肯定的な回答が96.2%であったことは、本校における実践が効果を上げていることの裏付けだと思っている。

毎時間板書型指導案を書いて授業に臨んだ教師は、「記したノートが宝物になった。改善を加えてレベルアップさせたい。」と話している。「学びの過程が可視化できるよい方法はないか。どう学んだかという過程を全体で交流したい。思考ツールを取り入れた授業をしたい。」「国語科でも板書型指導案で授業してみたい。」と次なる方向性について語る教師もいた。美川小学校の教職員は、正に学び続ける教職員である。



全校で 共生社会の形成を 目指して

—「5 S」で整理 中学校 特別支援教育—

勝央町立勝央中学校 校長 光 井 一 恵

I はじめに

本校は、以前不登校生徒が多数在籍していたため不登校生徒の減少を目指して、アセス・SEL・ピア・サポート・協同学習に取り組んできた。結果、不登生徒は減少した。しかし、数年前からアセス分析で対人的適応が低いグループに通常学級を含む発達障害の生徒が複数見られるようになった。全国的な傾向と同じように本校でも特別支援教育の対象となる生徒が増加し、自己評価の低下による二次障害が長期欠席や問題行動、学力不振などに現れるケースが出てきた。平成30年には自閉情緒学級の増級。通常学級に在籍している配慮を必要とする生徒の増加。通級で教科により通常学級と支援学級を行き来する生徒など、中学校の現場は特性のある生徒の増加により、多様な対応が求められてきている。

義務教育のゴールである中学校卒業時に、それぞれが意欲と自信を持って社会に羽ばたくためには違いや個性を認める共生社会の理解と形成が必要である。そこで、本校が継続して取り組んできた不登校対策の取組に、特別支援教育の視点を加え、学校教育活動を整理し、特別支援教育に学校全体で取り組む必要があると考えた。

II 主題設定の理由

障害特性を持つ生徒の傾向について高橋陽一教授は次のように分析している。

- ①「他者理解」「集団参加」が障害課題である。
- ②学習上や生活上の困難を抱えている生徒は、努力してもできないことで「承認されず」自信を失う。
- ③生きる力になるのは「意欲」。意欲は適切な「承認」によって保証されるが、そこが不足している。

また、『通常学級の障害のない生徒へ「共生社会の形成」する意味を理解させ、「共生社会の実現」を目標にした「違いを認める集団」を作ることが大切だ。』と述べられている。

本校の実態を分析する。平成25年より全校で取り組んできた本校の不登校対策で本校生徒の課題は①コミュニケーション力の不足②自己肯定感の不足であった。今、特別支援教育に取り組むにあたっては、障害特性のある生徒の二次障害の克服と集団との関わりが

課題と考えた。通常学級の生徒にとっても、卒業後の「共生社会」のイメージを持たせ、意味を考える指導が大切なのではないか。集団参加と他者理解の苦手な発達障害のある生徒の特性を理解して、中学校卒業後に自立して社会参加出来る生徒の育成を目指したときに、障害のある生徒と周囲の生徒両方への指導が必要だと考え、本主題を設定した。

III 研究仮説

上記の主題設定の理由を元に、以下のような仮説を立てた。

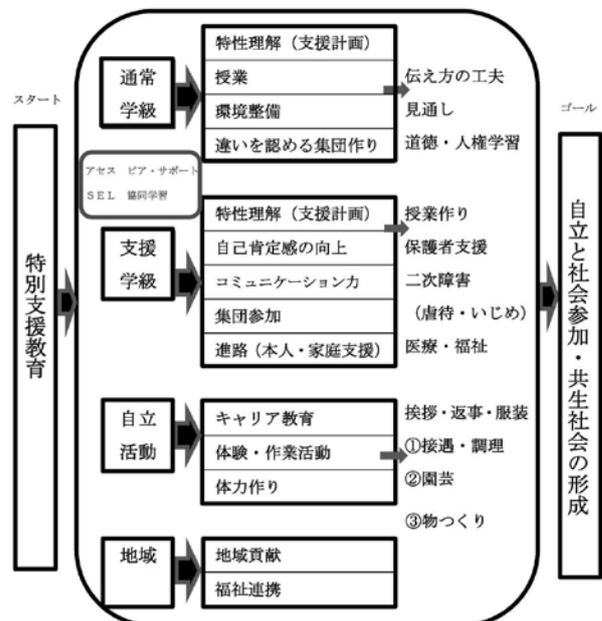
特性を理解、共有し、全教職員が生徒の卒業後を意識し、身近にある存在を認める活動を通して承認することで、自信と意欲を持った生徒が育成できるであろう。意欲が集団参加の課題を克服させるであろう。

IV 具体的な取組

(1) 取り組みを「5 S」で整理。

- | | | |
|----------------|-------|----------|
| 1 S 「STORY」 | 目指す姿 | (生徒指導) |
| 2 S 「SKILL」 | 教師は学ぶ | (校内研修) |
| 3 S 「SYSTEM」 | 多様な学び | (授業改善) |
| 4 S 「SPACE」 | 地域で学ぶ | (キャリア教育) |
| 5 S 「SCHEDULE」 | 継続支援 | (支援計画) |

(2) 本校の 特別支援教育の全体像を図示。



中学校の授業の形は教科担任制をとっている。多くの教科担任が、特性理解の必要な生徒と向き合うことになる。また、特別支援学級の生徒の対応には様々な勤務の形をとる教職員・職員が関わっている。わかりやすく全体像を意識し、取組を共有すること、全体像の中の自分の役割を理解すること、他の役割の動きを理解することが必要であると考え「5S」で示した。

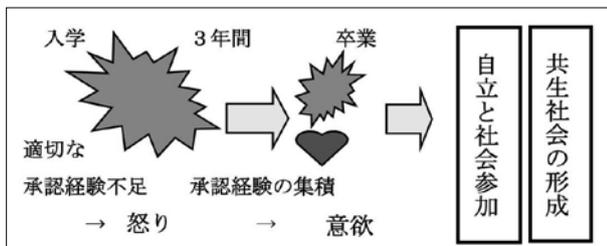
V 具体的な「5S」の取組

(1) 1S ストーリー

目指す姿（生徒指導）

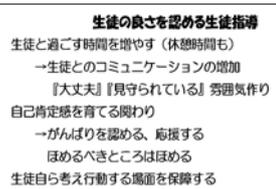
1 「承認経験の集積」で「意欲」を育む3年間に

義務教育最終段階である中学校に、多様な生徒たちが入学してくる。「それぞれの生徒が自立して社会参加できる生徒」「個性・違いを認め共生社会を形成できる生徒」の育成をめざす。そのために本校は、集団の中での承認経験を大切にすることを共有した。



2 「生徒指導の基本方針」

これまでの生徒指導の取組を継続する。(右図)新たに特別支援の視点を入れ、対応の基本方針を次のように生徒指導委員会で定め、共有した。



「教師は 粘り強く複数で 寄り添い 導く」

- ① 気持ちを受容・理解しようとする姿勢で対応する。
- ② 伝え方は、肯定的・具体的・視覚的であること。

3 校内支援体制

特別支援コーディネーターを中心に、校長・教頭・養護教諭・特別支援学級担任・交流学級担任で校内委員会を形成。指導の方針を共有し学校全体で取り組む事を確認した。

【指導の方針】

- ① 特別支援の生徒は「他者理解」「集団参加」が大きな課題。(練習・訓練・時間が必要)
- ② 学習上や生活上の困難を抱えている生徒は自信を失いがち。
(受容)「話す」は「心を放す」生徒の話・保護者の思いを聞く。
(承認) 身近にある存在を認める活動を通して「わたしにもできることがある」という思いを育み「自信」と「意欲」を。

(2) 2S スキル

教師は学ぶ(校内研修)

1 研修でスキルアップ

全教職員が、特別支援の特性を理解するために、コーディネーターと研究主任の調整で実践の校内研修を実施。具体的な助言が参考になった。

- ① 特性・二次障害を学ぶ。SCによる校内研修。

「肯定的に」
肯定的な指示の方がわかりやすい。想像できにくいために否定的な表現だけが伝わってしまう。

- ② 支援学級授業の観察と指導助言。

支援学校指導教諭来校。特性のある生徒へ「伝え方」の具体的ポイントを学んだ。

大きな声は驚くだけで、内容は伝わっていない。視覚的に見通しを持たせ、具体的に伝えたか。文章は長くなかったか。設問のゴールを教師と生徒は共有できていたか。

授業改善への具体的な助言であった。

- ③ 通常学級における特別支援の視点を持った授業について学ぶ。県総合教育センター指導主事による校内研修。アセスメントシートの実施・分析をし通常学級での配慮の必要な生徒への対応を学んだ。

見通し・視覚支援・短文指示

簡単な言葉への置き換え など

具体的に生徒をイメージして授業案を作成した。

2 「教師も承認される」ワークショップ

コーチング・アクティブラーニング研修

受容・承認のワークショップを実施。実際に教師が体験することで生徒の気持ちにより添う事を学ぶ。教師同士で、お互いに心を開き「伝える」ためのスキルを学んだ。「認められる体験」は何よりも授業。生徒同士での承認の場になるために協同的学習があるのだと実感し、共有した。



(3) 3S システム

多様な学び(授業改善)

特別支援学級の生徒で教科による通級指導を受ける生徒、教科により交流学級で授業を受ける生徒、小学校では支援学級に在籍していたが転籍して通常学級にいる生徒など、授業の集団には様々な特性のある生徒がいるので「わかる」授業をめざし、授業者と担任が、気づきを共有していくことにした。

1 集団には 授業のルールを明確にする

校内研修で学んだ特別支援のスキルを活用し、授業で実践する。授業の場面では数値や成績などを示すことが多い。支援を受けている生徒に対して周囲の生徒が「不平等」と感じさせないために、授業の約束を「具体的に」「視覚的に」伝えるようにする。「間違えたところで」考える事を習慣化し、わからなかったところが、わかったという経験を大切にする。努力を認める授業を作るために「伝えた」ではなく「伝わったのか」と振り返りシートなどで教師は確認をすることを共有して取り組む。

2 個人には「困った」が相談できる教師集団に

「学びの場の柔軟な見直し」のために、本人の発達程度や適応の状況について保護者と教師が相談できる場を懇談などで定期的にもつ。「困った」の訴えには、担任と学年団、校内委員会が連携をとって対応する。生徒によっては支援の対象であることを知られたくない者もある。学校全体で適切な配慮をする。

3 全体で 違いを認める集団作り

全校生徒に「共生社会形成」の意味を理解させる。本校がこれまで取り組んできたSEL・協同学習・ピア・サポートの活動は「個性や違いを認める集団作り」を目標にしていることを伝えていく。加えて、新たな教科「道徳」で教材を工夫していく。

(4) 4S スペース

地域で学ぶ（自立活動）

1 自立活動の目的を共有

自立活動はキャリア教育として全教職員で共有。目標は他者理解をはじめとする障害による困難を訓練することで克服し、社会で生きる力をつけることである。活動を通してルールの中で他者と関わることを学ぶ。授業者は活動を振り返り、できたことをしっかり承認する。働く約束を繰り返し訓練し、身につけさせる。社会参加出来る生徒を育てる事を目標に、特別支援学級で取り組む。

自立活動の流れ 共有【指導者・生徒】

- ① あいさつ・返事（報告）・身だしなみ
- ② 振り返り（視覚的に シートの活用）
- ③ 学級掲示で 取組の意欲付け

2 地域の力を学校に

自立活動に地域ボランティアの協力

自立活動をキャリア教育と位置づけ、地域ボランティアの方に授業サポートに入ってもらいたい。様々な活

動が体験できるように、学校地域協働協議会に依頼し協力してもらう。授業の規律の中で、できたことをしっかり承認していただく。教職員以外の地域の大人との交流経験を大切にしたいと考え、取り組む。



【園芸活動】



【さをり織り 製品化】

(5) 5S スケジュール

継続支援（個別の支援計画）

1 個別の教育支援計画の活用

「学びの場の柔軟な見直し」が提唱され、本人・保護者がどのような学びの場を選択し、医療・福祉と連携してきたが、これまでの「学びの把握」が学校には必要である。集団が変わるときに、トラブルを回避し失敗経験を繰り返さないために、個別の支援計画をしっかりと活用する。次の集団へ継続するために、支援計画に記録を残すことを共有する。

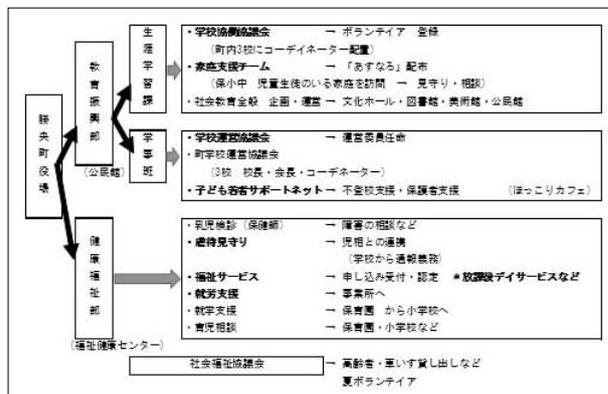
2 校内委員会のリーダーシップ

特別支援教育コーディネーター、特別支援学級担任を中心に専門性の向上に努める。そして校内委員会が校内特別支援教育を推進していく。個別の支援計画の作成でも、生徒の状況・保護者の意向を共有し作成の助言を行う。関係機関との窓口をつとめる。

3 小学校・高校・地域関係機関と連携

大きく集団が変わるのは、入学・卒業時である。小学校・高等学校と支援計画を元に情報交換を密にする。

地域には放課後利用する生徒や保護者の様々な福祉サービスなどがある。継続支援のために町内の福祉行政と役割を整理し、教職員と共有した。



Ⅵ 実践例

(1) 生徒会による「ピア・サポート活動」

支え合う集団作りを目指して



生徒会スローガンを作成し、継続してピア・サポート活動に取り組んだ。生徒会が企画・運営を進めピア・サポーターの育成をめざし学年を超え、つながり合う様々な活動を推進し、違いや個性を認めることが大切なんだと繰り返し発信するようにした。生徒会でオリジナルジャンパーを作成した。様々な活動で着用してピア・サポート活動を発信するツールにした。



【6年生に学校案内】

(2) 地域行事で共生・承認体験

4年前、新しい町内の行事に「中学校からも出店してもらえないか」と相談され協力。自立活動で制作する「さをり織り」を製品化し、生徒による販売を実施。特別支援学級生徒による体験コーナーも開設。自分たちが作ったものが売れること、「すごいなあ。」と言ってもらうことは、生徒たちにとってこの上ない承認の機会であり自信になっている。3年前から販売協力ボランティアを生徒会に依頼し一緒に販売している。生徒会の生徒たちが「すごいなあ。」という言葉が支援学級の生徒の自信になった。一昨年は生徒会ジャンパーの作成に売上金を協力。そして、昨年は生徒会ジャンパーを着用して支援学級の生徒も、生徒会も、ボランティア生徒も一緒に販売をした。今年は半袖ベストを作成した。暑いとき、校外に出たの清掃など支援学級の活動で着用する予定だ。「中学生が頑張っているね。」という言葉が楽しみだ。



Ⅶ 研究の成果と課題

(1) 成果

3年間の取組で生徒に変容があった。1年次、学級男子の言葉が強く響き登校しても教室に入れなかったA子は、通常学級から情緒学級に2年次に措置変更。2年次も交流学級での授業は全て別室で過ごし授業には参加できなかった。3年次、学校では知的学級と自情学級での合同授業を可能にし、高校進学を目指す8人の学習集団で学習を開始したところ「学校楽しいで

す。」と笑顔で登校するようになった。他の特性のある生徒を理解し受容できるようにもなった。授業でも積極的に挙手して発表するようになった。三学期には給食を通常学級で食べ、卒業式に参加、通常学級で最後の学活を受けると、笑顔で巣立っていった。4月、3年次共に学んだ仲間と高校に進学、一学期の欠席はほとんどないと高校から報告を受けている。学校全体で情報を共有して、体制を整え、生徒に承認経験を重ねさせたことで、小集団から中集団の学びで自信をつけ、3年後、大きな集団へ意欲を持って進んだ事例だ。

昨年末の学校評価である。学校の取組について、保護者の理解が深まってきた。

○学校評価保護者アンケート（平成30年12月実施）

	H29	H30
学校の生徒指導に共感できる。	76%	81%
学校に相談できる職員がいる。	66%	75%
学校は生徒の能力や努力を適切に評価している。	86%	90%

○全国学力テスト生徒質問紙より

（平成31年4月実施）

学校に行くのは楽しいですか。はい（肯定的回答）	全国 81.9%	本校 86.1%
-------------------------	----------	----------

(2) 課題

一般生徒は、目に見える障害や違いは理解できるが、目に見えない障害や違いは理解しにくい。「個性や違いを認め共生社会を形成する」ために学校・家庭・地域が連携し、継続的な取組が必要である。

多様な学びの選択が可能になり、学校がどのように教育観環境を整えるかが課題である。ユニバーサルな授業と特別支援学級の授業を柔軟に織り交ぜて学校は進んでゆかねばならない。

特性のある生徒は増えている。日常生活の場面での否定的言動に特性のある生徒は強く反応する。その場で、見逃さない対応が教職員に求められる。授業以外の場面、部活動や日常生活も統一した対応が今後ますます必要である。

本校がこれまで不登校の課題解決に向けて全校で取り組んできた事は、特別支援教育の取組にも有効なことだった。未だ試行錯誤の連続であるが、これからも学校課題に向けて、全教職員で取り組んでいきたい。

参考文献

岡山県教育委員会令和元年度「岡山県の特別支援教育」
高橋陽一「特別支援教育とアート」



学校図書館利用を組み込んだ世界史探究学習論

—不読率の改善と「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて—

岡山県立倉敷天城高等学校 教諭 小山大輔

1 はじめに—問題の所在—

本稿の目的は、「主体的・対話的で深い学び」の視点と、学校図書館利用を組み込んだ探究学習の在り方を明らかにすることである。

岡山県青少年の意識に関する調査報告書(H27年度)によれば、1か月の読書数が0冊の生徒の割合は、高校生で29.9%となっている。小・中学校を含めた岡山県の不読率は中長期的にみれば改善傾向にあるものの依然として高く、特に高校生の不読率の高さが課題となっている。勤務校でも生徒の不読率は上昇傾向にある。このような課題を解決するためには、生徒が読書経験によって学びが深まったと実感することや、図書資料が実際に役立つ経験を重ねることが必要ではないだろうか。そして、学校図書館や国語科主体の読書指導に加えて、各教科の授業の中で学校図書館を利用した学習を充実させていくことが重要と考える。

第4次岡山県子ども読書推進計画（H31年3月策定）では、「学校図書館の機能を計画的に利活用し、『主体的・対話的で深い学び』の視点から授業改善を図ることで、主体的・意欲的な学習活動や読書活動を充実させる」ことが重点目標とされている。学校図書館を教科の学習指導の中で活用することが求められているし、また、学校図書館を活用することで教科の学習活動の質も高まり、「主体的・対話的で深い学び」を実現できることが示唆されている。

以上のことから、次の研究仮説を立て、学校図書館を活用した世界史学習論を具体的に考察していく。

【研究仮説】

- 1 教科の学習活動の中で、図書の有用性を実感することが、生徒の活発な読書活動を促す。
- 2 授業で学校図書館を利用することは、生徒の読書意識を高めるだけでなく、「主体的・対話的で深い学び」の実現につながる。

生徒の実態把握のため、7月上旬、世界史受講者を対象に学校図書館に関するアンケートを行った。質問「これまでの学校図書館の利用状況は？」に対して受

講者の内85人の回答が得られ、約70%の生徒が学校図書館の利用に消極的であることが明らかになった。

よく利用する	たまに利用する	ほとんど利用しない	全く利用しない
5名(5.9%)	21名(24.7%)	30名(35.3%)	29名(34.1%)

【表1】学校図書館の利用状況に関するアンケート結果

また、世界史を学ぶ意義に関してアンケートをしたところ、約70%の生徒が「多くの知識を得ること、その量を増やすこと」と捉えていることもわかった¹⁾。「主体的・対話的で深い学び」の視点を活かした授業を通して生徒の認識を揺さぶる必要がある。

2 調べ学習から探究学習への転換

各教科の図書館利用が進まない背景に「図書館利用＝大掛かりな調べ学習」という認識があると考えられる。国語教育研究者の稲井達也は、学校図書館を各教科で活用する際、調べ学習ではなく探究学習となるよう留意すべきと述べている。稲井によれば、調べ学習は調べたことを整理して報告する学習で、調べること自体に重点が置かれ、一人でも行うことができ、答えを見つけた時点で終了するクローズドエンドな学習を指す。一方、探究学習は問題意識をもって自らの問いを立て、その答えを求めようとする学習で、協働的な要素が多く、新たな問いを発見することで探究のサイクルが回るオープンエンドな学習²⁾であると述べている。探究学習は連続的に問いを追究していく学びである。そして、探究学習で生徒が問いを立て、その答えを求めていく時、図書資料はより効果を発揮すると考える。単元を問いの連なりとして構成し、普段の授業を探究学習として組織することで、図書館利用を教科学習の一過程として効果的に組み込むことができると考える。

3 探究学習を具体化するための手立て

次に、「主体的・対話的で深い学び」の視点と、学校図書館利用を組み込んだ探究学習モデルを具体化する。具体化のための手立ては次の4つである。

(1) 手立て1－ICEモデル－

基礎となる授業構成論としてICE（アイス）モデルに着目する。ICEモデルはカナダのクィーンズ大学スー・F・ヤングらが提唱する学習・評価方法である³⁾。ヤングの論をもとに各段階を次のように整理した。

I 段階：アイデア (Ideas)

基本的な知識、技能などを理解し習得する。
基本的な事柄を知っている段階。

C 段階：つながり (Connections)

個々の知識・技能を関係付ける。
知識どうしを結びつける段階。

E 段階：応用 (Extensions)

習得した知識・技能から新しい価値をつくり出す。
学んだことを統合したり応用したりする段階。

ICEモデルは知識を習得し、関係付けて、応用していくという3段階を経ることで、知識の質的な変化を明確に意識した学習を構成することができる。学習とその結果得られる知識の質を重視しているため、「主体的・対話的で深い学び」につながる具体的なモデルとして有用であると考えられる。また、ICEモデルはルーブリックなどの評価にも応用できる。評価の際に散見される「ほとんど」や「いくらか」などの表現は計量的な性格をもち、知識の量を評価する。他方、ICEモデルを応用したルーブリック評価は「比較する」「解釈する」などの具体的な動詞を用い、知識の質の高まりを評価する手法として有効である。

(2) 手立て2－本質的な問い－

次に、単元の柱に本質的な問いを設定する。本質的な問い (Essential Questions, EQと略記) は、「特定のトピックについての単元内容の理解を促進するのに役立つだけでなく、関連付けを引き起こし、一つの設定から他の設定へと観念が転移するのを促進するもの」⁴⁾と特徴付けられる。知識の関連付けや転移・応用につながる問いであることから、CとE段階の学

びを促し、ICEモデルとの結びつきも強いと考えられる。例えば世界史の場合、「なぜいくつかの社会が繁栄する一方で他の社会は衰退するのか」、「革命の暴力はどのような時に正当化されるのか」などがあげられる⁵⁾。本質的な問いは、答えがすぐにはみつからない論争的な性質をもつため、思考を刺激して探究を促す。そのため、生徒の探究活動が進む中で、より専門的な知識や、別の視点を求めていくことになる。本質的な問いの活用は、図書館利用がより効果的になると同時に、「深い学び」に結びついていくと考える。

(3) 手立て3－ウェビングマップによる問いの生成－

生徒が自ら図書を手取るためには、十分な内発的動機付けが必要である。探究学習を自分ごととして捉えるように、生徒自身に問いを生成させたい。そのため、ウェビングマップを活用して思いつく疑問を関連付けたり、発展させたりする手法を取り入れる。また、考え出した問いの中から優先順位の高い問いを考えさせ、選択させることで各生徒の興味関心に沿った「主体的な学び」と学習の深まりを両立できると考える。

(4) 手立て4－ベン図による比較－

比較は知識どうしを分類・関連付けて、共通点や相違点から考察を深めていく思考法で、共通点から知識をより一般化・概念化できる。ベン図を用いて比較することで、これらの思考の過程を「見える化」し、思考の深まりを促すことができる。また、ベン図をもとに協議できるため、「対話的な学び」にもつながる。

4 授業実践の実際

(1) 単元目標と教材観

2019年7月上旬、高校2年生世界史選択者101名を対象に全4時間の単元「南北アメリカ文明から古代文明の特質を探究しよう」を実施した。この単元は山川出版社『詳説世界史B』第I部のまとめに位置付けた。単元の目標は、古代文明の特質を理解することであ

	Lv.1 (I 段階)	Lv.2 (C 段階)	Lv.3 (E 段階)
まとめシート (第3時)	資料から調べた事実を記述している(抜き出している)。	知っていることどうしや、調べてわかったことどうしを比較したり、関連づけたりして、関係性を見いだしている。	・調べた事実の意味や背景まで考察を深めている。(解釈) ・図や概念図などを使ってオリジナルなまとめとなっている。(統合) ・調べた内容から更に問いを発展させて内容を深めている。(応用)
ワークシート (第4時)	調べた事実・既習の知識を記述している。	知っていることどうしや、調べてわかったことどうしを比較したり、関連づけたりして、関係性を見いだしている。	・共通点や相違点の意味や背景を考察している。(解釈) ・他の場合はどうかと当てはめて考え、他の場合でも同じことが言えるのか、一般化・概念化しようとしている。(応用)

【表2】本実践で使用したICEモデルにもとづくルーブリック評価表

る。例えば、自然環境の影響・制約を受けること、身分・階級の分化が生じること、政治権力強化のために宗教が利用されることなどがあげられる。これらの特質を生徒が発見することを目指した。南北アメリカ文明を取り上げる理由は、既習の文明の知識を相対化できるからである。第Ⅰ部は複数の文明を扱い、南北アメリカ文明は最後に登場する。例えばエジプトやメソポタミア文明から「大河の周辺に文明は生じる」と生徒が捉えていた場合、大河のない場所に栄えたマヤ文明は既習の知識では説明ができない。マヤではセノーテ（地下水脈）が利用されたと知れば、「文明は水資源を利用できる場所に生じる」と知識を修正・成長できる。

(2) 単元4時間の授業展開

時	主な学習活動	構成段階
1	○単元の柱となる問いを提示する。 EQ 古代文明の特質は何か ○南北アメリカ文明はどのような文明か、アステカ、マヤ、インカについて教科書の基本的事項を理解する。	I 段階
2	○探究活動のための問いを生成する。 ・グループになり、アステカ、マヤ、インカからグループで1つ選ぶ。 ・「○○文明ってどんな文明？」から派生する問いを、ウェビングマップを利用して生成する。 ・優先順位の高い問いを吟味する。	問いの生成 対話的な学び
3	○図書館で調査し、用紙にまとめる。 ・優先順位の高い問いをグループで分担し、調査する。	C 段階 主体的な学び
4	○調査成果を班で発表・共有する。 ○ワークシートで古代文明を考察する。 ▼・ベン図を使って文明を比較する。 EQ 古代文明の特質は何か 再提示 ・振り返り(リフレクション)をする。	対話的な学び 深い学び E 段階

第1時は、教師が各文明の概要を説明し、教科書記載の基本的事項を生徒が理解する段階とした。

第2時は、探究活動のための問いを生徒が生成する段階である。まず、ループリック評価表を配布し見通しを持たせた。次に、グループで文明を1つ選択し、ウェビングマップを活用して、共通テーマ「○○文明ってどんな文明？」から思いつく疑問を発展させた。この時、①できるだけたくさん問いを出すこと、②YES・NOで答えられない開いた問いを意識すること、

③問いに優先順位をつけることに留意させた6)。優先順位の高い問いをグループの人数分選ばせ、分担を決めさせた。



【図1】問いを発展させるウェビングマップの記述例

第3時は、図書館で調べてまとめる段階である。学校図書館司書と必要な図書について相談し、公立図書館からの取り寄せも含めて、南北アメリカ文明に関する図書を60冊用意した。インターネットも使用できるようにした。

第4時の前半は、班に分かれて調べた内容を発表共有させた。この時、マヤ、インカ、アステカが混在するように班を組んだ。後半は2時・3時と同じグ



【図2】グループ発表の様子

ループに戻り、ワークシートに取り組ませた。調べた南北アメリカ文明1つと、他の文明をベン図で比較させた。ここでは、既習の文明から1つ選ばせた。ワークシートの設問には次のような項目を設定した。

- ・南北アメリカ文明の特徴（独自性）とは何だろうか。
- ・古代文明に共通する要素（特質）とは何だろうか。
- ・今回の学習を通じて生じた新たな疑問は何か。
- ・何を学んだか。どんなことに生かせようか。

新たな疑問を考えさせることで、オープンエンドとし、追究し続ける余地を残すように意図した。こうすることで、探究学習としての性格を補強した。また、最後に振り返りをするすることで、単元の自分の学びの成果を確認させ、どのようなことに図書が役立ったのか全体で共有して有用性に気付かせるようにした。

5 授業実践の評価

まず、授業後に行ったアンケート結果について整理する。「図書館はどれくらい役に立ったか」について5段

階で記入させた。84人の回答が得られ、ほとんどの生徒が、図書館が役立った（計95%）と評価した【表3】。

5とても役立った	4役立った	3だいたい役立った	2あまり役立たなかった	1役立たなかった
40名(48%)	23名(27%)	17名(20%)	1名(1%)	3名(4%)

【表3】「図書館はどれくらい役に立ったか」の評価

次に、授業前後の生徒の変容を取り上げる。下の【表4】は、横軸に授業前の図書館利用状況（【表1】）を、縦軸に授業後のアンケート「図書館はどれくらい役に立ったか」の結果（【表3】）を配したものである。

	全く利用しない (29名)	ほとんど利用しない (30名)
5とても役立った	16名(55.1%)	10名(33.3%)
4役立った	5名(17.2%)	10名(33.3%)
3だいたい役立った	5名(17.2%)	9名(30%)
2あまり役立たなかった	0名(0%)	0名(0%)
1役立たなかった	3名(10.3%)	1名(3.3%)

【表4】図書館に関する授業前後のアンケート比較

授業前は図書館利用に消極的だった生徒が、授業後に「図書館は役立つ」と有用性を実感したことが全体的な傾向として読み取れる。中でも、図書館を「全く利用しない」と答えた29名の内、16名（55%）が授業後に図書館が「とても役に立った」と感じたことが顕著である。これら生徒の中に、例えば「本の方がインターネットより信頼できる。図書館を利用してないので図書館を知る良い機会になった。自分で調べることでより深いことまで学べた。」という感想があった。

以上のアンケート結果から、本実践を通じて図書館及び図書の有用性を大部分の生徒が認識することができたと評価できる。（仮説1の裏付け）

続いて、4時のワークシート記述をルーブリック評価表（【表2】）に従って評価した。その結果、I段階1人、C段階39人、E段階44人となった。ほとんどの生徒が知識を相互に関連付けたり、応用して考えたりする学び（深い学び）に至ったと考えられる。

最後に、4時の振り返りの質問項目「今回の学習で何を学んだか」のワークシート記述を整理する。大別すると、①「古代文明の特質を学んだ」という生徒と、②「学び方を学んだ」という生徒に分かれた。例えば、①の例として次のような記述が見られた。

・川があることが文明の絶対条件ではないと分かった。階級制度はどの文明にもあり不可欠だった。（生徒A）
 ・文明の繁栄には宗教が必要であること。文明の盛衰には自然環境が密接に関係している。（生徒B）

このように、得た知識を他の事例にも当てはめて一般化し、古代文明の特質を捉えている。知識の質を汎用的なものに高めており「深い学び」に達していると言える。次に、②の記述例（【図3】）を取り上げる。

年代別で調べた場所別で調べたいろいろなことを比較していくと、月へたときよりもと調べたことが、さういふやりと見つけるともわかることと分かった。疑問点をたててみる簡単な答えがないようだけれど、質問をすることで深くまで調べることができると分かった。

【図3】「今回の学習で何を学んだか」の記述例

このように、疑問を投げかけ深める、比較して違いや共通点を見つけるなど、他の機会に応用可能な学び方を学んだという意見も多かった。他にも「調べたこと発表したことが役立った」、「人の発表が参考になった。」、「グループで協力できてより深く考えられた」など「対話的な学び」の達成に言及した生徒がいた。

以上のことから、本実践は生徒の「主体的・対話的で深い学び」につながるものであったと評価できる。（仮説2の裏付け）

6 おわりに

本稿の成果は、「主体的・対話的で深い学び」の視点と、学校図書館利用を組み込んだ探究学習モデルを、世界史を例に示したことである。今回は世界史の実践であるが、他教科・異校種でも応用できるように4つの手立てと授業構成、授業展開を具体的に示した。普段の教科学習の単元を探究学習として構成し、その一過程に図書館利用を組み込むことで、図書館及び図書の有用性を生徒が実感できるだけでなく、「主体的・対話的で深い学び」をより充実させることができる。「主体的・対話的で深い学び」を各教科で実践しようとする際、学校図書館が効果的に活用されていくことに、本稿が寄与できれば幸いである。

【註】

- 1) H30年度末1年生に実施。文系を抽出し90名の回答をKJ法で分類した。
- 2) 高見京子・稲井達也(2019)『「探究」の学びを推進する高校授業改革－学校図書館を活用して「深い学び」を実現する－』学事出版, p.53.
- 3) スー・F・ヤング(2013)『「主体的学び」につなげる評価と学習方法－カナダで実践させるICEモデル』東信堂, p.9.
- 4) G・ウィギンズ(2012)『理解をもたらすカリキュラム設計－「逆向き設計」の理論と方法－』日本標準, p.129.
- 5) Singer, A.J. (2011), *Teaching Global History: A Social Studies Approach*. Routledge, pp. 48-73. 米国社会科教育学者シンガーは本質的な問いを軸にした世界史カリキュラム編成を示しており示唆に富む。
- 6) ダン・ロステイン/ルース・サンタナ(2015)『たった一つを変えるだけ～クラスも教師も自立する「質問づくり」～』新評論, pp.50-51.



学校間国際交流でグローバル人材を育てる

—持続可能な国際交流を創る—

岡山市立三勲小学校 教諭 浅野 智宏

1 はじめに

国際化が加速する社会において、グローバル人材の育成は大きな教育課題の一つとされている。自分とは異なった文化や環境のもとで育つ海外の子どもたちと交流できる学校間国際交流は、国際理解教育の手段として大きな成果が期待される。

しかし、小学校において学校間国際交流を継続的に実施しているところは少ない。何か突発的なきっかけから交流が立ち上がり、一時的に盛り上がるが、その後勢いは衰え、いつのまにか消滅しているという事例が多いのではないだろうか。主な理由は以下と考えた。

学校間国際交流が続かない理由

- ・必要感を感じない
- ・目的が不明確
- ・負担感や多忙感
- ・既存の学習で手一杯
- ・英語でのコミュニケーションが困難
- ・担当者が転勤してしまう

本校では2016年にオーストラリアの小学校Grose View Public School（以下GV校と記す）と交流をもつ機会を得た。ESD世界会議で岡山を訪れたオーストラリアの教育関係者が本校を訪問したことがきっかけだった。せっかくの交流のチャンスを一時的な交流で終わらせないために交流の方針を以下とした。

- ・既存の学習が深まるようにする
- ・小さな負担で大きな効果が得られるようにする
- ・子どもも教師も交流のメリットを感じることができるようにする

本校では地域の歴史や伝統文化を学ぶ「ふるさと学習」に取り組んでいる。集大成としての6年生の能学習は本校の特色の一つとなっている。ふるさと学習に国際交流を効果的に取り入れることで、既存の学習がさらに深まるのではないかと考えた。そこで、国際交流として新しい取組を中心に作るのではなく、現在のふるさと学習を深化発展させていく方針で国際交流を

進めていくことにした。

小さな負担で大きな効果を得るためにはICTの活用が不可欠である。HPやE-mail、Web会議システムなどを活用して「手軽にできる交流」を目指した。

子どもたちが交流を楽しみと思え、教師も交流に意義を感じることができるようするために、交流の成果を「見える化」する必要も感じた。

以上の方針を考慮し、この交流を持続可能なものにするために以下の仮説を立てた。

【仮説】

- ① 「+ Global」で既存の学びを深める
- ② ICTを活用する
- ③ 成果を「見える化」する

以上3つの視点で交流を創っていくことで学校間国際交流が持続可能なものになるのではないか。

本論では、グローバル人材育成の重要性を考え、持続可能な学校間国際交流のあり方について考察していく。

2 実践の様子

① 「+ Global」で既存の学びを深める

「+ Global」（当時は+ Australia）を合言葉にして、新たなことを始めるのではなく、既存の学習を深めたり発展させたりすることをねらって実践した例を紹介する。

・能学習 + Global

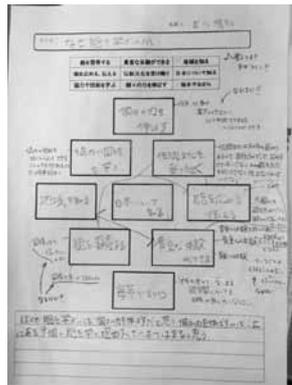
本校の6年生は総合的な学習にふるさと学習として伝統文化の能を学んでいる。

GV校児童とお互いの学習についてメールでやりとりをしている中で、GV校の児童から「なぜ日本の小学校では能を学ぶのですか？」という質問が届いた。能学習を始めて20年近くたち、「伝統だから」「毎年やっているから」と考えていた児童にとって、その質問は学習を深める大きなきっかけとなった。児童は「なぜ能を学ぶのか」について改めて考え話し合い、自分たちなりの答えをGV校に返信した。



なぜ能を学ぶのか
(抜粋)

- ・ 個々の力を伸ばす
- ・ 協力や団結を学ぶ
- ・ 伝統文化を受け継ぐ
- ・ 地域を知る
- ・ 日本について知る
- ・ 能を広める伝える



GV校との交流がきっかけとなり、児童一人ひとりが「能を学ぶ意義」について深く考えることができた。

・ 外国語活動 + Global

5年の外国語活動では、様々な国の学校の様子を知りその違いや共通点について学ぶ「I study Japanese.」という単元がある。

教科書付属のデータにはアメリカやブラジル、中国、韓国など世界各国の子どもたちが自分の学校を紹介する映像がある。オーストラリアについては、GV校の児童に1週間の時間割に関するインタビュー映像を依頼し教材とした。



教科書付属映像データでは、各国の子どもが話すことを聞き、書き取っていくことが中心となっていたが、

GV校インタビューを使用した利点として、やりとりが双方向になり、新たに生まれた疑問について尋ねることができたということが挙げられる。例えば「火曜日に『宗教』という時間があるが『宗教』とはどんな科目なのか?」という質問をすることができた。その際には「what」「subject」などの学んだ言葉を文字や発音で実際に活用することができた。

さらに児童から「お礼に日本の学校の一日を紹介したい」と声があがり、日本の時間割の英語による紹介動画をGV校に送る活動にも発展した。

〇〇 + Global

他にも、国語の漢字の成り立ちではオーストラリアのアボリジニの壁画を紹介したり、音楽科ではオーストラリアの伝統的な楽器のディジュリドゥを紹介したりするなど「+ Global」の視点で既存の学習にオーストラリアを関連させることで学びを深めることができた。

② ICTを活用する

ICTを活用して、少ない負担で大きな成果をあげることが交流を持続可能なものにすると考えた。

・ 桃太郎、カンガルーの親善大使プロジェクト

本校からは桃太郎を、オーストラリアからはカンガルー（名前はキャプテンカンガルー）の人形をそれぞれ親善大使として交換した。お互いの親善大使が学校の行事などに参加している設定にして写真を撮り、紹介しあうプロジェクトを始めた。



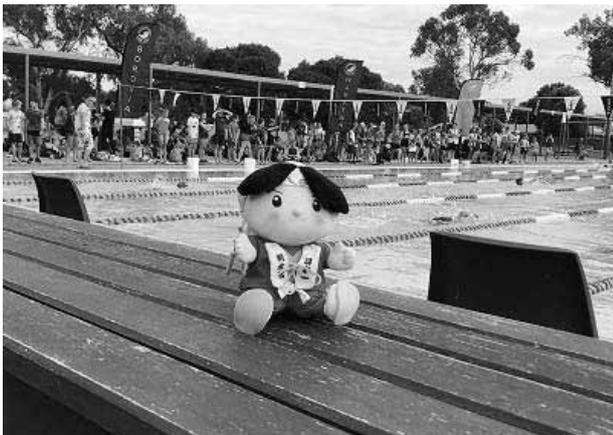
桃太郎とキャプテンカンガルー



後楽園能舞台とキャプテンカンガルー

本校のHPに国際交流のページを設け、GV校から送られてきた桃太郎の写真や日本でのキャプテンカンガルーの活躍を掲載するなどして、本校の児童がよりオーストラリアやGV校に興味や関心が高まるようにした。

子どもたちは今までも海外の学校の写真などを見る機会はあった。しかし桃太郎が写っている写真に対しては、まず桃太郎が写っていることを喜び、次に背景に写っているものについて、次々と発見や疑問をもつなど、より興味を高め、多くのことに気付くことができた。



(GV校水泳大会と桃太郎)

例えば、GV校からの水泳大会の写真を見た際には、「自分たちの水泳記録会と応援の雰囲気似ている。」「あの旗には何が書いてあるのか?」「今は泳げるぐらい暑いのか?」「プールの長さは世界共通なのか?」などという声があった。

写真から生まれた気付きや疑問から、「○○について聞いてみたい」とWeb会議システムでの交流会へ意欲が高まる効果があった。

・翻訳サイトの活用

国際交流において、英語でのコミュニケーションの壁は大きい。本校の場合も担当者同士での打ち合わせは主に英語でのメールで行った。最近の英語翻訳サイトの精度はかなり高まっており、基本的な内容のやりとりについては英語翻訳サイトの活用が担当者間のコミュニケーションに有効であった。



③ 成果を「見える化」する

持続可能な交流にしていくためには、交流の成果を「見える化」することが大切である。教師も子どもも成果を実感できることで次の交流へ意欲が高まるようにした。

Web会議システムで交流会を実施した時には、HPの「今日の1枚」のコーナーで必ず紹介するようにした。



(本校HP国際交流紹介のページ)

GV校から届いたメールは簡単に訳を加えて学級数印刷して全児童が閲覧できるように配布した。また様々な対外的な学校紹介を作成する機会には積極的に国際交流について取り上げ、学校の内外に交流の成果をアピールした。



(おかやまっこ未来フェスタ学校紹介)

3 成果と課題

① 成果

交流が始まって4年目になる。定期的にweb会議システムで交流会が開かれたり、メールのやりとりが続いたりしている。来年はGV校の校長と子どもたちが本校を訪問する予定だ。ささやかだが交流は継続して

いる。児童の中にもGV校の存在が当たり前という意識が育ってきている。

本校の伝統文化を軸にしたふるさと学習と国際交流はとても相性が良いことがわかった。地域や日本の伝統文化を外国からの視点で見ると新たな気付きが得られることや、学習したことの発信先の一つとしてGV校を選択するなど、学習に深まりや広がりをもつことができた。

ふるさと学習だけでなく、他の多くの学習にも国際交流を関連させ成果を挙げることができた。教師間でもカリキュラム編成の際に、既存の学習にどのように「+ Global」を組み込むと効果があがるかという視点で考えるようになった。

ICTを活用した、ぬいぐるみの親善大使の交流プロジェクトは交流を持続可能にするために大きな効果があった。お互いの学校の様子について写真を通じて交流することができ、英語圏ではない国との交流でも活用できる可能性を感じた。

児童の意識調査（ESDアンケートH27年の3年生時とH30年の6年生時の追跡比較）では、「他の地域や外国の文化について知りたいと思う」「自分が様々なものやこととつながっていると感じる」の項目に大きな伸びが見られた。オーストラリアとの継続的な交流

の成果として外国への興味が高まり、世界の国々を含めた社会と自分とのつながりをより高く意識することができるようになったと考えられる。

教職員間で国際交流の成果を共有することで、PDCAサイクルで次の交流を考えることができた。

①既存の学習を活かし②ICTを活用し③成果を「見える化」していくことは国際交流を継続させていくことに有効であった。

② 課題

交流を継続させることだけが目的になってはならない。今後は交流の質の向上を図っていく必要がある。同じテーマを設定した協同学習など、お互いに必要感がある交流に発展させていきたい。しかし現行の教育課程の中でその時間をどう位置づけ、時間を確保するかという課題が残る。

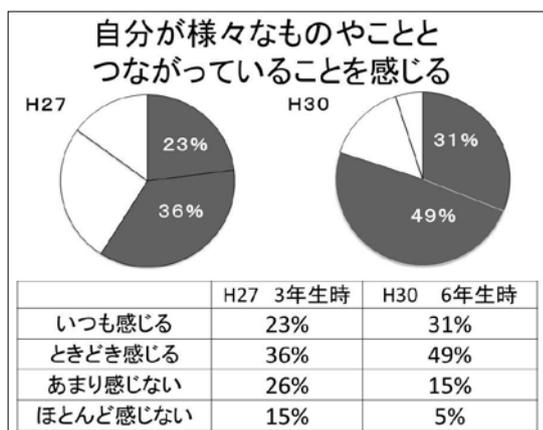
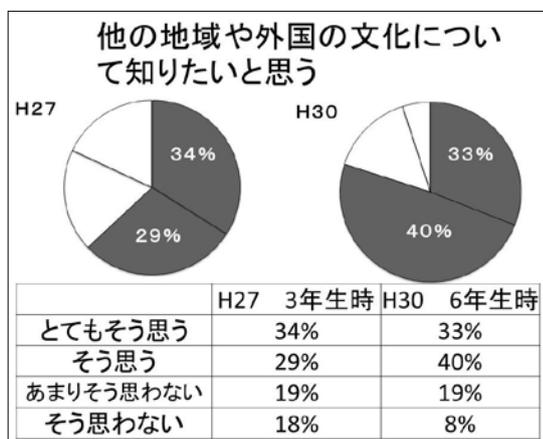
校内ICTインフラ環境については、Web会議システムでの交流会ではスムーズに映像や音声のやり取りができないということが多く、回線の速度改善などの課題がある。

4 おわりに

小学校での国際理解教育の大切な目的の一つは、子どもたちの中に「好きな国：特別な国」を作ることだと思っている。まず、その「好きな国：特別な国」を通じて世界を感じ、その視点で自分の国を見つめ直すことがグローバル人材の育成の一歩だと考える。

6年生が社会科の資料でオーストラリアを目にした時、「おー、オーストラリアじゃが、日本の次に好きな国なんよ。」と発言したり、外国語活動での振り返りで「オーストラリアとの交流会でWhat color do you like?を使ってみたいです。」と書いたりした児童がいる。子どもたちの中に「自分にとって特別な国オーストラリア」が定着してきていたらうれしい。交流が単発的ではなく、継続的に積み重ねられてきた成果だと信じている。

「継続は力なり。」これからも子どもたちにグローバルな世界で活躍する力が育っていくことを願っている。





中学校技術・家庭科（家庭分野）の3年間を見通したカリキュラムの工夫

—SDGsを意識し持続可能な社会の構築の視点で全領域において意思決定できる生徒の育成を目指して—

岡山大学教育学部附属中学校 教諭 川上 祥子

1 研究の背景と仮説

(1) 新学習指導要領より

新学習指導要領では、技術・家庭科の目標は、「生活の営みに係る見方・考え方や技術の見方・考え方を働かせ、生活や技術に関する実践的・体験的な活動を通して、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて、生活を工夫し創造する資質・能力」の育成を目指すこととされ、「持続可能な社会の構築」は教科としての目標となっている。また、技術・家庭科のうち家庭分野の目標は「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を次の通り育成することを目指す（後略）」となっている。この生活の営みに係る見方・考え方とは、家族や家庭、衣食住・消費や環境に係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の伝承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫することである。新学習指導要領では家庭分野の三つの内容「A 家族・家庭生活」「B 衣食住」「C 消費生活・環境」において、それぞれいずれの視点を重視するのかを適切に定めることが大切であるとされているが、本研究では、すべての内容において、生徒が『持続可能な社会の構築の視点』でよりよい意思決定が着実にできることを目指した。

(2) SDGsの取り組みより

SDGsは、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2016年から2030年までの国際目標であり、持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成されている。この17のゴール（目標）は「環境の保全」（以後「環境」と表記する）だけに関わることではない。SDGsでは、持続可能な開発を、「経済の開発」（以後「経済」と表記する）、「社会の発展」（以後「社会」と表記する）及び「環境」の三つの側面において、バランスがとれ統合された形で達成することが目標とされている。中学校3年間で学習予定のすべての学習内容において、持続可能な社会の構築の視点で意思決定ができるためには、持続可能な社会のために3つの側面を理解しておくことが必要である。「環境」以外の2つの側面「社会」「経済」を理解させるためには、岡山大学が推進しているこのSDGsとの関連を意識した授業を実施することが有効であると考えた。

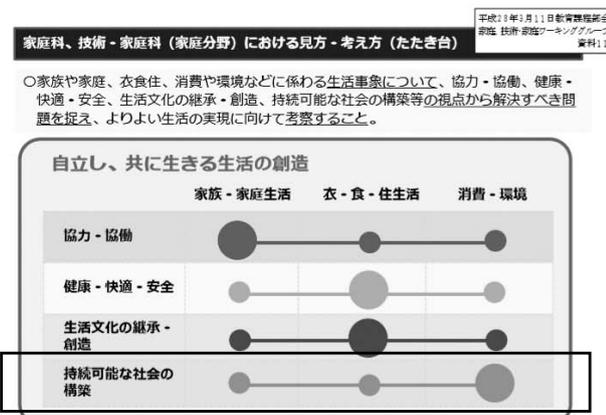


図1. 家庭科における見方考え方（□部分は筆者追加）



図2. 環境、経済、社会を三層構造で示した木の図

2 研究の構想

(1) 中学校3年間の生徒変容イメージ

本校生徒は小学校の家庭科において「エコクッキング」を学び、「水や資源や食材を大切にすることは大事」という概念は持っていると考えられる状況で、1年生の早い時期に持続可能な社会の構築の視点を理解した

上で、中学校家庭科の授業に取り組んでいくこととする。それにより、どの領域でも持続可能な社会の構築の視点での見方・考え方が加わり、実生活でもこの視点で意思決定できる力が身につくことを意図した。なお、これらは1年生3月の調理実習「サステイナブルクッキング」に収斂する。

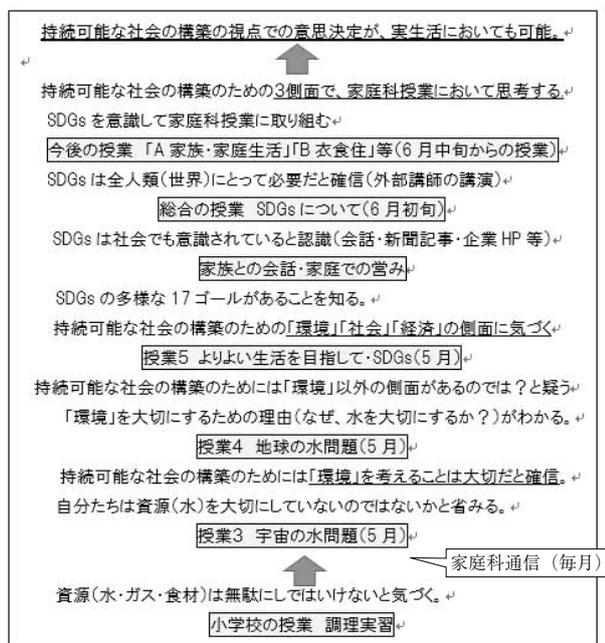


図3. 生徒変容のイメージ

(2) 研究仮説

持続可能な社会の構築の視点で意思決定できる力を身に付ける生徒の育成のために、今回の取り組みでは、以下の2つの研究仮説を立てた。

- ①入学後、早期に「C消費生活・環境」の授業を実施するカリキュラムを作成することで、どの領域においても「環境の保全」を意識した見方・考え方ができる。
- ②SDGsとの関連を意識した授業を実施することで、残りの2つの側面「社会の発展」「経済の開発」に気づき、持続可能な社会のために3つの側面（環境省）で意思決定できる。

3 研究の内容

(1) 早期に「C消費生活・環境」の授業を実施するカリキュラム

- ・対象 2019年度1年生（180人）
- ・時期 2019年4月～7月
- ・カリキュラムの概要

- 1 ガイダンス①（SDGsの概要を紹介）
- 2 ガイダンス②（A家族・家庭生活）
- 3 宇宙の水問題（C消費生活・環境）
- 4 地球の水問題（C消費生活・環境）
- 5 よりよい生活を目指して・SDGs（C消費生活・環境）
- 6 衣服の役割（B衣食住）
- 7 自分らしい着方1（B衣食住）
- 8 自分らしい着方2・パフォーマンス課題（B衣食住）
- 9 中学生としての自立（A家族・家庭生活）

・宇宙と地球の水問題の授業

この授業（2時間）は、平成29年にJAXAの先生方にアドバイスや資料をいただきながら立案した「C消費生活・環境」の導入であり、当初は1年生の2月に実施した。しかし、次年度からはより早期の実施に変更した。これにより、衣生活や住生活領域においても持続可能な社会の構築の視点をもって探究を進められることを期待した。

発問) 宇宙に6か月滞在で何枚のTシャツ（ポロシャツ）を持参するか？

1時間目は宇宙の水問題を取り上げた。

一度着用した衣類は洗濯をせずに処分するという宇宙での衣生活の情報から、運搬費のために高価な水を宇宙ステーションの生活ではどのように節水しているか、その工夫を知り、水の循環システムで生活していることを知る。岡山県民の水使用量なども提示して、自分の生活には無駄が多いのではないかと疑問を持つように日常生活のふり返りをさせた。この授業では、自分が排出したものへの責任を考えさせ、2時間目へのヒントとした。この授業により「環境」は身近であり、自分の行動と関わっていることを再確認できた。

発問) 宇宙で貴重な水は、地球ではどうか？

生徒に質問し、小グループで議論させると、約半数は「さほど貴重ではない」との意見になった。中には、「貴重であるが、大切にされていない」という意見もあった。少数意見として、「自分はいいけど発展途上国では貴重」というものもあった。

後半は「私たちの生活排水」「発展途上国の水（水不足）（不衛生）」「未来の地球の水（枯渇）」の3つの資料を提示し、全体での意見交換を行った。宇宙では、自分の出した水分が循環システムによってまだ自分の

飲用水として帰ってくることを通して、実は地球の水も宇宙の水と同じ「循環する」こと気づき、自分の責任についても考えさせた。各機関のデータや実画像などの資料をもとに学習することで、より印象を持たせ、「環境」に関する意識づけを行った。

(2) SDGsを取り入れた授業実践

発問) この豊かな生活は50年後も続くか？

この問いによって、自分か生きている可能性が高い未来を想像しその生活を予想させた。9割以上の生徒が「続かない」と回答した。つまり、現在の社会を「持続不可能な社会である」と多くの生徒はとらえている。

発問) 持続不可能な社会とはどんな社会なのか？

小グループで議論させ、その意見を発表、共有させた。前回学習を活かし「水を大切にしない」や「環境破壊（地球温暖化）」「リサイクル等に取り組まない」「食品ロス」等「環境」の側面に関するものが多く出た。一方で、「不平等」「戦争」「治安が悪い」「ロボットに支配される」等、「環境」以外の側面でも多様な意見が出された。議論の結果、持続可能な社会には、「環境」「社会」「経済」の3側面があるということに気づけた。

発問) 車がなくなったら、持続可能な社会になるだろうか？

メリットとデメリットを考えることで、「空気がきれいになる」「森林が守られる」という「環境」だけでなく、「事故が無くなる」「不便である」という「社会」、「日本の輸出が減る」等の「経済」の側面などに気づく。そこで、持続可能な開発は、経済、社会及び環境というその三つの側面において、バランスがとれ統合された形で達成することが大切であることを理解する。

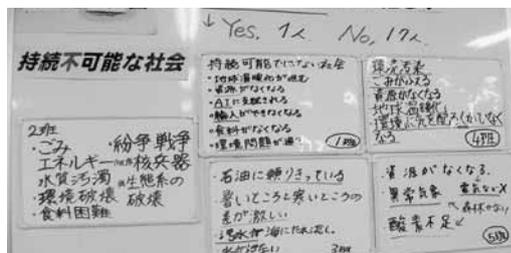


図4. 班ごとのホワイトボード記述

(3) 関連する取り組み

平成29年度より一年生の総合的な学習の導入として、6月初旬に外部講師によるSDGsに関する授業2時間を実施している。家庭科の授業で学習したSDGs

に関して、地域社会や世界における諸問題との関連を理解することで、家庭科と総合学習との学びがつながることとなり、実生活の一部にSDGsがより意識付けられていく結果となっている。

4 仮説の検証

(1) 生徒の自己評価より

1年生180人を対象に、令和元年7月に自己評価を行った。「持続可能な社会の構築に向けて、今後自分がしていきたいこと」を問う質問紙調査を行った。そのうち、1学級分(36人)の記述を対象に3つの側面から分類してみると、以下のような結果になった。「環境」の側面での行動が多く、63.9%の生徒が実生活で「環境」に関する行動をしようと意識を持てるようになった。

・自分が行動しようと思うこと(1年・組 36人 複数回答)			
三側面	行動	回答数	小計
環境	節水(歯磨き・シャワー等)	15	23
	節電(追い焚き・部屋の電気)	2	
	リサイクルをする	2	
	ゴミを減らす	2	
	不用な買い物をしない	1	
	環境問題に取り組む	1	
社会	場に合った(TPO)服装をする	7	15
	家族に協力する	5	
	自分らしさを表現する	3	
経済	募金をする	1	2
	時間を大切ににする	1	
	SDGsを意識して取り組む	3	6
	その他	3	

(2) 保護者アンケートより

一年生の保護者を対象に、令和元年7月にアンケート調査を実施し、109名からの回答を得た。「①中学校家庭科の学習内容で、ご家庭で話題になることがあれば、その内容を記入してください。」との問いに「SDGsの話題があった」との内容を記述した保護者は12名(11.0%)であった。コメントの一部は以下のようなものであった。

- ・SDGsのことについて親子で話をする機会がありました。省エネルギー性の高い住宅を建築しているなど。
- ・SDGs学習後、初耳だった私に大まかな内容(17の目標)等、SDGsという言葉が息子から教えてもらい、インターネットで調べたところ、具体的な数字で現状が表記されており、問題意識を持ちやすいねと話しました。少しの手間ががまんして、水やエネルギーを大切に使用しないといけないねと話しました。
- ・2030年までに人類の課題をクリアしないといけないということについて夕食時に熱心に話してくれました。日本人は危機感を持っていないとききました。
- ・SDGsについて話した。(本人の父親が所属する法人団体では、SDGsを推進している。父親はバッジも持っている。)
- ・SDGsの英語の意味を調べたり、「それってどういうことだろう。」と話合ったりしました。
- ・SDGsについて家で話してくれ、今の時代に必要とされていることを学んでいるのだと嬉しく思いました。
- ・SDGsについては、私たち保護者が働いている企業でも色々取り組んでいます。17の目標の中から、一つでも率先して取り組んでくれたらと思います。

「②中学校家庭科の学習内容で、お子様ご家庭で活かしていることがあれば、教えてください。」では、水や他の資源も含め、有限性を考えたり、大切にしようと考えて行動したりという「環境」面の記述をした保護者は40名（36.7%）であった。

- ・ エアコンの温度設定をどの位上げるとエコなのか等、きちんと分かった上で、生活の中で活かしていてよいと思います。
- ・ ドライヤーを使ったら、コンセントから抜いてしまう。冷房はなるべく高めの設定（26～28度）にする。
- ・ 歯磨きやシャワーの際、こまめに水をためてくれるようになり、節約という観点だけでなく環境についても配慮出来るようになった。
- ・ 蛇口をひねるとき、ひねりすぎないようにする。（水を出しすぎない）。
- ・ 自分の好きな時間にお風呂に入ることが多かったのですが、家族が続けて入浴することで、おindakiをする機会が減りました。
- ・ 水を大切に使うと心がけているようで、お弁当箱の洗い方を工夫できているようです。
- ・ 家族皆でエコバックや水筒を持ち歩くことを実施できております。
- ・ スーパーでの買い物だけでなく、洋服や本を買いに行く際もエコバックを使用しています。
- ・ 買い物をしたパッケージを開き、出てきたゴミの多さに驚き、自然派を売りにしているブランドの商品にもプラごみが使われており、これはダメだなと教えてくれた。
- ・ 長袖のボタンダウンのシャツの袖口をひどく汚してきたので、半そでシャツとして着られるようにしました。それを息子がほめてくれました。物を大切にするという気持ちをもっていると感じました。
- ・ 子ども部屋のエアコンは設定温度27度で冷えすぎないようにし、扇風機を併用しながら、快適な空間になるようにしています。

「社会」面の記述は、39名（35.8%）見られた。うち、ジェンダーや協力に関わること11人（10.1%）、多様性の尊重や社会的慣習等に関わること28人（25.7%）であった。

- ・ これからは男女ともに結婚相手に家事力を求める傾向が強くなるだろうという話をしていた。
- ・ 家族の一日について調べた時、母親の大変さが分かり家事についても手伝えることを考えてくれた。
- ・ 参観授業の内容が家族で話題になり、男性も家事育児に積極的に参加すべきだと。それ以来、長男、次男、主人も家事を頑張っている。
- ・ 興味のなかった服の着方や色の使い方について考える機会を得たことで個性を意識するようになった。今まで好きそうでなかった買い物も意欲的になり、家族の楽しい時間がひとつ増えた。
- ・ 日常着については、色の組み合わせ、清潔感、快適さなどを考え、選ぶことができています。
- ・ 衣服をTPOに合わせて選ぶ学びで、襟元など学校生活での服装の乱れがないように考えられるようになっていた。先日イオンに行ったとき、初めて自分の服を選んでいました。
- ・ 品質表示を見てチェックしたり、下着類は綿の量を確認して購入したりするようになった。

なお、「経済」面の記述は、わずかであった。

- ・ 水問題で、ふろの水量を半量で入ることに決め、節水と節約で地球にやさしい生活を送ることをしています。家計にも優しい。
- ・ 限られた1日24時間という決まった時間を有意義に使う方法をいつも考えながら行動しているように思えます。

5 成果と課題

仮説①について、生徒の自己評価や保護者アンケートから、生徒の家庭での行動において、「環境面へ配慮する」という点で効果的なものであったとわかる。これは、「環境に配慮した意思決定」が、保護者も生徒も「持続可能な社会の構築のための視点での意思決定」だという認識が十分定着していると考えられる。仮説②について、保護者アンケートのうち「社会」の側面に関わる記述や生徒の自己評価記述から、「環境」以外の視点での意思決定もできていることもわかる。以上のことから、今回の教育実践により、持続可能な社会の構築の視点で意思決定できる力を身に付ける生徒の育成ができたといえる。ただし、「経済」の側面は、今後の衣生活学習でのフェアトレード、ファストファッションなどを扱うことによりさらに意識が高まる。以上より、三つの側面で意思決定できるカリキュラムとなる。

今後の課題は、自分の意思決定が多様な側面のどの視点から考え出されたものなのかを明確にさせることである。そのために、授業前後に関わりのあるSDGsの17ゴールのマークをワークシートや板書に視覚的に提示したり、持続可能な社会の構築のための3側面をそれらのゴールと関連させて考えさせたりしたい。生徒たちが、今の自分だけではなく未来という時間軸、世界という空間軸の双方向で思考し、持続可能な社会の構築の視点で意思決定できるような資質・能力を身に付けられるよう学習指導の研究に努めたい。

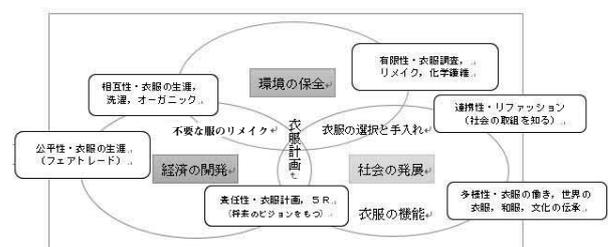


図5. 衣生活領域のイメージ

参考・引用文献

- 1) 文部科学省 (2008)「中学校学習指導要領解説 技術・家庭編」
- 2) 文部科学省 (2017)「中学校学習指導要領解説 技術・家庭編」
- 3) 国立教育政策研究所 (2016)「資質・能力〔理論編〕東洋館出版
- 4) 国立教育政策研究所 (2015)「持続可能な開発のための教育 (ESD)」はこれからの世界の合い言葉 みんなで取り組むESD!
- 5) 岡山大学教育学部附属中学校 (2017)『研究紀要 第52号』



「情報活用能力」の視点で目指す「書くこと」における 主体的・対話的で深い学び

—Googleフォームを用いた「夢十夜」における創作活動と相互鑑賞—

岡山県立岡山操山高等学校 教諭 平野 優

1 研究の背景

(1) 「書くこと」の指導の重要性と困難さ

2018年12月の中教審答申では、国語科の課題として「教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向」や「『話すこと・聞くこと』、『書くこと』の領域の学習が十分に行われていないこと」などが指摘されている。これを受け、新学習指導要領では、「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」に関する指導の改善・充実が図られ、各領域の授業時数についても明確化された。そこで、我々国語科の教員は、現行の学習指導要領における「書くこと」の指導についても、新学習指導要領にうたわれている「『主体的・対話的で深い学び』の実現にむけた授業改善」を見据えていっそう工夫せねばならない。

しかしながら、現場の教員にとって、「主体的・対話的で深い学び」につながる「書くこと」の指導は次に挙げる二つの意味で容易ではないと考える。

まず、学習者が「書く」とき、彼らは読み手として授業者を想定している。岩田健太郎氏が「主体性を教えるという行為そのものが背理している。教えられてしまうと、それは受動的な営為になるからだ。」[岩田2012]と指摘するように、授業者が「指導」すれば、学習者は「先生の求めるものを書く」という意識を持たざるを得ないということだ。たとえ「相手や目的」について様々な「場」を設定しても、学習者にとっては、そのシチュエーションの背後に授業者がいることは自明である。そこに「書く」という行為に本来的に必要な「他者に何かを伝えよう」という主体性は必ずしも生じない。

こうした「書けと言われたから書く」という意識を和らげるために、学校教育の中で取り得る方策は、友人・同級生を「読み手」として設定してやることだろう。もちろん授業者による評価がなくなるわけではないが、「身近な他者が『読み手』になってくれる」という意識は、「何かを伝えよう」という主体性を芽生えさせる。さらに、書いたものを通して学習者同士の

「対話」も期待できる。しかし、ここに第二の難しさとして「学習者が書いたものを実際にどう共有させるか」という問題が生じる。授業時間内の回覧は一つの有効な手段であるが、読んだものは手元に残らないし、クラスを超えた共有も難しい。しかし、すべてを回収して印刷すると字の濃さや枚数の多さという物理的制約が生じる。また、氏名や筆跡などで書き手が明らかになることが、学習者同士の関係性次第ではかえって創作活動の妨げになる場合も考えられる。かといって、授業者が活字化してレイアウトを整えたり匿名にしたりして配付すると、多大な時間と労力を要し、学びの時宜を逸する。

(2) 「情報活用能力」の重要性の高まり

この十年間あまりの情報通信技術の発達はめざましく、2008年の日本で最初のiPhone発売以降、スマートフォンは急速に普及した。「平成30年度 青少年のインターネット利用環境実態調査（内閣府）」によると、高校生の94.3%がスマートフォンを利用している。

こうした社会の変化を受けて、現行の学習指導要領では総則の解説編（第3章「教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項」、第5節「教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項」）でわずかに触れているに過ぎなかった「情報活用能力」が、新学習指導要領では「学習の基盤となる資質・能力」の一部として、「言語能力」に次ぐ位置を与えられている。

高校生を取り巻く状況の中では「スマホ依存」など、情報通信端末の負の側面ばかりが目され、学校現場では禁止や制限の議論ばかりが目向きがちである。しかしながら、社会情勢や新学習指導要領の内容に鑑みれば、スマートフォンを含む情報通信機器に関して教員が知識やスキルの向上をはかり、教育活動における活用方法を研究することが急務である。

2 研究の目的と仮説

(1) 目的

本研究は、前述した「他者に何かを伝えようとする主体性の喚起」、「書いたものを通じた対話の機会保障」、「情報活用能力の育成」における課題を、「Google

フォーム」という仕組みを活用することで一挙に解消しようとするものである。すなわち、国語科の「書くこと」の領域における主体的・対話的で深い学びの実現を、「情報活用能力」の視点から目指すものである。

以下、上野千鶴子氏の著書を参考に、理論仮説と作業仮説を区別して設定した。新学習指導要領の総則において「学習の基盤となる資質・能力」の筆頭に「言語能力」が挙げられ、その育成のために「国語科を要としつつ各教科・科目等の特質に応じて、生徒の言語活動を充実すること」とされていることに鑑み、本研究が他の教科・科目でも応用可能であることを示すためである。

(2) 理論仮説

- ①学習者は、授業者以外の具体的な受信者（たとえばクラスメイトなど）の存在が担保されることで言語による発信の場において主体性を発揮する。
- ②また、そうして発信されたものを互いに読み合うことで、他者の価値観に触れたり自他の表現を比較したりする対話的な学びが生じる。
- ③さらに、情報通信機器やサービスを介して多くの他者と表現を共有できることを知り、同時に機器やサービスの基本的な操作を習得できる。

(3) 作業仮説（授業の概要）

夏目漱石の『夢十夜（第一夜・第六夜）』（高等学校改訂版 新訂国語総合 現代文編（第一学習社）所収）を扱い、「夢を題材とした小説を書く」活動を行う。

単元の当初に、以下のことを説明しておく。

- ・作品はGoogleフォームを通じて収集し、授業者が作品集としてまとめ、クラスごとに配付する。
- ・作品集を読み、良いと思ったものにGoogleフォームを通じて投票してもらう。
- ・投票を集計し、各クラスの最多得票作品を集めた秀作選を作成して学年全員に配付する。

以上のような授業を実施することで、「書くこと」における主体的・対話的で深い学びを実現できるとともに、情報活用能力の伸長も期待できる。

3 研究の詳細

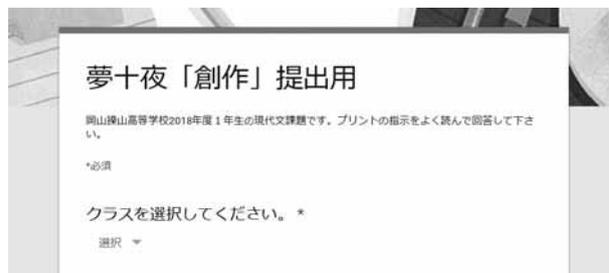
(1) Googleフォームについて

Googleフォームは、Googleが無料で提供しているアンケートフォーム作成サービスである。アンケート項目を自由に設定し、「プルダウン」「チェックボックス」「自由記述」など、多様な形式で質問を作成し、情報を収集することができる。得られた回答は、同じく

Googleが提供するスプレッドシートというサービスと連携させることができ、Microsoft社のExcelとほとんど同じ感覚で情報を整理、編集することができる。

作成したアンケートフォームは、URLを知っていれば誰でも回答できるので、URLを周知すれば簡単に回答を収集することができる。その際、URLをインターネット上の各種無料サービス等を利用してQRコード化して配付すればさらに便利である。

なお、Googleフォームを学習活動に取り入れるに当たっては、個人情報を用いずに回答者を特定するための工夫が必要である。また、情報通信端末を所持していない学習者や、所持していても何らかの事情で使用できない学習者への配慮が不可欠である。本研究においても、そうした学習者に対しては紙で提出するなどの代替手段を認める旨を周知した。実際、280名中1名から代替手段を用いたいとの申し出があった。



【図1 Googleフォームで作成した作品提出用ページ】

(2) 学習指導の経過

本授業は、岡山県立岡山操山高等学校 平成30年度1年生（7クラス280名）2学期の「国語総合」における、夏目漱石『夢十夜』の学習として、6時間および課題の指示という形で実施した。学習指導要領上の位置づけとしては、B書くこと、(1)エ「表現について考察したり交流したりして、考えを深めることに関する指導事項」、(2)ア「詩歌や随筆などを書く言語活動」を想定した。なお、本来は「週末課題2」「フィードバック」として示した内容に1時間ずつ割り当てるべきだが、学校行事等との兼ね合いから断念せざるを得なかった。

第1時

- ・単元の学習目標の提示（学習指導要領の趣旨を学習者にイメージしやすいよう以下の2点で示した。）
 - ①小説における「象徴」について学び、作品のテーマを理解する。
 - ②優れた表現に触れ、「夢」を題材とした創作活動に挑戦する。

- ・作者の紹介（国語便覧の内容を確認させた。）
- ・構成の確認（表現に即して場面分けをさせた。）
- ・創作用プリントの配付，説明（第6時で使用するワークシートに提出用ページのQRコードを印刷しておき，説明とともに配付して，今から作品の構想を練っておくよう指示した。）



【図2 創作用プリント（B4二段の上段/四角内は下段の一部）】

第2・3時（目標①）

- ・第一夜の読解（反復される表現によって生じる世界観に注目させ，創作活動のイメージを持たせた。）

第4時（目標①）

- ・第六夜の読解（「自分」や「明治の人間」対「運慶」の対比に着目し，評論的とも言える「主張」が背後に隠れていることに注目させた。）

第5時（目標①）

- ・ワークシートを用い，第一夜と第六夜の比較を通じて，「百合」や「運慶」の象徴性および各編のテーマを理解させた。

第6時（目標②）

- ・創作活動に取り組ませた。

週末課題1（目標②）

- ・作品をGoogleフォームで集約し，「作品集」を印刷して配付した。

週末課題2（目標②）

- ・「作品集」によって相互の作品を鑑賞させ，Googleフォームで良いと思ったものに投票（3編まで）させた。その際，その作品の作者が表現しようとした「テーマ」を読み取って回答するようにさせた。

フィードバック

- ・優秀作品による「選集」を印刷して配付し，次の単元に入る前に活動に関する感想を書かせた。

4 研究の成果（生徒の活動状況）

「第1時」から「第5時」までは，授業者による教授のほか，学習者によるペアワークやグループワークを取り入れて展開しつつ，常に夏目漱石の表現を「第6時」での自身の創作活動に活かすことをイメージするよう声かけを徹底した。

「第6時」を終えて，「週末課題1（日曜日メ切）」までに245名の生徒からGoogleフォームを介して作品が提出され，各クラスとも34～36名分の作品が収録された作品集を水曜日までに作成して配付することができた。もし紙で提出させた場合，二百数十名の作品を全員分印刷したり，その週のうちに授業者が電子化したりすることは事実上不可能である。ここに，Googleフォームを利用する最大の利点があることを強調しておきたい。作品はすべて匿名とし，並び順もアトラダムなものであることを作品集に明記した。この「クラス作品集」の表紙に，「投票用ページ」のQRコードを掲載し，「週末課題2（翌日曜日メ切）」として相互鑑賞に取り組ませた。

多くの作品で，夏目漱石の表現を意識して，事物に象徴性を持たせたり具体的な表現の背後に抽象的なテーマをひそませたりしようとする工夫が見られたが，筆者から見て今回の学習課題を最も良く達成しており，かつ，「週末課題2」を受けてあるクラスで最も得票数が多かった作品を1編のみ掲載する。

・こんな夢を見た。江戸か明治の頃だろうか，広く大きな屋敷の中庭に植えられた桜の木の上から，自分は屋敷の住人たちがせわしく動くのを見ていた。どうやら奥方が産気づいたらしい。良い子が生まれるように，と自分は願った。数日後，屋敷の廊下を通る使用人の女の腕に，桜色の頬をした赤子が抱かれていた。桜の花は，いとおしげにゆらゆらと笑った。▼自分は屋敷の住人たちが穏やかに微笑むのを見ていた。緑の着物に身を包み，あどけなさの残る顔を引き締めて勉学に励む少年。坊ちゃまは大変勉強熱心でいらっしやる。お家も安泰だ，と口をそろえる使用人たち。しかし数刻後，穴だらけの障子を見て，やはり坊ちゃまもまだまだ子供でいらっしやる，と苦笑を浮かべていた。桜の葉も，微笑まし気にさわさわと笑った。▼自分は屋敷の住人たちが誇らしげにするのを見ていた。屋敷の主である青年が嫁を迎えたのだ。唇に鮮やかな紅を差した美しく慎ましやかな女性の隣で，青年は照れたようにはにかんでいた。人の子の成長はこんなにも早いものだったろうか，と自分は年寄りのようなこと

を考えた。桜の葉は、二人を祝福するようにふわふわと舞った。▼自分は屋敷の住人たちが悲しげなのを見ていた。床に臥す老人は枯れ木のような腕で孫たちの頭を撫で、家族全員にそれぞれ声をかけた。老人の家族は皆、涙をこらえるような顔をしていた。そんな家族たちに苦笑した老人は、部屋の外へと目を向けた。そして桜の木の上にいる自分を見て、ゆっくりと微笑んだ。自分はとても驚いたが、すぐに気づいた。▼「ああ、君には私が見えていたのだね」▼微笑み返すと、老人は安心したように静かに目を閉じた。桜の木は、涙を零すようにふつりと最後の葉を散らせた。▼涙を流す皆の中で、桜色の頬をした幼子だけが、きょとんとした顔をしていた。

- ・作者生徒が設定したテーマ：「人の一生」
- ・投票した生徒たち（11名）が読み取ったテーマ：長い間、人々を見守っている桜の木／人生の儚さ／生と死／人間の生死の美しさ／生きていく中での幸福や悲しみ／桜／輪廻転生／成長、人生／桜／人の一生というテーマ

投票した生徒たちの「読み取ったテーマ」からは、作者生徒が設定したテーマを彼らが適切に読み取り、自分たちなりの表現で言語化しているさまが見て取れる。筆者はここに「対話的で深い学び」のひとつの形が表れていると考える。

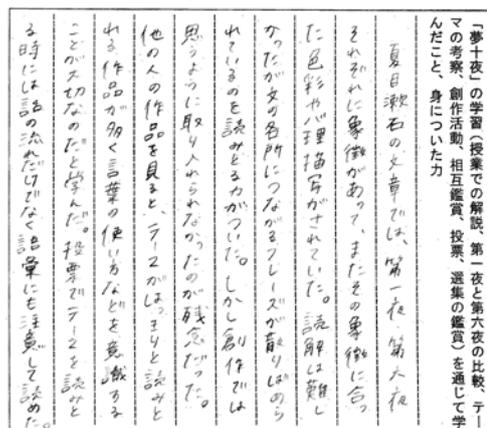
なお、作品提出が間に合わなかった生徒には、投票と合わせて、「①どのような作品を書こうとしたか、②どのような点が難しかったか、③他の人の作品から何を学んだか」の三点を400字以上で回答することをもって、作品提出に準じた評価を与える旨を連絡した。これには14名の生徒が回答し、期限に間に合わなかった生徒も前向きな気持ちで取り組んでいた状況を知ることができた。1名分のみ、省略して掲載する。

- ・私は、主題を「現代人の思考に対する皮肉」とし、暗い方向に展開する作品を書こうとした。古来から人間は、暮らしを華やかにするためにあらゆるものを創造してきた。(略) 私はこの点に着目し、人工知能によって人間が追い詰められる話を書こうとした。▼特に難しかった点は、色彩について、どの場面での色を取り入れるとよいかを考えた点だ。(略) 他にも、鍵括弧の活用方法や言葉選びなど、難しかった点は数多く存在した。▼他の人から学んだことは多い。(略) 35人の作品それぞれに工夫点があり、素晴らしい話だった。▼どの話も面白く、一つひとつが印象深い。今後、まず土台となる語彙、文

法のさらなる獲得をし、そして表現豊かになる事で自分の表現したいことをより表現できるようになりたい。

結果として、作品提出者と合わせて92.5%の生徒を、授業の目標をおおむね達成したものとして評価することができた。残る生徒への指導は、ここでは割愛する。

後日、次の単元に入る前に一連の授業に関する感想を書かせたところ、非常に多くの生徒から、「主体的・対話的で深い学び」が実現されたことをうかがわせる肯定的な反応が得られた。1名分のみ掲載する。



5 まとめと今後の展望

以上のように、Googleフォームの活用によって即時性を持って学習者同士の活動成果を共有させることができ、そのことが学習者の主体的な表現活動や対話的な学びにつながった。これにより、理論仮説の①および②についてはその妥当性を十分証明できたと考える。③については、Googleフォームの使用に際して特に大きな混乱がなかったことから、現代の高校生にとっては、この程度の「情報活用能力」は「伸長する」よりは「発揮する」ものであるように感じた。だからこそ余計に、「書くこと」の指導を「情報活用能力」の視点から展開することの有効性は非常に高いと考える。

現在、学校における情報機器等の利用環境や授業のあり方は時代の変化に適応できているとは言い難い。そうした中で、Googleフォームはその汎用性の高さから多くの教科・科目で授業改善の役に立つことと思う。自らの授業改善を続けつつ、「言語能力の育成」の要たる国語科教育の担い手として、多くの先生方と協力しながら新しい時代の授業作りを進めていきたい。

【参考資料】

- ・中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(2016)
- ・高等学校学習指導要領解説 総則編 (2018) (2010)
- ・高等学校学習指導要領解説 国語編 (2018) (2010)
- ・主体性は教えられるか (筑摩選書) 岩田健太郎 (2012)
- ・情報生産者になる (ちくま新書) 上野千鶴子 (2018)



探究心を活性化する「読む力」の育成

—入門期における継続的な読み聞かせの実践を通して—

新見市立本郷小学校 指導教諭 大月 ちとせ

1 はじめに～主題設定の理由

子どもを取り巻くメディア環境の浸食は、加速するばかりである。「将来の夢はYouTuber」と言い切る児童は決して珍しくはない。個々の手元の画面に夢中で、会話が全くない家族連れなども、もはや見慣れた光景である。本稿は、スマホに代表される機器の利便さを否定するのではない。今や、メディアとの共存は、時代を生き抜く一つのスキルとも言えよう。

読書は、この時代にどんな力の育成を保障できるのか。語句の検索やタイムリーな話題提供の速度では、到底スマホやPCに太刀打ちできない。紙媒体の重量、保管場所の確保、用紙の劣化、そして何より個々の書籍の価格。こうした書籍ならではの特徴がそのまま短所となり、現代の本離れに繋がっていると考える。

しかし、読書に親しんだ者ならば誰でも知っている大きな長所がある。それは、ページをめくる喜び、高揚感、期待感である。次のページへ向かうとき、読者の脳裏には、ここまでのストーリーや事象の認知、それに伴う自己の感想・感動が凝縮されている。

ページをめくるタイムラグは0.3秒。この瞬間にこめられた筆者・作者の主張や工夫が、読者を刺激し、「次を知りたい」という探究心や知的好奇心を活性化させ、次のページに向かわせる。そこにこそ、検索ではない読書の喜びがあり、価値があると考えられる。

本研究では、本県の児童・生徒にはこうした探究心や知的好奇心の育成のために読書習慣の形成は不可欠であることをまず主張する。その前提に立って、入門期の、文字習得時期の児童に行った読み聞かせの実践結果を報告する。入門期に継続的に読み聞かせをし、児童の反応を検証していくことで、児童がいかにか知的好奇心を育むかを見ていきたい。さらに、2学期以降の教育活動にいかにか生きてくるかを、担任ならではの視点と手だてで述べていきたい。

以上が、本研究の主題設定の理由である。

2 研究仮説

入門期の児童に継続的かつ効果的に読み聞かせを行うことで、児童は探究心や知的好奇心を伴った「読む力」を身につけ、学習にも活かすことができる。

学級担任が、普段の学校生活の中に読み聞かせを位置づけることに、学級経営にも大きな意義がある。

3 期間及び対象児童実態

この実践を検証する期間は、平成30年4月10日（入学式）から同年7月19日（第1学期終業式）までとする。

対象児童は、新見市立本郷小学校第1学年児童16名である。本校は、岡山県北の新見市内にある全校児童93名（平成30年時）の小規模校である。穏やかな自然環境にあり、住民も素朴な愛情で学校を見守っている。家庭環境は様々であるが、概して学校への信頼は高い。

児童全体は、地域の愛情の中で穏やかに成長している。しかし、少人数による固定化した人間関係のためか、向上心や競争心がやや乏しく、がむしゃらに学ぶという姿はあまり見られない。また、前述のメディアの浸透は本校のような地方都市の児童であっても同じである。毎週水曜日を「ノーメディアデー」と設定し、町内の小中学校で統一してメディアコントロールを訴えてはいるが、大きな効果は見られない。

対象児童の読み聞かせ経験は、家庭環境に応じて個人差があり、保育所・幼稚園での読み聞かせだけが唯一の経験であるという児童もいた。文字の習得についても個人差が大きく、入学当初に自分の名前が読めない児童もいた。

なお、本校には常勤の図書館司書は配置されていない。月2回巡回する市の職員によって、学校図書館の整備や新刊書の登録、環境整備を頼っている。したがって、普段の学校生活における読書指導は、担任の姿勢や影響が大きく左右すると考える。

4 研究計画と検証の手だて

学期	読む力育成の実践内容
1	【読み聞かせ重点期】 <ul style="list-style-type: none"> ・毎日1冊読み聞かせをする。 ・時間は朝の会や業間活動の後、授業の合間や給食時間など隙間時間に無理なく行う。 ・読む本を手元にストックして置き、読んだ後は学級文庫に移動させる。 ・何冊か選んでおき、それらから読む順番を児童に選ばせる。
2	【読み聞かせと本の紹介期】 <ul style="list-style-type: none"> ・1学期よりやや分量の多い本を選ぶ。全てを読むのではなく、途中で止めて残りは児童の自主的な読書に委ねる。 ・学校図書館に加えて学級文庫の貸し出しも可能にする。 ・「本係」に読み聞かせの補助をさせる。
3	【自立した読書習慣期】 <ul style="list-style-type: none"> ・「本係」に以下の活動を工夫させる。 <ul style="list-style-type: none"> ①学級文庫の管理 ②教師の読み聞かせの本の選択。 ③人気の本の紹介 ④係自身の読み聞かせ ⑤新入学児童への読み聞かせ

検証の手だてとしては、以下の通りである。

- ①児童の反応や読み聞かせ後の児童の読書の様子を記録する。
- ②原則として、読み聞かせ後に児童に感想発表を強要しない。
- ③教科では、2学期の国語の授業で、児童の発言やノートに変化や成長が見られたかを検証する。
- ④3学期は「聞く力」がついているかの検証も含め、読み聞かせと共に「即席ばなし」を楽しむ機会を作る。これは、児童が作った1～2の単語を無作為に選び、その場で教師が即興で話をする。その後、あらすじや心に残った場面を児童が意見交流するものである。滑川道夫氏が提唱した、いわゆる「一回性の読み」を、実践したものである。

5 実践の様子

(1) 読み聞かせの数値的結果

1学期57日のうち、読み聞かせが出来たのは46日であり、達成率は80.7%である。

月の内訳は、4月13日、5月18日、6月13日、7月2日である。7月が極端に少ないのは、水泳指導が入り、児童の着替えや学習前後の排便、給水時間等の確保とその個人差、さらに教師自身の着替え時間も影響している。しかし、これも担任ならではの偽らざる実態である。また、着替えを早く済ませた児童は、読書をして待つという習慣づけも可能になったのは良かったと思う。

(2) 読み聞かせの実践例～児童の反応と共に

①『きょうはみんなでくまがりだ』（4月13日）

過去に担任した学級でも高評価だった絵本である。繰り返しの楽しい内容ではあるが、入学3日目の児童がどういった反応をするかという点に着目した。

児童は、読み始めのうちは硬い表情で一生懸命聞いていた。しかし、物語が進む中で繰り返し表現に気がつき、少しずつ表情が和らいできた。ページをめくると同時に「きょうはみんなでくまがりだ」と、教師の声に合わせて言うようになり、弾けるような笑顔を見えた。そこには、同じ言葉を一緒に読み味わうという、ある種の連帯感が感じられた。これから続く学校生活で、「音読」を主に、同じ内容を読む場面は実に多い。その活動を意味あるものとして成立させる根底は、この連帯感と喜びである。共に声を出して読むことは、共に呼吸を重ねること、即ち共に生きていくことなのだ実感した。

②『うみがくたい』（5月9日）

航海する船の船員と海の生き物との交流を描いた作品。学校図書社の国語の教科書では、第2学年で扱われているものである。本市は光村図書の教科書を採用しているため、読書経験でしか出会えない作品である。やや長い内容ではあるが、語り手の優しい文体に引き込まれ、ゆったりとした表情で物語を楽しんでいた。

船員が楽器を海に投げる場面で、実際に投げる仕草をすると「先生、こっちにも投げて。」「ぼくはいるかだよ。」と、登場人物に同化したような反応を示し、「次はトランペットかな?」「鈴も出るかな?」と、内容を予想するつぶやきも出てきた。丸木俊の絵は特徴的

であるが、児童はその個性的な描写も「きれい。」「波がかっこいいね。」と好意的に受けとめていた。

③『ろくべえ、まってろよ』（5月15日）

小学生が、穴に落ちた犬“ろくべえ”を自分達で助けようと奮起する物語。描かれる小学生は親しみやすく、身近な友達に似た印象を抱かせる。また、助けたいと躍起になる子どもと、冷静で事務的な対応をする大人の対比も分かりやすく、児童の共感を呼んでいた。

この絵本は、縦の見開きで穴の大きさを描いているページがある。このページを開いたときは「うわ、大きい。」「ろくべえ、かわいそう。」という声が漏れた。児童が、装丁の工夫を見事に受けとめたと言える。

かごに入ったろくべえが次第に地上に出て来る場面では、自分もろくべえのように椅子から少しずつ立ち上がる児童もおり、自ら動くことで人物の心境に到達する読みを体現していると捉えることができた。

④『こんとあき』（5月30日）

読み聞かせをする上で、児童が作品中の言葉をすべて知っているとは限らない。むしろ、作品が進む中で、児童が（こういう意味だろうなあ）と推測し、文脈の中で確かめていくことが望ましいと考える。

これは現在大きな課題となっている児童の語彙力の乏しさと、語彙指導の難しさとも関連する部分である。言葉のストックは、半ば強制的に行うことはできる。しかし、それは一時的なものに過ぎず、自分で活かすことが出来なければいずれは記憶から消え去ってしまう。読書量が少なく、教科書程度しか読まない児童の場合、言葉によって自己の認識が耕されたとは言い難く、語彙は乏しいままであろう。しかし、読み聞かせを含む読書によって、教科書でも出てこない言葉に出会うことで、またそこに挿絵という情報の補填によって、いくらかでも語彙は増し、ある瞬間に実感を伴った生きた言葉として、個人を豊かにすると思われる。

本作の場合、キーとなる言葉は「砂丘」である。音を捉えている児童には「サキュー」という響きしか残らず、それはいったい何だろうという疑問も生じるだろう。その響きを各自の脳内で「砂丘」に変換するには、自己の実体験、あるいは映像的な情報補填が必要かも知れない。事実、主人公のこんとあきが砂丘に来た場面では、「サキュー？サキューって何？」「砂場の大きいの？」と、お互いに尋ねたり説明しようとした

りしていた。挿絵を見ることで頷く子もおり、物語全体は分かったが、「砂丘」に納得できていない表情の子もいたようだった。

「砂丘」という言葉が醸し出す広大さや果てしなさは、こんをさがす少女あきの不安な気持ちに等しく、あきの心象風景であると言っても良い。滑川道夫氏は、氏の著書で「わからないところを残す読み」という言葉を提唱した。全てを分からなくてもよいし、分かった気にならなくてもよいのだ。分からないことがあるから、次に知りたくなる。「サキューって何？」という疑問を心の片隅に残しながら暮らすことで、本物の砂丘を認知したとき、知り得た喜びと共に、自分が疑問を抱き続けてきたことの価値に気づくに違いない。誰のものでもなく、自分だけの疑問に自分の実感ある意味づけが成されたからである。国語の授業であれば、記述された全ての言葉の意味を一応押さえる。しかし、読書だからこそ、知らないことは知らないと素直に表出し、その知らないことを「知りたい」へのエネルギーに変えることができるのである。

(3) 2学期の授業場面での検証

ここでは、国語科の10月学習内容「くじらぐも」における児童の成長の様子を検証する。

この單元では、登場する1年2組の子ども達と雲のくじらの交流の様子を、会話文を工夫して表現しながら読み取る活動を取り入れた。ここでは、最後の場面での学びの様子を報告する。

会話文を考えるにあたって、登場人物がどんな子か、性別は何か、空の散歩をしてどんな気持ちだったかを、動作化等も組み込んで考えた。以下が、児童のワークの一部と、発表時のやりとりである。

A児：みんなは「さようなら、またいこうね。こんどはとおいまちにいこうね。こんどは、みんながすきなところにつれて行ってね。」と言いました。

教師：みんなって、どんな子なの？

A児：冒険が好きで男の子。『うみのがくたい』みたいに、くじらとお話ができるから、今度は遠くへ行きたいって頼んだと思う。

A児は、子ども達の中に、冒険好きな男の子がいると想定し、給食時間に帰って来られる距離ではなくて、もっと遠くへも行けると考えて会話文を書いたものである。

B児：みんなは「またあおうね。またげんきよくあそぼうね。わたしたち、しんばいしてるからね。」と言いました。

教師：この子は心配してるの？

B児：この子は女の子で、くじらぐもが1年2組のみんなを乗せたから、重くて大変だったと思っています。

教師：なるほど。くじらぐもががんばってくれたことが大変だったねと心配しているの。

B児：そう。ありがとうだけじゃなくて、心配もしてると思います。

C児：そうだね。重いから大変だよ。優しいね。

B児は、1年2組の子ども達みんなを乗せたことを労うと共に、くじらぐもを気遣う言葉も表現できている。また、その発言を聞いていたC児は、くじらぐもとB児両方の優しさを讃える発言ができています。

このように、教科書教材を学習する中でも、自己の日常生活の経験の想起、読書経験の想起、片方だけでなく人間関係相互の言動を読み取ることができていると見ることができる。さらに、お互いの発表を親和的に、そしてじっくりと聞き取る姿勢が育っている。これも担任の読み聞かせによって培われた姿勢であると考える。

6 本実践の成果と課題及び提案

(1) 成果

- ・読み聞かせを継続することで、学級担任の声に対する信頼感が生まれる。つまり、「この声は楽しいことやおもしろいことを話してくれる」という信頼感である。これは、学級経営上大変に有効である。声は、直接耳から児童の脳と心に語りかける。したがって、トラブルが生じた場合でも、特に大きな声で叱ることなく穏やかに話しかけることで、児童はじっくり反省し、自分達で解決の糸口を探ることができるようになった。
- ・小学校の担任、特に低学年の担任はほぼ一日中児童のそばに居る。したがって、読み聞かせをするタイミングを図ることは比較的容易い。「今」という瞬間に、手元に本を用意しておけば始められる。言い換えれば、本を準備する一手間があれば、誰でもスタートできる。
- ・読み聞かせは、本の紹介でもある。読書の苦手な

子は、知っている本なら安心して手に取るものである。読み聞かせで知った本から読書を好むようになり、次第に学校図書館を利用する回数が増えたのも2学期以降の大きな特徴である。

- ・読み聞かせは、学級全体の共通読書である。1学期は16人で46冊の読書を共有したことを意味する。この経験は大きい。学習や遊びの中で「『おたまじゃくしの101ちゃん』ごっこ、しよう。」「ダンゴムシ見つけた。『ほくダンゴムシ』と同じだ。」といった会話や交流が多くなった。

(2) 課題及び提案

- ・読み聞かせの本を選択する段階で、物語を多く選んでしまっていた。しかし、『カルシウムはすごい』『ぞんねんないきものずかん』のような内容でも喜んで聞いていたことがあった。理科的あるいは説明的な内容を今後は意図的に組み込んでいきたい。
- ・学年末までに総計80冊近い読み聞かせをしたのだが、保護者にそのリストを示し、読書の成果を親とも共有するという活動をしておけば良かったと思う。
- ・1学年複数クラスの学校なら、1人の教師が1冊用意して自分の学級で読んだ後、隣接学級へ向出して読むという活動が可能になる。こうすることで、学年全体での共通読書が生まれ、学年団の教師への親しみも増す。逆に、複式などの小規模校であれば、担任だけでなく養護教諭や校長、教頭なども時には読み聞かせをすることは難しいことではない。担任同士が順番に教室を巡ることもできる。

7 終わりに

本実践の始まりに掲げた研究仮説は、対象児童の読書意欲の向上と、学習態度の落ち着き、とりわけ聞く力を土台とした読む力の定着という姿で成立したと言える。

補足情報として、2年生の1学期末に行った国語の学期末テストでは、初見の文章を読んで答える問題でほとんどの児童が満点だったと現担任から聞いた。本県の児童が、初めて接する文章の読み取りをやや苦手としている傾向にあって、この結果は興味深いものである。



PBISの考え方を取り入れた 生徒指導の実践に関する考察

—取組の更新を見据えた生徒指導主事の立場からの課題の指摘と対策の提案—

岡山市立福浜中学校 教諭 岩井 俊 暁

キーワード：生徒指導 PBIS Good Behaviorカード

1 テーマ設定の理由

(1) 本校の状況及び生徒指導上の実践的着眼点

① 中学校の概要

本中学校区は、旭川河口西岸部の住宅・商業地域に位置し、かつては県内屈指の大規模校であったが、今日、生徒数は減少傾向にある。現在は、全校生徒数670名、通常学級20学級、特別支援学級4学級の合わせて24学級である。(R1.5.1現在)

生徒は対話的かつ行動的で、競争的な要素のあることには特に積極的に取り組む傾向が見られる。運動の好きな生徒も多く、部活動にも積極的に参加している。保護者や地域は学校に対して非常に協力的である。

② 学習の状況について

基礎的な学力の定着について課題が認められる。今年度6月に実施した「家庭学習等に関するアンケート」では、「一日あたり平均家庭学習時間(塾を含む)」では、46.6%の生徒が1時間未満と回答し、その要因として、69.0%の生徒が「ゲーム、LINE等SNS」、55.6%の生徒が「部活や遊びすぎの疲労、眠気」と回答している。

③ 生徒指導の状況について

平成26,27年度には、授業に入らない生徒が目立つなど、落ち着かない状況も見られたが、平成28,29年度にはその状況は相当改善された。しかし、平成30年度以降、状況はやや下り坂の傾向にある。その背景として、小学校卒業時に県立や私立の中学校へ進学する学力上位層の生徒が少なくはなく、学習面のみならず、学級リーダーの育成にも影響が認められる状況がある。また、小学校の頃から学習へ気持ちが向きにくくなっている生徒も相当数存在し、「授業が分からない」という理由からグループ性のある「暇つぶし的」な問題行動につながるケースもある。そのため、学校警察連絡協議会の取組の対象中学校区となっており、迅速に警察対応が可能な学校として警察等関係機関との連携体制が構築されている。

④ 生徒指導上の諸課題への実践的な対応の着眼点

生徒指導上の問題行動が増えてくると、即時的な指導や叱責の回数が多くなっていく。しかし、そのよう

な指導を繰り返しても状況はなかなか好転しない。生徒の集団を注意深く観察してみると、学校全体を支える母集団がマイナス方向に偏りかけている状況が認められ、自己肯定感が低い生徒や、自信がなく不安傾向が強い生徒にその影響が及び、いわゆる「全体的に落ち着きのない状況」が進行していることが認められた。この状況を改善するためには、これらの負のスパイラルを断ち切って自己肯定感を高め、生徒の自信を回復させるための全校的な取組が必要であると考えた。そのために「ポジティブな行動介入及び行動支援(PBIS)の考えを活用した生徒指導の取組」を平成28年度から行ってきた。

(2) PBISについて

PBISとは、Positive Behavioral Interventions and Supports(ポジティブな行動介入及び行動支援)のことで、アメリカの研究者と教育省の特別支援教育プログラム局とが連携して開発した行動支援の手法の一つである。

PBISの考え方を平易な言葉により説明すると、生徒の悪い行動ではなく良い行動に注目し、良い行動を増やしていくことに注力するということである。誰もが平等に限られた1日24時間の中で、同時に適切な行動と不適切な行動はできないので、適切な行動が増えれば、結果として不適切な行動が減少するというものである。

生徒の行動面からみると、行動の直前にある「その行動のきっかけとなる状況や出来事(環境)＝先行刺激」と行動の直後にある「行動の結果(環境)＝後続刺激」に注目する。そして、行動を挟む前後の状況を次に示す「A-B-C」の三段階でモデル化する。

A:「先行刺激」として、視覚刺激や見通しを示す刺激、ポジティブなルールを示す刺激があり、

B:「行動」がなされ、

C:「後続刺激」として、「褒められたり注目されたりするようなポジティブな強化刺激」や、「できたこと、うまくいったこと自体がうれしいという感覚や達成感」といった行動内在化型の強化刺激が

つながっていく。

また、PBISの取組を行うことにより、失敗や間違いの中に含まれる「良さ」に注目することもできる。そこでは生徒間に共感的で受容的な関係が成立することで教室が居心地のよい居場所となることが期待できる。仲間の望ましい行動や賞揚されている場面を目の当たりにすることで、他者の良さを理解するとともに、自分自身の成長目標となることも期待できる。

そのようなプロセスをたどりながら、「受け入れてもらえる」という信頼関係が教員や生徒どうしの間に生まれることで、学校内に支持的風土が広がっていくと考えられる。

2 取組の概要

本校のPBISの取組は、大きく「行動チャートの作成」と「Good Behavior カードの活用」の二つの柱から成り立っている。

(1) 「行動チャート」の作成

職員研修にて、本校で起こっている問題行動について全員で考えることで、課題・解決策の共有を図った。具体的にどんなときにどのような行動をするのか、頻度はどのくらいか、簡潔な行動として捉え、「～しない」という表現ではなく、「～する」という表現で「指導の基準」をつくり、共有することで一貫した指導を行うようにした。これを表にしたものが「行動チャート」である。(図1・図2参照)

福浜中学校 行動チャートH30						
	教室で	廊下で	グラウンドで	体育館で	トイレで	図書館で
物を大切にします	物の机やロッカーに整理整頓して置きます。	掲示物を大切にします。	用具を大切に扱います。	用具を大切に扱います。	公共物を清潔に大切に扱います。	本を丁寧に扱います。
自分や友達を大切にします	話している人を見て話を聞きます。	静かに歩きます。	自分の安全を大切に活動します。	自分の安全を大切に活動します。	手洗いをし、手は乾かします。	本を静かに扱います。
礼儀を大切にします	相手の話を黙って相手を見て聞きます。	他の人の安全を考慮して行動します。	相手の安全を大切に活動します。	相手の安全を大切に活動します。	プライヤーを大切に扱います。	動作を静かにします。
礼儀を大切にします	あいさつをします。	あいさつをします。	元氣よくメリハリのある行動をします。	元氣よくあいさつをします。	きれいに使います。	行動は静かに穏やかにします。
守るべきルールを大切にします	先生の指示をよく聞いて授業を受けます。		先生や友達の話をよく聞きます。	先生や友達の話をよく聞きます。	色や種類の本を扱います。	時間や静寂を持って移動します。

図1：福浜中行動チャート 配付版

この行動チャートを廊下や教室に掲示し、生徒への周知と同時に、教員の指導や賞賛の際の視点を共有することで、一貫した指導ができる体制を作り上げた。

校内研修では同時に、生徒とのコミュニケーションの技法も共有した。指導する際の言葉かけは、「肯定的な表現」を用いて「何をどうするのか」や「方法や時間」などを具体的な表現で簡潔に伝えること。丁寧

語で「～しようか」と提案的に語りかける技法や、「次は何するんだっけ？」と疑問形で声かけすること。「Aにする？Bにする？」といったように選択肢を提示する方法などを再確認するとともに共通理解した。



図2：掲示用行動チャート「4つの大切」

(2) 「Good Behaviorカード」の活用

① Good Behaviorカードのデザイン

先行実践されている総社西中学校と同様に、本校の「Good Behavior カード (以下、「GBカード」と記す。): 図3参照」もカードが二つに分かれるようなデザインを採用した。左半分は生徒が保管し、右半分は生徒から保護者に渡すようになっている。

GBカードには、どのような良い行いをしたかを教員が簡単に記し、保護者へもポジティブな情報提供を行う。それにより、一般的には否定的な情報から伝わりがちな保護者に、我が子が認められている肯定的な情報の伝達が行われ、学校と保護者が連携した指導が必要な場面での協力的な関係が作りやすくなるというメリットも発生する。



図3：福浜中 Good Behaviorカード

② Good Behaviorカードの導入時の留意点

GBカードの取組を導入するとき最も重要なことは、「望ましい行動」の考え方を転換することである。「望ましい行動」というと人より優れた行動やなかなか他人にはできない行動とハードルが上がってしまいがちだが、「しないといけないこと」や「した方がいいこと」の中で「できていること」と考えることが重要である。

また、「完璧にできていなくても、一部ができていくこと」や「毎日続かなくても、たまにできていること」、「実際にできていなくても、やってみようと思っていること」というレベルにまでハードルを下げてい

くことも必要である。なぜならば、「望ましい行動」が増えることで、相対的に「望ましくない行動」が減少するということが重要だからである。

褒める場面での留意点は、「できるだけその場で褒めること」であり、「何が良かったのかを具体的に伝えること」である。「最初からそうすればいいのに…」とか、「言われずにできたらもっと良かったよ…」など、皮肉や批判、比較が混じった表現になってしまうと、教師の思いが生徒の心に響きにくくなってしまうので、注意が必要である。

GBカードは10枚たまると自己申告によって校長より表彰状を授与され、校長室前の壁面に紹介される。申告せず、意図的に表彰を受けなくても差し支えない。

3 取組の評価について

(1) 成果

① 生徒の問題行動の減少

平成28年の導入後、本校の教員が2年間で配ったGBカードは7千枚を超えた。つまり、本校の教員は、7千回以上の生徒の望ましい行動を見つけることができたことになる。この取組をはじめの前は、授業中に教室に入らない生徒が2～3%存在していたが、平成28年度は0.8%に減り、平成29年度は1学期末までの段階で0%となった。

② 不登校傾向の生徒への望ましい登校刺激

2年時まで休みがちだった3年男子がある日、掃除当番ではないのに進んで机を片付けた。何気ない行動だったが、クラスメイトが担任に伝え、担任からGBカードをもらったことがきっかけとなって、学校に足が向くようになったということもあった。

③ 外発的な強化から内発的な強化への生徒の内面における変化

生徒の中にはGBカードが10枚たまって自己申告しなかったり、「カードをもらうためにしているわけじゃない」、「カードはいらない」と言う者も現れるようになった。これは、生徒にとって望ましいステップアップであり、「物質的な褒美」が必要な段階から、「言葉での賞賛」のみでも行動が強化され、さらには達成感や満足感といった内発的な強化へと生徒自身の内面でステップアップしていると考えられる。

この場合、GBカードの発行数は減るが、教育的には素晴らしい成長の姿であり、教員には、このように導く力とステップアップしている様子を見取る力が必

要となってくる。

④ 指導基準等の共有の促進

教員の側にも取組のプラスの影響が見られた。行動チャート作成の過程で、全職員で項目を考える中で、教員の生徒に対する期待（思い・願い）や指導の基準の共有が促進された。

(2) 課題とその分析

現在、GBカードについては、カードを獲得することを楽しみに「望ましい行動」を続けている生徒も存在するが、導入当初の勢いある活動ではなくなっていることも事実である。また、減少傾向にあった「教室に入らない生徒の数」も平成30年度から再び増加傾向に転じている。

以下に、その状況を出現させている要因と思われるものを分析的に述べる。

① 教員の異動と引き継ぎの不徹底による実践力の低下

教員の異動等により、実質的に取組を牽引している教員がいなくなると、実践力が相当低下する。それは、「行動チャート」に対する認識や意識の低下を招き、取組そのものを形骸化させてしまう。行動チャートは関係者全員が話し合っただけで決定し、共通認識を形成した上で取り組むことが重要であるため、毎年、年度当初に新たなスタッフを交えての再確認が必要である。それができないと、確実に次年度の実践力は低下する。

その状況を防ぐためには、年度末の人事異動に対応できるように、取組を牽引する教員の複数体制（重層的な組織）をあらかじめ作りあげておくことが重要である。

② マンネリ化感の増大

賞品や特別な権利が与えられたりするアメリカのPBISとは異なり、校長からの賞状授与だけでは3年間のモチベーションを保つことが難しい。取組開始から時間が経つにつれて生徒の間にマンネリ化の雰囲気が出てくる。問題行動を繰り返す生徒が10枚GBカードをため、一度表彰されたが、その後、二度、三度と表彰されようというモチベーションは生まれなかったという本校における実践の経験知からも、表彰回数が増えるにつれて賞揚の内容をグレードアップさせるなどの工夫が必要となる。

4 今後の展望・発展的取組への提案

(1) 「行動」と「カード交付」のタイムラグの改善

GBカードを交付した生徒の保護者にその事実を確

実に伝えることは有効であるが、現状では、教員から生徒にカードを渡す際に、具体的な行動を書き込む必要があることや生徒の名前を二度書かないといけなことから、望ましい行いとGBカードの交付にタイムラグが生じている。時間が経つほどポジティブな刺激の効果が減少するので、行動と交付のタイムラグを最小限にすること、保護者にも交付の事実を速やかに伝えるように全体で再確認して行く必要がある。

(2) 生徒による教員に対するGBカードの取組

生徒に対して教員がGBカードを配付することは、教師と生徒という立場を明確にしたものである。しかし、逆に考えると、生徒もまた教員のよい行いを観察しうる立場にある。本校の教員の中には、自分のことを後回しにして、見落とされがちな場所の汚れ落としやゴミ拾い、生徒の下足箱の整理整頓など、同僚から見ても「教員としてのよい行い」の手本となる行動が多く見られる。こうした行動について、「背中を見せて育てる姿」として生徒の「気づき」を促しそれを表現させることは非常に教育的効果があると考えられる。そのため、「生徒から教員へのGBカード発行」という取組を提案することもできる。その際には、以下の四点に留意する必要がある。

- ① 評価する側の立場を体験することで、評価されるべき「よい行い」とはどのようなことなのかを理解することができる。
- ② 教員の良い行いを知ることで、教員に対してのポジティブな感情が養われ、支持的風土のさらなる深まりが期待できる。
- ③ 教員自身が自分の行動を意識するようになり、生徒指導のスキルアップが期待できる。
- ④ 不真面目なものになったり人気投票のようなものになったりする可能性もあるので、生徒会で集計し選別するといったフィルターを通し、教員の名前は非公表として、その事象のみを学校通信などで紹介するなどの方法を決めておく必要がある。

(3) 生徒の行動変容をアセスメントする力の向上

本論3-(1)-③で述べたような、「外発的な強化から内発的な強化への生徒の内面における変化」は生徒指導上非常に重要なことである。ここを適切にアセスメントして事後の指導に生かしていく力があるかないかで、PBISの取組の指導の効果は大きく異なるものと考えられる。そのため、生徒の行動変容をアセスメントする力を向上させる研修に全教職員が取り組む必要

がある。

本校の場合は、今年度、岡山大学の清田教授と連携し、「生徒を見取る視点を教員が共有し、教員の生徒理解力を向上させていくこと」を目的としてカリフォルニア州立大学のアーサー・L・コスタ教授が提唱する「ハビッツ・オブ・マインド（16の思考習慣）」の観点を取り入れたアセスメント研修を実施している。（令和元年度8月末現在で6/19、7/26の二度実施。）

この研修では、擬似的なグループ学習活動を参加した教員集団に課した後、「16の思考習慣をベースに作成したアンケート」を実施する。そして、アンケート結果をもたらしした特定の場面について学習者と教員の双方の立場を往還させながらグループで振り返ることで、アセスメント力の向上をめざしていく。

5 おわりに

GBカードを使った取組は、生徒の行動変容を促す、教師と生徒の信頼関係の上に成り立つ積極的な教育活動である。本論は、本校での過去3年間の取組を振り返りながら、その有効性および、必然的に生じる取組の後退にどのように対処していくべきかということについてこれまでの知見をもとにまとめたものである。

今年度から、福浜中学校区でのGBカードの取組は、生徒指導担当者による小中連携によって福浜小学校にも拡大しているが、今回まとめたような知見を生かしながらより効果的な取組が持続できるよう、さらなる情報共有・情報連携を進めていきたいと考えている。

<主な参考文献>

- ・奥田健次「メリットの法則 行動分析学・実践編」2012 集英社
- ・大対香奈子「ポジティブ行動支援の導入に向けた応用行動分析学の基礎的理解」福浜中学校職員研修講師配付資料
- ・枝廣和憲「学校にPBISを取り入れる工夫ポジティブな環境づくりを目指して」月刊学校教育相談2017年1月号
- ・枝廣和憲「子どもの行動を認めて伸ばすスクールワイドPBISとABA（応用行動分析）」2017 福浜中学校校内研修講師配付資料



中学2年 動物単元での探究学習

—細胞観察からカエルの解剖への体験重視の学習—

倉敷市立玉島東中学校 教諭 山本 芳幸

1 はじめに

本校は南を瀬戸内海，東を高梁川，西を遙照山に囲まれた，自然豊かな環境に包まれており，環境面で大変恵まれている。

また，校内も落ち着いており，授業では意欲的に参加する生徒が多い。各学年の生徒の課題提出の状況は比較的良好で，生徒は確実に学力をつけている。

本校の学校教育目標は，以下である。

「盛んな向学心，豊かな心情，たくましい心と体をもった生徒を育てる。」

また，指導の重点は次の①～③である。

- 「①問題解決能力の育成 ②温かい心の育成
③実践力の育成」

上記の①～③を実践するために，本校では平成29年度より次の研究主題に取り組んでいる。

自ら学び，自ら考える資質・能力の育成
・主体的・対話的で深い学びを取り入れた授業の研究

平成29年度より「主体的・対話的で深い学び」を取り入れた授業研修を繰り返している。平成30年度は，全員が公開授業や模擬授業を行い，その研究を繰り返してきた。本年度も継続して取り組みを続けている。

2 めざす生徒像

平成29年度より，学習指導要領解説にある「主体的・対話的で深い学び」や感性・主体性・創造性の観点から，次のように再構築した。

- ① 課題を発見する。【発見】
→課題を発見し，解決に導く力の育成
(なぜ，どうして，の感性を磨く)
- ② 課題を探究する。【探究】
→課題を探究する中での主体性の育成
課題から導かれる結論と新たな課題を見いだす態度(どうなる，どうする，の主体性を磨く)
- ③ 課題を分析する。【分析】 →
コミュニケーション能力や事実を整理できる態度の育成・様々な意見を認める態度や科学的思考力の育成
(こうなれば，こうすれば，の創造性を磨く)

ここで，【発見】【探究】【分析】とキーワードを述べたが，どれもオーバーラップする部分がある。

しかし，理科の様々な探究活動をカテゴライズすることで，方向性を分かりやすく見いだせることから，本校独自の生徒像をシンプルにした。

3 中学2年 動物単元での探究学習

中学2年での動物の単元の内容は以下である。

1. 細胞 2. 消化と吸収 3. 呼吸 4. 血液の循環
5. 不要物の排出 6. 感覚器官と神経
7. 動物の分類 8. 生命の進化

動物の単元は体験的な活動は少ない傾向にあるが，以下のように実験や観察を取り入れた。

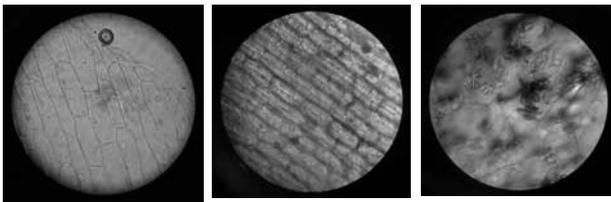
中学2年「動物」

- 1. 細胞→①植物の細胞の観察②人の細胞の観察
- 2. 消化と吸収→③唾液によるでんぷん分解実験
- 3. 呼吸→④豚の肺の実験，⑤肺のモデル実験
- 4. 血液の循環→⑥豚の血液の実験と観察
⑦ドジョウの血管の観察，⑧鶏の心臓の実験
- 5. 不要物の排出→⑨鶏の肝臓の観察
- 6. 感覚器官と神経→⑩目の実験，
⑪神経伝達速度の実験
- 7. 動物の分類→⑫アサリの解剖
- 8. 生命の進化
- 9. ⑬カエルの解剖

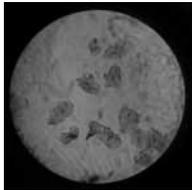
上記の紹介をする。

1. 細胞→①植物の細胞の観察②人の細胞の観察

①の植物の細胞では，タマネギ(次頁写真左)，ピーマン(次頁写真左)，オオカナダモ(次頁写真中)，バナナなどの細胞を観察した。特にタマネギの皮ではよく細胞を観察できた。バナナの実の細胞にヨウ素液をかけると，写真のようにデンプンのある部分が青紫色に染まることを確認した(次頁写真右)。



②の人の細胞の観察では、ほおを綿棒でこすり、それを顕微鏡で観察した。酢酸カーミン液で核が染まっていることを確認した(右写真)。



写真は生徒が作成したもので、比較的良いところを合わせているものはモニターにして紹介した。

2. 消化と吸収→③唾液の実験

③では、デンプンに唾液を入れたもの(赤)、デンプンに水を入れたもの(青)、デンプンに唾液を入れたものを氷で冷やしたもの(黄)の3通りで比較した。ベネジクト液を入れて加熱すると、結果が表れた。



左写真は生徒がベネジクト液を入れて加熱している場面、右写真は結果を写したものである。

実験によっては加熱しても色が変わらない班、色が変わってしまう班など様々あった。唾液の量、温度調節、でんぷんの量などを検討し、再度実験を行わせた。

3. 呼吸→④豚の肺の実験

④の豚の肺の観察では、東京芝浦臓器から豚の肺を購入した。一葉の肺でも気管に空気を入れると大きく色を変えてふくらむ。ダイナミックな動きに生徒が大きな歓声を上げる。2等分ほどに切断して、生徒にも肺をふくらませた。

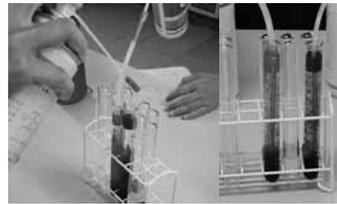


興味をもって生徒が肺をふくらましていた。切断したとき、気管支の管の近くに、2本の血管が沿うようにあることを確認した。肺と血管が近くにある理由を考えさせると、多くの生徒が酸素と二酸化炭素の交換

を行うため、と述べた。

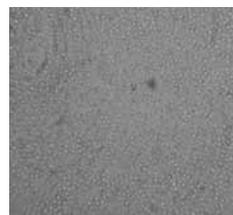
4. 血液の循環→⑥豚の血液の実験と観察

⑦ドジョウの血管の観察、⑧鶏の心臓の実験



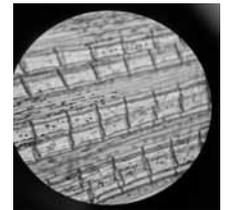
⑥では東京芝浦臓器から豚の血液を購入した。酸素と二酸化炭素を血液に送り込むと、酸素の方は鮮やかな赤色に、二酸化炭素の方はどす黒い赤色に変化した。比較すると一目瞭然だった。その実験を生徒に行わせた。

動脈血、静脈血についてはあらかじめ教えており、その違いを実験によって体感させることができた。

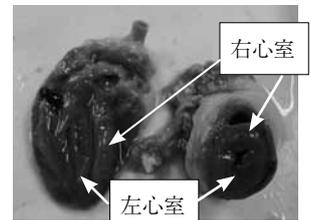


顕微鏡で観察すると、赤血球がよく見えた。(左写真は400倍)赤血球はドーナツ型をしていることを確認できた。

⑦のドジョウの血管の観察では、本来金魚やメダカなどを用いるが、ドジョウは尾びれが長く、丈夫な生き物であるので血流を見せるのが効果的である。観察の際、血流の方向が一方方向のみに流れていることや先端にターンしている部分があることを確認させた(右写真は100倍)。



⑧の鶏の心臓の観察は、スーパーから「鶏きも」を購入した。肝臓と心臓がついた状態のものを班に2つずつ配布し、実験を行った。ピストンで水を入れると、もう片方の穴から水が出たことから、血管と心室のつながりに気づく生徒がいた。



縦に切ったときに右心室と左心室の筋肉の違いなどを各班に解説して回った。その厚さの違いに驚く生徒が多かった。感想にも、全身に血液を送る方が、筋肉が厚いことがわかった、と述べる生徒がいた。

6. 感覚器官と神経→⑩目の実験

⑪神経伝達速度の実験

⑩の目の実験ではピント合わせの実験や目の虹彩がのびたり縮んだりする実験を行った。光を当てると瞳孔が小さくなる現象に生徒が驚いていた。

⑪の神経伝達速度の実験では、生徒が手をつないで握ったら隣の人の手を握るという方法で行った。何秒か



測定し、1人あたり何秒か計算させた。だいたい0.28~0.22秒くらいだった。

⑪では神経伝達速度測定規を生徒に配布し、1人の人が定規を落として、何秒でキャッチできるか3回通り実験した。速い生徒は0.15秒くらいでキャッチでき、千円札でもキャッチできた。



⑪の活動を通して、神経が伝達していく速さがよくわかった、という感想を述べる生徒も多かった。動物による神経伝達速度の違いを夏休みの自由研究で調べてくる生徒もいた。

9. ⑬カエルの解剖

この単元の総まとめという意味で、カエルの解剖を行った。用いたのはアフリカツメガエルで、1クラスに対して4体のカエルを解剖させた。

前授業では先に授業ワークシートを配布し、まずカエルの命を預かって授業を行うこと、命の大切さについて述べた。どうやって解剖するかを大まかに述べた。

解剖の授業は1時間のみで行った。最初は躊躇していた生徒も多かったが、徐々にのめり込んでいく生徒が多かった。



卵巣、脂肪体などを取り除き、まず肝臓、胃、小腸、大腸、肺などを取り除いた。胃では、BTB液をつけると黄色になることから酸性であることを知る生徒がいた。心臓では、取り除いてもまだ動いている班が多く、一様に驚いていた。肺はストローでふくらますと大きくふくらんだ。臓器はすべてシャーレに入れ、小分けにした。

また、臓器をすべて取り除いた後、体を腰の部分で



切り、神経に電流を与えるなどして、体の動きを見た。中には、脳や目を探り当てた



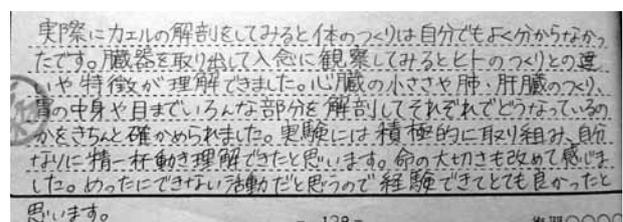
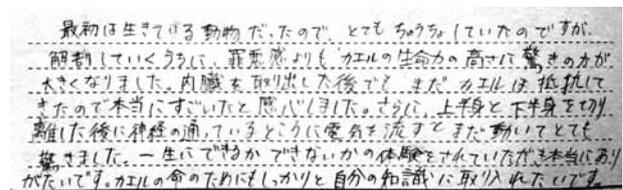
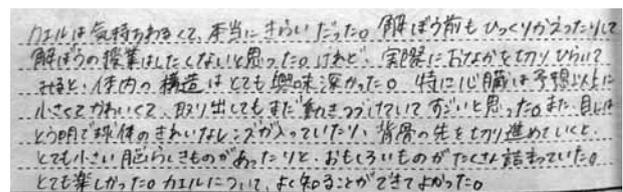
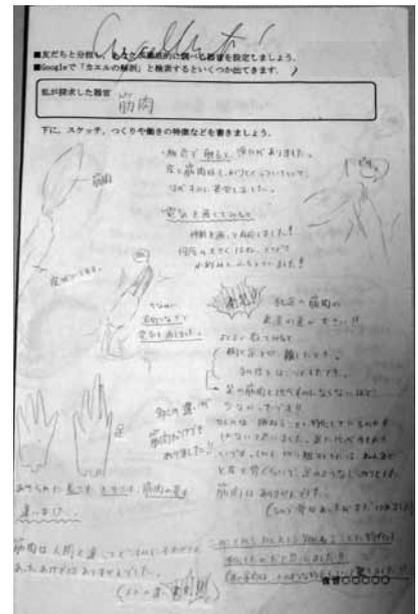
生徒もいる。

解剖後、レポートにまとめさせた。すべての臓器をすべて書くのではなく、1つの臓器に注目させてレポートを書かせた。1つ1つを探求するという意味でレポートを提出させた。

右のレポートでは、筋肉について見かけや触れたときの感じ、電流を動かしたときの様子、手と足の筋肉の違い、人間との違いを比較し、レポートにまとめていた。

生徒の感想を紹介する。

感想より最初は躊躇したが徐々にのめりこんだ様子が見える。



生徒の感想の中にあつた「カエルの命のためにも」「命の大切さ」というものがあつた。このことから、生命尊重、かけがえのない命という視点を、生徒に伝えられたと感じる。

動物単元の本実践を目指す子ども像に当てはめたのが下の文である。

① 課題を発見する。【発見】

- ・カエルの解剖で、人間と同じような臓器があることを発見する。
- ・ニワトリの心室の厚さの違いを発見する。
- ・神経が伝達していくことを目で確認する。
- ・ドジョウの血液の流れを発見する。など

② 課題を探究する。

【探究】

- ・カエルの解剖で、臓器以外の部分を探究し、新しい発見を見いだす。
- ・カエルの解剖で、臓器などの1つに絞って探究し、レポートにまとめる。
- ・ニワトリの心臓から大動脈や心房などの部分を見出す。

③ 課題を分析する。

【分析】

- ・カエルの解剖から、胃の性質や、筋肉の役割、心臓の役割など、探究することから人間と同じような部分と解釈する。
- ・神経伝達速度を計算し、感覚神経から脳、脳から運動神経という流れを確認する。

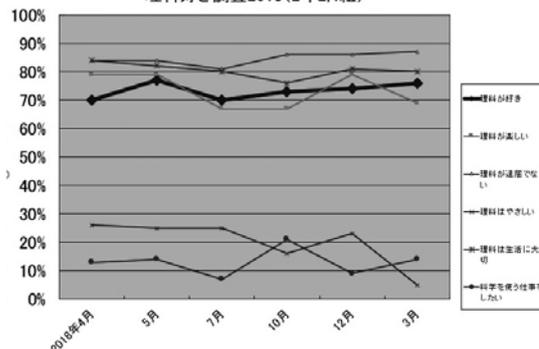
4 考察と今後の課題

TIMSS（国際数学・理科教育動向調査）に基づく生徒の意識調査を行った。2018年度の中学2年2クラスで実施した。結果は以下のとおりである。

2018年度2年2クラス	4月	5月	7月	10月	12月	3月
理科が好き	70%	77%	70%	73%	74%	76%
理科が楽しい	79%	79%	67%	67%	79%	69%
理科が退屈でない	84%	84%	81%	86%	86%	87%
理科はやさしい	26%	25%	25%	16%	23%	5%
理科は生活に大切	84%	82%	80%	76%	81%	80%
科学を使う仕事をしたい	13%	14%	7%	21%	9%	14%

理科が好きと答える生徒は、前中学2年で80%（3月時点）、現中学3年で77%（3月時点）であり、国内平均（2011年）の56%、国際平均（2011年）の76%と同程度である。

理科好き調査2018(2年2.4組)



動物の単元は9～11月で行った。そのときの理科好きの割合は3%増えている。しかし、理科が生活に大切、科学を使う仕事をしたい、の項目は4%下がっている。観察・実験が生活や職業につながるような授業の展開にできていないことが原因と考える。

次はこのような点を改善したい。

動物単元の実践の多くは、日本理科教育支援センターの小森栄治氏の実践に基づいているものが多い。第2分野は観察・実験が少ない傾向があるが、このようにどの章でも観察・実験を繰り返すことで、動物がより自分の身近な存在になり、思考や理解も深まると考える。

動物単元に生ものは必須であると考えますが、その反面、生ものを扱うのが苦手な生徒にとっては苦痛を催す場合があつた。ほとんど手を付けず周りがしているのを少し見るぐらいの生徒もいた。無理に実験に加わるよう指示することはなかったが、生ものを扱うのはリスクを伴うことを肝に銘じたい。

数多く観察や実験をしたことが理科好きにつながっているかには疑問がある。本物を扱うことへの趣意説明や解説、考察をもっと授業の中で深めていく必要を感じている。

また、実験で扱う生体は、主に東京芝浦臓器で購入した。一連の観察・実験を継続するためには、そのノウハウを共有できるよう教科別研修で紹介していく必要がある。

5 おわりに

本実践は、アクティブ・ラーニングには極めて効果的な実践と考える。学習指導要領に備えるため、本実践が効果的であることを、さらに証明したい。

本実践に際し、本校の理科担当の教諭に多くの協力をいただいた。また、小森栄治氏には多くの指導助言をいただいた。謹んでお礼申し上げます。



SDGsと関連づけた「総合的な学習の時間」の推進

—持続可能な社会の創り手となる生徒集団の育成を目指して—

岡山大学教育学部附属中学校第2学年団 教諭 竹島 潤

1 はじめに



本校は、SDGs（持続可能な開発目標）達成に重点的に取り組んでいる国立大学法人岡山大学における教育学部附属中学校である。岡山大学とのつながりをはじめ、地元企業や非営利セクター（NPO・NGOなど）など外部・専門機関との連携・協働をいかした教育活動の充実により、「学校教育を通してよりよい社会を創る」という理念のもと、「持続可能な社会の創り手を育む」ことにつながる教育活動を追求している。また、その知見をさまざまな教育現場の充実や、今後の教員養成などに繋げていくことを使命としてもっている。

今回、当該学年生徒たちの豊かな成長を目指すにあたり、本校の総合的な学習の時間（ER：Earth Rise）で目指す「社会に参加・参画・貢献・寄与できる生徒の育成」をこれまで以上に意識することとした。取り組み内容においてはSDGsとの関連性に、その過程においては持続可能な社会づくりにおける「構成概念」「重視する能力・態度」「留意事項（3つのつながり）」（国立教育政策研究所（2012）「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究〔最終報告書〕」）に留意して取り組んだ。なお、こうした学習活動に必要な基礎的な学力は、本校の共通研究主題や教科指導の蓄積により運動して養えていると考えている。

本稿は、平成30年度第1学年および平成31年度第2学年の「総合的な学習の時間」（ER：Earth Rise）における取り組みを、「SDGs達成」ならびに「ESD視点」（持続可能な社会づくりの創り手として期待される能力・態度の視点）から、考察したものである。

教育実践をすすめるにあたっての、学年および分掌におけるプロセスそのものが、多様性を認め合い、多面的総合的な見方を伴い、創造性と繋がりを意識したものであることも付言しておく。

2 主題設定の理由

本校の生徒たちは、岡大附属小および県内各地の公立小・私立小から受験を経て進学してくる。当該学年の生徒たちにおいても、全体的に知識・理解や個々の能力においては優れたものがある。一方、「多様な価値観を認め合い」「リスクを恐れずに行動し」「学年としての連帯感を高めていく」ことなどについては、学校生活を通して、生徒たちにもっと高めてほしいと思うことであった。そこで、本校の重点目標「教育活動の質の向上」に「SDGsとの関連性を意識した教育活動の工夫」を取り入れ、総合的な学習の時間に着目し、学年集団全体を俯瞰しながら、生徒の能力・態度を伸ばさせることを図った。

3 研究仮説

SDGsとの関連性をもたせた「総合的な学習の時間」を推進することで、生徒の「多様な価値観を認め合い」（多面的総合的な考え方）「リスクを恐れずに行動し」（参加・責任性）「学年としての連帯感を高めていく」（関連性）など、ESD視点で大切にしたい能力・態度が向上し、よりアクティブな生徒集団を育むことができるだろう。

4 実践報告

1年次では学年講座（国際、情報、平和、人権・福祉、環境、キャリアの各領域で参加型・体験型の学習、探究やESDの考え方の基本を理解する学習）としてインプット重視の取組を行い、2年次では生徒の主体性を育むため、実行委員形式を取り入れ、京都宿泊学習、平和学習、メンタルヘルス学習、キャリア学習等において、グループでのプレ探究を行い、3年次に1・2年次での学習成果をもとに個人でテーマを設定し、探

究を行うことを目指している。

(1) ER講座プログラム (平成30年度第1学年)

平成30年度第1学年では、持続可能な社会を目指す上で、大切にしたい考え方や社会の課題、多様な価値観や人に触れさせたいと考えた。そこで、校内外のリソースを活用しながら、「SDGs」ならびに「ESD」で重視したい能力・態度」を位置づけた、インプット重視の参加型講座に取り組んだ。

領域	講座名	目標	学習内容	つながり	担当
共通	基礎 (ESD・SDGs)	【能力・態度】 実社会や実生活の中から問いを見つけられる／その視点がもてるようになる【多面】	ESDの視点でのお話を聞く： 5/30 ア SDGsの視点～問いをもちながら学ぶということ～ 9/5 「エコ博士の世界を回って～知識から行動へのヒント～」	友延栄一さん (岡山市生涯学習課/元ESD推進課) 中平徹也さん (津山圏域クリーンセンター/元環境学習センター/アスエコ)	三村竹島
	国際学習～世界はいろいろな国や文化がある！	世界には多様な国や文化があることを知り、興味関心を高めながら、問いを見つけられる【多面】	6/6 13, 20, 27 国際協力について学ぶ。ワークショップ「世界がもし36人の村だったら？」	守都未来さん (JICA岡山デスク/元ユニセフ岡山協会) 田賀朋子さん (矢野町役場/元JICAセネガル) 竹島潤さん (NPO国際協力研究所・岡山/元JICAモザンビーク)	竹島
A国語	GIFT 学年講演会	コミュニケーションを大切にし、相手の文化を理解し分かり合おうとする態度を養う。【伝達】	12/11 「異文化コミュニケーション～国・地域人々を比較しながら考えよう～」	ティム・クレモンソンさん (川崎医療福祉大)	高田
	主張を伝えるプレゼンテーション	メディアの特性や著作権について理解し、効果的な活用ができるようになる。【伝達】	6/6 13, 20, 27, 7/4 情報の収集の仕方と効果的な表現について、プレゼンテーションを作成しながら学ぶ。	高田誠さん (岡大附属中)	
C福祉・健康	誰もが快適な生活を目指して	「誰もが快適な生活」について、自分の考えをもつことができる【協力】	6/6 13, 20, 7/4 身近なUI/UX製品や施設・設備について考えた。高齢者の認知体験を行ったりすることで、UI/UX (ユニバーサルデザイン) の視点で自分たちの生活を見直す。	※手話体験・車いす体験 岡山空襲を語り継ぐ 手話ボランティアの方々2名 (岡山市社会福祉協議会 中区事務所)	埴田三平
	軌跡をめぐる	「平和」について、自分の考えをもつことができる【参加】【未来】	6/6 13, 20, 7/4 岡山空襲を語り継ぐことで、戦争の悲惨さ、平和な暮らしのありがたさについて考える。	大福寺 浄教寺 玉井宮 防空壕跡 岡山空襲展示室 ※資料 (デジタルミュージアム)	渡邊小田
Eキャリア	大学探検	「大学ではどのようなことをしているのか」を知ることで、「将来の自分」について、考えることができるようになる【未来】	6/27, 7/4 岡山大学での学びやキャンパスライフの見聞、取材。お礼状作成 (国語科)	中山芳一准教授 (岡山大学教育学・学生支援機構) 岡山大学教授・学生の方々 (岡山大学教育学部各研究室)	川本三三平
	ERXふくしま	自分や社会の課題に関心をもち、考えて行動したり、自己表現したりする生き方ができるようになる【批判】【多面】	12/20 ERXキャリア講演会「福島県 双葉郡浪江町 希望の牧場・ふくしま “考え行動する生き方をつかめ！”」 1/18 芸術鑑賞も講演会「牧場」「ふくしまの母」対話型鑑賞授業 (美術科)	吉沢正巳代表 (希望の牧場・ふくしま) 山内若菜さん (画家)	竹島

(第1学年ER講座で関わった団体・人)

- ・岡山市生涯学習課 ・津山圏域クリーンセンター
- ・環境学習センター・アスエコ
- ・JICA (元青年海外協力隊員) ・NPO ICOI
- ・川崎医療福祉大学 ・岡山大学教育学部各研究室
- ・岡山市社会福祉協議会中区事務所 ・画家
- ・大福寺 ・浄教寺 ・玉井宮 ・岡山空襲展示室
- ・希望の牧場・ふくしま (福島県双葉郡浪江町)

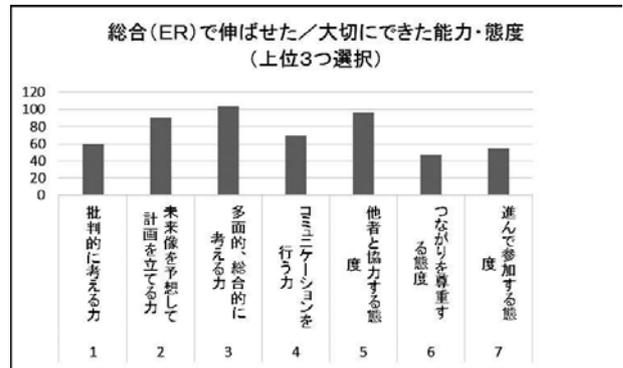
生徒が年度末に行った自己評価では、「自身が伸ばせた／大切にできた能力・態度」として、「多面的、総合的に考える力」「未来像を予測して計画を立てる力」「他者と協力する態度」などを選んだ生徒が多く、記述コメントから今後もこうした学習活動に取り組みたいという意欲・関心がうかがえた。

また、学年全体で取り組んだまとめ学習では、生徒たちは本講座で学んだ要点として、次の3点を挙げた：
・「グローバルなこととローカルなことはつながって

いる」

- ・「自分がまずやってみる、行動が大切」
- ・「問いをもちながら学ぶ」

この経験は、第2学年におけるさまざまな学習活動で活かされており、後述の学習プログラムなどで生徒主体の実行委員会形式による取り組みが継続されている。



(2) 京都研修プログラム (平成31年第2学年①)

第2学年では、宿泊的行事である京都研修の行程に、総合的な学習の時間としてのグループ別探究活動を位置づけた。下記はプログラムの概要である：

○第1時 「ERオリと宿泊行事をつなぐ学年授業～SDGsと探究の基礎理解～」(2・3年合同)：SDGs, 探究について講義およびグループでのワークショップを通して確認した。

○第2時「京都に向けて“問い”をもとう～前時オリエンテーションを踏まえて～」：個人・グループ・クラス全体で、京都について知っていることや関心のあること、学んでいることやもっている知識をどのように結び付けることができるか、「問い」に対する答えや、答えのヒントを見つけるために、どんなことが必要だろうか？(京都に行く前に/京都(現地)で/京都から帰って) などを出し合った。

○第3～5時「班別自主研修(1日目)の計画を立てよう」：各自で考えたことを、ワークシートを用いて班で共有し、班としてのテーマおよび問いを設定し、班別自主研修の計画書を立てた。学校行事(仲間づくり)の要素も考慮し、観光と探究の両側面から計画を立てることに留意させた。情報収集では、タブレット端末、書籍、地図、路線図などを活用させ、約3時間(しかも着物を着て)の活動時間を通して、SDGsと京都の関連を学ぶことができた。

(班から出た問いの例)

- ・どうして技術が発展しているのに、昔ながらの町並

みを残せているのか。

- ・ どうやって京都は、歴史的建造物を観光に生かしているのか。
- ・ なぜ今もなお、たくさんの人々に西陣織・友禅染・清水焼などの伝統産業が受け継がれ、観光の名物になっているのか。
- ・ 京都では、(地元の人、外国人など) 全ての人が心地よく『住み続けられる町づくり』をどのような工夫をして守り続けているのだろうか。

○第6時「各班で立てた計画をクラスで共有しよう」：保護者参観授業で実施することで、SDGsとの関連や校外学習計画について、保護者の方にも情報共有することができた。質疑応答を含む進行もすべてER京都実行委員会でおこなった。



クラスでの
班別計画発表会

○第7時「実際に京都でフィールド学習をしよう」：5/19(日)～21(火)の2泊3日を活用して、現地・現場で学びを深めることができた。

- 第8～12時「京都研修の学びをまとめ、次につなげよう」：班新聞の作成と発表を通して、各自および各班の問いやSDGsとの関連を振り返った。クラスから学年発表会(現在、代表グループは10月開催の総合的な学習の時間の全校共有会にあたる「ER交換会」にむけて発表準備を進めている)までの過程も、基本的にER京都実行委員会が主導でおこなえるように指導助言した。最後に、京都研修プレ探究実施後の生徒コメントから一部抜粋し、紹介する：
- ・ 京都に実際に行って、SDGsとのつながりからいろいろな場所を見たり、地元の人たちにインタビューすることができた。
 - ・ 京都が歴史と最先端の技術をとともに大切にしている姿勢が、SDGs11「住み続けられる町づくり」そのものだと思った。
 - ・ 前よりも、SDGsの考え方が分かったので、岡山や他のERのプログラムでも応用したい。

(3) 平和学習プログラム(平成31年度第2学年②)

ER平和学習プログラムにおいて、地域の方や専門

家と連携・協働し、学習活動を展開した事例を紹介する。1年次にクラス単位で本校近隣の神社や寺院、防空壕跡などのフィールドワークを実施した(前述ER講座「平和」)。2年次では、家族等への戦争体験の聞き取りを含む事前学習、地域の歴史研究者による語り部講演会、班ごとの市内中心部フィールドワーク、図書館の特設企画展、市主催戦没者追悼式への参列、デジタル紙芝居上映などに取り組んだ。プログラム終了後に平和学習実行委員20名に、前述「自身が伸ばせた／大切にできた能力・態度」に関するアンケートを行うと、すべての能力・態度において95%以上の生徒たちが肯定的回答(5および4)であった。

下記はプログラム概要である；

○6月3日(月)～ER平和実行委員会(各クラス生徒委員1～2名+有志1～2名の4名の合計20名)始動、目的やメンバーの確認や仕事内容の分担、特設展示コーナー準備(書籍・焼夷弾・パネル資料；展示期間：6月4日(火)放課後～7月1日(月))を行った。

○6月10日(月)帰りの会 平和FWにむけた事前学習1(昨年の復習と概要の説明)

○6月11日(火)帰りの会 平和FWにむけた事前学習2(行き先決定)

○6月12日(水)語り部講演会

講師：日笠 俊男さん(元岡山空襲資料センター代表 元中学校校長・本校OB)

○6月19日(水)平和フィールドワーク(岡山市中心部・シティミュージアム)：プレ探究と位置づけ、岡山空襲や平和都市・岡山に関する問いを探究するプロセスとしての現場学習とした。

(訪問場所)

蓮昌寺・岡山神社・田町橋・本行寺

金刀比羅神社・岡山城天守台・岡山城石山門跡

○6月26日(水)各クラスでのふりかえりと共有

○6月29日(土)岡山市戦没者追悼式(岡山市民ホール)平和実行委員他有志参列

○7月3日(水)ER平和学習報告会(学年授業)? デジタル紙芝居「岡山空襲」の上映(作成：岡山県退職女性教職員の会)実行委員会による報告や意見交換会をおこなった。



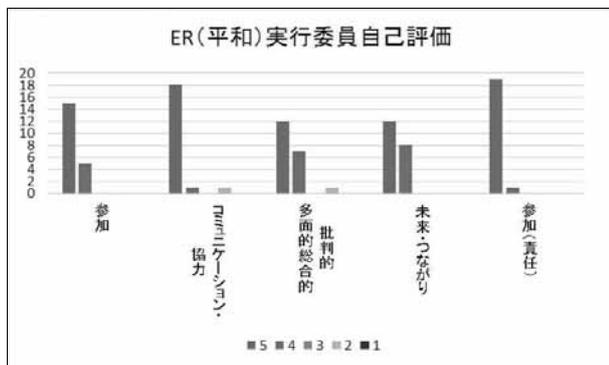
デジタル紙芝居を
発表する実行委員の担当者たち



平和学習の成果について、意見交換会する様子

上記の取り組みはいずれも、ER（平和）実行委員会で計画、準備をすすめながら行った。最終の成果報告会には、保護者の方々や岡山市福祉援護課の方などもご参観に来られ、戦争や空襲の悲惨さについて若い世代が継承することで、平和を求める運動に取り組むことへのご称揚をいただいた。

ER（平和）実行委員会最終回に、「ESDで重視したい能力・態度」に関する自己評価をおこなった。特に、「コミュニケーション・協力」「参加（責任）」の2項目で、自身の能力が伸びたことへの自覚があるかどうかについて、「5（大変あてはまる）」と回答した生徒が多かった。



(4) 学年での共有と拡がり

これらの学習プログラムでは、各クラス成果発表会を経たクラス代表による「学年発表会」や、学期末におこなう学年集会での「成果共有会」を毎回、おこなっている。こうした会を生徒委員会や各プログラム実行委員会が主催することにより、運営する生徒たちおよび参加する生徒たちにおける主体性の向上をねらった。「みんなから一言」のコーナーでは、自由挙手制により、学びや経験を通じた自分の思いや考えを学年の仲間全体で共有することで、「私もやってみよう」

という意欲が、学年全体で少しずつ向上しており、毎回新たに全体発表する生徒が増えている。

5 成果と課題

(1) 学校全体の教育活動として

生徒の興味・関心や社会の動向などから適時性を備えた学習テーマを設定し、当該学年で計画、実施できていることが、生徒集団の学びや成長につながっているという実感となっている。これを先行事例にしながら、3年間を見通したESDの視点をもった年間指導計画を確立できるよう、担当者会および教員会議などで情報共有と共通理解を図っていききたい。

国際学習、人権学習、メンタルヘルス学習、キャリア学習などの取り組みは、まさに教科横断的な視点が必要とされ、かつ地域や社会のさまざまな関係者・機関との連携協働をうながすものである。今後も、本校の強みでもある教科教育における蓄積や大学との連携をいかしながら、SDGsを意識した総合的な学習の時間における学習プログラムを通して、本校の強みを生徒たちとともに発信していきたい。

(2) よりアクティブな学習活動を目指して

アウトカムとしての学習成果物づくり（新聞や掲示物）、校内でのプレゼンで終わるのではなく、市民講座や事業・商品化、人的交流等のアウトプットとなるような工夫を加えていきたいと考えている。生徒たちが、自ら【探究の過程】（問いの発見・設定－情報収集－仮説の設定と検証－考察）をスパイラルに用いられるような機会づくりとその成果を検証することについて、今後とも学年団および学校全体で取り組んでいきたいと考えている。

（以上）



「地方創生」に応える商業高校の実践的研究

—地域課題の理解を促すRESAS活用と繊維産業発信の取組—

岡山県立倉敷商業高等学校 教諭 川崎 好美

1. はじめに

人口減少をはじめとする地域の課題解決には中長期にわたる対策が必要として、高校をフィールドに次代を担う人材育成の政策が「まち・ひと・しごと創生基本方針2019」において示された。実社会との結節点である、高等学校教育において、将来地域を支える人材育成の視点と取組が必須であることが強調されている。

基本方針には「文章や情報を正確に読み解き、対話する力などの基盤的な力を身に付けさせるとともに、高等学校段階で地域を知り、愛着を持つ機会を創出することが重要である」と明記されたことを受け、地域と関わりの深い商業高校において取り組んでいる実践を報告する。

2. 研究主題設定の理由

(1) RESAS活用の可能性

地域経済分析システム（RESAS）は、地方公共団体の様々な取組を情報面から支援するために内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局が提供する産業構造や人口動態、人の流れなどの官民ビッグデータを集約して可視化しているビッグデータである。市町村単位までの情報が把握できる「量の多さ」、人口動態、産業や観光消費動向などのあらゆるデータが集約された「多様性」、地域間の比較が瞬時にできるなど「生成速度」などビッグデータの特徴を生かした地域の現状と課題をデータで把握できるシステムであり、地方公共団体など行政向けに開発されたものである。昨今は、教育分野での活用も課題とされ、新学習指導要領「地歴公民」編にはRESASの文言が明記され、昨年の大学入試センター試験「公民」では、RESASを活用したデータ分析が出題されている。教科教育においても実在のデータを扱うなど根拠を持つことの視点は必要である。地域経済を学習フィールドとした商業科においては、RESAS利活用の場面が十分にあり、その実践と活用後の生徒の意識をまとめ、活用の有効性を検証する。



RESAS活用の場面（1年：総合的な探究の時間）

(2) 繊維産業の理解とその実践

倉敷市の基幹産業でもある繊維産業は、一昨年には、日本遺産ストーリー「一輪の綿花から始まる倉敷物語」に認定されるなど、その歴史的・文化的価値が再認識されている。こうした地域資源を教育活動に取り込み、この地域ならではの学習や取組を報告し、検証する。



倉敷美観地区での繊維製品ワークショップ（4/20）

3. 本実践の目標

内閣官房まち・ひと・しごと創生本部が提供する地方創生の情報支援策のRESASに慣れ親しみ、地域課題や地域の状況を根拠を持って把握し、解決策や妥当性を考えることのできる力を身に付けさせる。また、ビジネス教育の観点から倉敷の基幹産業である繊維産業にテーマを絞った。マーケティングの知識や技術を試すことができる実践は、協働性やコミュニケーション能力などに好影響を与える。

4. 仮説

- (1) RESAS活用により、地域理解が促進され、探究学習の動機づけになる。
- (2) 繊維産業のワークショップ継続展開は、生徒の説明や対話能力などのコミュニケーション能力に影響を与える。

5. 研究の実際

(1) 1年生「総合的な探究の時間」

① 地域産業の歴史と現況の理解

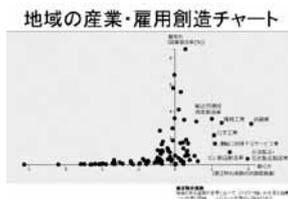
講演：大原美術館 大原あかね理事長

倉敷の歴史と文化を中心にアイビースクエアがかつての倉敷紡績の工場跡地であることなど地域の歴史が現在の産業につながっていることを理解した。



講演：倉敷市ものづくり 倉敷市商工課

製造業が基幹産業である倉敷市の産業の現況を理解。RESASや経済センサスなどを用いて、根拠ある数字による解説は、実務としての活用イメージを持たせた。



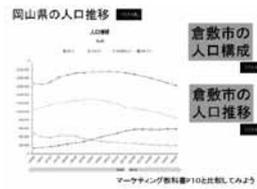
「倉敷市ものづくり産業」スライド一部

② 探究スキルとしてのRESAS活用

1年生「総合的な探究の時間」において、探究スキルを身に付けさせるために、RESASの活用方法を習得させた。8クラス320人の展開であり、効率も考え、自作教材を活用して、人口構成・産業構造・観光・消費動向などにポイントを絞った。配当時間は1時間である。

a. 自作教材

パワーポイントで作成し、ハイパーリンク機能を活用し、RESASのページへ移動できる教材である。岡山県と指定地域、他県との比較など理解のポイントを示した教材で、短時間および複数講座での展開を考え、効率化を図った。



b. 活用ワークシート

ワークシートに「なるほど!」と感じたことを付箋紙のように記入させる。1番のなるほど!なとくを3行の文章にする。

探究学習に使ってみたいデータを記入させる3部構成である。



c. アンケート集計

1年生310名にRESAS活用についてのアンケートを行った。

1. RESAS (リーサス：地域経済分析システム) の使い方について

①よくわからない	41%	
②わからない	6.6%	否定10.7%
③なんとなくわかった	75.9%	
④よくわかった	13.4%	肯定89.3%

2. 地域の様子について

①よくわからない	2.8%	
②わからない	5.7%	否定 8.5%
③なんとなくわかった	76.3%	
④よくわかった	15.2%	肯定91.5%

3. 探究学習 (調べたり、発表したり) において

①絶対使いたくない	1.4%	
②使いたくない	1.7%	否定 3.1%
③使うかもしれない	50.2%	
④ぜひ使いたい	46.7%	肯定96.9%

d. アンケート自由記述より

・倉敷や自分の住む町のこととかが色々調べてみたくなりました。市と市とのつながりとか、県と県とのつながりなどもっと知ってみたいくなりました。

・自分たちの知らないこと、自分の地域の状態やその後の状態を知られるなど、本当に凄いものだという事を知った。特に、関西や中部の人が倉敷を訪れたり、物流では青森に関わりがあ

るといふことに驚いた。今後も倉敷について知りたいと思った。

- ・RESASを使うことで岡山のことを数値化して知ることができて、すごく分かった。自分の考えと比べることも出来たのでとても良かったです。

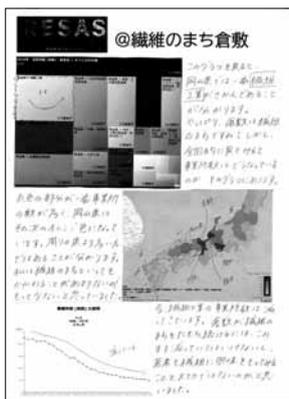


「総合的な探究の時間」地域理解のためのRESAS活用

(2) 3年生「ビジネス経済」13名（国際経済科・選択）

① 単元：経済成長と景気循環

3年生では、単元における探究そのものとして、RESAS活用を取り入れ、繊維産業の現況をテーマに考察、パフォーマンス課題として下記のようにまとめて、授業内で共有した。



繊維産業をテーマとしたパフォーマンス課題



「ビジネス経済」パフォーマンス課題発表の様子

② データ分析の専門家より助言

オープンデータ活用推進を担う一般社団法人データクレイドルの安達氏に来校いただき、各々の探究に助言をいただいた。生徒一人ひとりが自身の着眼点や今後の着地点を説明し、それに対して見方・考え方の示唆をいただくなど、外部人材の活用を図っている。



(3) 繊維産業ワークショップ継続展開

平成29年に認定された日本遺産ストーリー「一輪の

綿花から始まる倉敷物語」を学習の題材にしてきた経緯もあり、倉敷市日本遺産推進協議会の協力を得て、繊維産業ワークショップを継続展開することとした。

国内外の観光客には、伝統的な地域産業の発信、地域住民には、人手不足など厳しい状況が続く繊維産業に興味関心を持ってもらう機会とする。3年生課題研究「地域経済探究」の履修生徒を中心に運営する。

① ワークショップの内容

細巾織物である畳縁を材料とした畳縁くるみボタンのワークショップ（材料費100円）を展開する。



この他にいぐさりリース、デニムコースターのワークショップも準備している。

② ワークショップ実績（平成31年～令和元年度）

4/20(日)	倉敷美観地区 大原本邸前
4/27(土)	瀬戸内国際芸術祭 オープニングイベント
7/13(土)	くすのきマルシェ 倉商ブース
8/2(金)	オープンスクール 中学生対象
8/9(金)	天満屋倉敷店1Day KURASHIKI
9/1(日)	天満屋岡山店1Day KURASHIKI



瀬戸内国際芸術祭（4/27）



くすのきマルシェ（7/13）

③ 倉敷工業高校との協働企画

今年度、倉敷工業高校（以下：倉工）にテキスタイル工学科が新設された。県内で唯一の繊維系学科として、新たなニーズに対応している。学科は異なるが、繊維産業の発信や技術の伝承など目標を共有した倉敷市内専門高校の協働企画である。ものづくりの専門知識や誇りを持つ工業高校生とマーケティングの知識を活用して販売活動を行う商業高校生との協働学習の機会に、相乗効果もあると考

えている。

「1 Day KURASHIKI in 天満屋倉敷店」では、倉工はデニム生地の特化したコースター、キーホルダーの制作の企画、倉商は畳縁くるみボタンといぐさリース制作ワークショップを行った。9月1日も天満屋岡山店にて同様のワークショップを行う。



倉敷商業高校ブース



倉敷工業高校ブース

④ 振り返りシートの集約

ワークショップに参加した生徒には、必ず振り返りシートを記入させる。自由記述の他、大切だと思ったキーワードを順位選択し、そう感じた場面を記入させる。これを集約したものが下表である。

1	積極性を出す	65
2	対話する	37
3	協力する	24
4	説明する	23
5	実行する	16
6	知識を得る	10
7	個性を出す	6
8	振り返る	6
9	思考する	5
10	質問する	4
11	改善する	4
12	発想する	3
13	解決する	3
14	活用する	3
15	調査する	3
16	目標を持つ	2
17	比較する	2
18	決定する	0
19	時間を意識	0
20	評価する	0

Cotton Terrace 千両印刷 (年)

「1 Day KURASHIKI in 天満屋倉敷店」ワークショップの振り返りシート集約結果表

ワークショップに参加した生徒には、必ず振り返りシートを記入させる。自由記述の他、大切だと思ったキーワードを順位選択し、そう感じた場面を記入させる。これを集約したものが下表である。

この表は、ワークショップに参加した生徒の振り返りシートから抽出されたキーワードとその出現回数（ポイント）を示している。最も多かったキーワードは「積極性を出す」で65ポイントであった。

順位	キーワード	ポイント
1	積極性を出す	65
2	対話する	37
3	協力する	24
4	説明する	23
5	実行する	16
6	知識を得る	10
7	個性を出す	6
8	振り返る	6
9	思考する	5
10	質問する	4
11	改善する	4
12	発想する	3
13	解決する	3
14	活用する	3
15	調査する	3
16	目標を持つ	2
17	比較する	2
18	決定する	0
19	時間を意識	0
20	評価する	0

数値は、1番大切だと感じた項目に3ポイント、2番目に2ポイント、3番目は1ポイントの重みづけをし、合計したものを降順に並べた。参加者延べ37名を集約している。

6. 仮説に対する考察

(1) RESAS活用の有効性

RESASで提供されるデータは、行政や民間向けに開発されており、教育には馴染みの薄いものであったが、高校での地域人材育成を受け、学校での活用が今後、活発化されることになる。1年生「総合的な探究の時間」での活用後のアンケートでは、活用スキルについては、否定回答が1割以上あるものの、人口動

態や産業構造などの地域の様子については、理解できた生徒も9割を越えた。また、今後の探究学習においても、根拠を持った信頼できるデータとして活用について前向きな回答をした生徒も9割を越えた。探究学習の動機づけや探究方法の理解としては、有効であったが、今後の学習においてもデータ活用の積み重ねが肝要である。

(2) ワorkshop実践で身につく資質・能力

ワークショップは、「何のために何をしているのか」「どのようにするか」を言葉で伝える場面が多い。振り返りシートの活動により「大切だと意識したこと」を集約したところ、最も高い「積極性を出す」は、主体性を示し、「対話する」「説明する」は、コミュニケーション能力への意識を示す。また、「協力する」は、役割分担や気遣いなども含めた協働性を意識している。一方で、「決定する」「評価する」などの意思決定やPDCAなどマネジメントに関わる項目は、低く今後の課題となった。

(3) 学びと実践の往還

科目「マーケティング」で学ぶ消費者心理や販売促進の理論を確かめる「実験」としてワークショップは、有効である。顧客の様子を見ながら、畳縁の選択がしやすいように台紙に生地を貼り付けたり、子どもの目を引くように風船を並べたり、POP広告を作成するなどの創意工夫が行われた。実学を学ぶ商業科としての学びと実践が往還する場面であった。



(左) 生地を選びやすいように台紙を準備 (右) 円形のPOP

7. まとめ

地域連携や地域学習が求められる今日にあって、地域をテーマに産業や諸課題に向き合い、実践を蓄積してきた商業科は、地方創生のリーディング学科である。実践的学習に関わる生徒だけでなく、より多くの生徒に地域理解の機会を設け、興味関心を持つきっかけにすることも、地方創生に応える教育実践での課題となる。地域産業の継業問題、地域課題の解決にどのように結びついているかのアウトプットには、時間を要するが、専門的な知識と技術を活用できる実学として地域への関わりを続けていきたい。



明治 大正 昭和 旭東の教育と文化 邑久郡を中心として

退職者 石原 史雄（瀬戸内市長船町土師）
著 者 石原史雄
発行所 自費出版
発行年月日 平成31年1月15日

はじめに

ふる里の米と酒は、誰しも優れたものと思ひ吹聴し誇りとする。教育もその一つである。教職に就いてから郷土の諸先輩から「邑久魂を根幹とした教育風土を大切にし、優れた発想力によって旧きを温め新しきに立ち向かう教育文化の進展に尽くす」教育郡邑久の伝統の継承を誇りとするように教え諭されてきた。

振り返って思うに長い教職にありながら私には何が出来たのか、何を共有し伝えてきたか、先輩諸先生のきついお叱りの顔が浮かんでくるのみで忸怩たる思いである。お許しただく意味で拙文を残したいと発起した次第である。

本書はA4版203ページ13編から成る。全てを紹介できないので、その内6編を取り上げ、邑久郡が「教育郡邑久」と誇ってきた理由と、その源泉を主に記した。従って「文化」の編は省略してある。

教育郡邑久の源泉

南の興志館・北の淳風館

「山北の淳風館・山南の興志館」は邑久郡の私塾の双璧といわれた。山北は邑久郡の中央を東西に走る大雄山脈を脊梁とする北部をいう。報告では淳風館のみを取り上げる。

岡山県には私塾が144塾あり、全国第一の数であった。そのうち邑久郡には14塾があり、岡山市に次いで第2位であった。淳風館は元和の頃、笠加に居住した門閥の豪農で代々庄屋、大庄屋であった森太郎右衛門（太郎平）によって元治元年に開設された。太郎平の長男真十郎は邑久郡初代の県会議員、長女の於睦は児島味野の塩田王野崎武左衛門の長男武吉郎（貴族院議員）の妻である。

残されている淳風館碑（篆額は香川真一、書は大原桂南）によると、教師として招聘されたのは、平井秀策、戸田玄周、横山謙齋、児島東雄、松原裕、長谷川学海の6名であった。

淳風館の特色

- (ア) 県下の私塾の大部分は塾主がひとりで経営されているが、邑久郡の14私塾のうち4人の塾主が賓師（教師）として招聘されている。
- (イ) 教師6人のうち5人は大阪で学び、医師が4人でそのうち2人は緒方洪庵門下生であった。
- (ウ) 塾は広大な森家の屋敷の内にあり、邑久郡担当の郡奉行香川英五郎（真一）は、その別邸に「在宅」（村住居）していた。
- (エ) 漢学塾とされているが、内実は医道の初歩的な内容や医療の手ほどき、数学、さらにはフランクリンを取り上げ自由論を語るなど、伝統的な私塾とは別系統のものであった。
- (オ) 南の興志館と交流学习も行った。



右…淳風館碑 左…淳風館百年記念式典之碑

牧野権六郎ら3名が来訪

明治2年頃、慶応3年大政奉還の時、薩摩の小松帯刀、土佐の後藤象二郎と二条城で活躍し名を残した尊王攘夷指導者牧野権六郎、岡山藩国事周施方として東奔西走した漢学者井上千太郎（復齋）、安藤頼母の三人が、新時代の学校制度を創るため来訪している。

明治43年、関係者によって淳風館碑が建立された。この時、井上復齋は、

民徳古今豈無同 薫陶須在読書功
韶年芳烈公遺烈 不出淳風二字中

（民の徳は昔も今も同じである。知らず知らずのうち

に感化し、人を形成するのは全て読書によるものである。二百年の後の今も芳烈公（池田光政）の功績は淳風館の二字の中に生きている）の詩を寄せた。

結び

昭和4年、淳風館碑の傍に「淳風館百周年記念式典之碑」が建てられた。地方の私塾を顕彰するために再度記念碑が建てられた例は稀であろう。

淳風館は記録の上では私塾とされるが、豪華な教師集団、教授内容から見ると、江戸時代の教育から近代教育制度に繋ぐ「源泉」といえる「学校」ではなかったか。教育郡邑久の濫觴であった。

学制になり、児島桑村は変則邑久中学校長に、また横山謙斉は邑久高等小学校長として地域に多くの人材を育てた。

邑久郡公立変則中学校の設立とその系譜 教育郡「邑久」の源流を探る

明治5年の学制による中学校は、全国を8大学区に分け、その大学区毎に32の中学区を設け、各学区に中学校1校を置くというものだった。岡山県は明治9年に8学区になったから公立の中学校は8校なければならなかったが、明治13年にいたっても公立中学校は岡山中学校1校のみで、政府の当初の計画と現実とは大きな隔りがあった。

そこで県は、公立学校補助金支給制により、その翌年から中学校教育の普及、奨励に乗り出す。そのひとつが邑久郡67か村連合会によって設立された「邑久郡公立変則中学校」（以下「邑久中学」という）である。明治14年4月のことであった。

選挙により、校長には元淳風館教師で邑久郡副戸長、同中学区取締同書記の児島東雄（桑村）、学務委員には中山嘉代治が選ばれた。桑村は明治6年地租改正惣代として民富蓄積の立場に立って中央政府に抵抗した62歳の人望のある実力者。嘉代治は開明的・進歩的・行動力があり、明治12年頃により小林樟雄・栗原亮一等と交りを自由民権思想に共鳴した若干20歳の青年であった。

時の県議会議員は森真十郎と馬場亀三郎、森は淳風館創設者森太郎平の子。明治10年頃邑久郡には革新の意気に燃えた青年たちによって「一志社」という若者組織が結成されたが、その議長・副議長でもあった。

教師たち

開校から教師として携わったのは児島と横山謙斉

（共に興志館兼務）の外、犬養（飼）清蔵（松韻）・常光定吾。注目すべきは犬養と常光を三余塾（都宇郡で犬養松窓が開いた私塾、同塾は犬養毅・坂本金弥・林淳平等の俊英を輩出。）から招いていることだ。

邑久中学校での在任は短期であったが、ここで培われた人脈、親交の輪は、後年備中地域との人的交流を密なものとし、邑久郡の政治・教育・文化面に影響を与える。

在学者・卒業生・廃校

明治14年開校時の在学者は31人、同15年45人、同16年58人。教師であった松韻は、松韻遺稿に「却俛育英承乏時 満校生徒驥子」(全生徒が秀才)といっている。

生徒は邑久郡のみならず久米北条郡（久米郡）、赤坂郡（赤磐郡）、上道郡、和気郡からも通っていた。

邑久中学のみでなく、当時郡に普及していた町村立中学校は、経営難と小学校令の公布により高等小学校の設置を要望され、全てが明治17年廃校となる。

短期間の設置であるが、学んだ者は50名を下らないと思われる。中央に出て華々しく活躍した者もいるが、「多クハ卒業スルニ至ラズニシテ小学教員トナリ或ハ他ニ移ルモノ」（文部省九年報）とあるように学習者は郷土の教育者、実業の中堅者として活躍したものと思われる。

就学し名を残した者には次の人達がいる。

小西千吉（孤剣）師の西薇山が閑谷の三奇人とした。児島猷吉郎（星江） 二松学舎学長 京城大学教授、中山巳代蔵 栃木県知事 神奈川県商工銀行頭取、小橋藻三衛 岡山県会議員（20年）代議士（13年）。

廃校の後、邑久中学校を母体として、高等高砂小学校（後の邑久高等小学校）が横山謙斉を校長として発足した。

終わりに

閑谷巒は岡山県教育の象徴である。その学校の存在する隣郡の邑久郡は閑谷校の影響を受けているはずだが、邑久中学の歩みを顧みた時、少なくとも記録に現れる上では影響が少ない。大坂で学んだ者、備中との東西交流によって得られた教育風土が感じられるのは意外であった。

郡立町村立中学校の設立

系譜余録

邑久中学校の開校は、郡内67か村の多くの階層・団体・有力者の懇篤な支援により設立されたが、県下に

— 邑久郡教育会百年 —

— 県下で最初の郡教育会 —

は発足したにもかかわらず難問が立ちほだかり頓挫する学校があった。

邑久中学校より半年も早い明治13年に津山山下旧北条郡県庁跡に開校した六郡共立中学校である。それはなぜなのか、邑久中学校の場合と比較してみたい。

時の鬼県令と称された高崎五六が仲裁に入り、学校長に任命された岡田純夫と久米南条・久米北条・西々条・西北条・東南条・東北条6郡の郡長と村側の代表を呼んで仲裁までしたが物別れとなり廃校となった。岡田は当時久米南条郡の郡長、岡山藩士で英学を修め岡山温知学校の教授であった。共立中学校廃止の後は岡山中学校長、師範学校長を経て岡山県教育会会長となった人物であった。

この高崎・岡田両者の力量をもってしても共立中学校は存立しなかったのである。その理由を両校の違いから見ると、共立中学校設立の6郡には藩政時様々な藩の飛び地があり、支配の違う江戸250年に養われた住民の生活環境・気風が大いに違っていた。また、「徴兵一揆」「血税騒動」の大騒擾事件があったのに対し、邑久郡は池田光政が入封して以来転封は無く比較的穏やかな地であった。

美作の自由民権運動は活発であった。明治13年3月の会員名簿によれば、総数206名中、津山市街からの参加はほとんどなく、全員が農民であった。同じ頃に士族中心の南新座親睦会が結成されているが、これは全く親睦会をでたものではなかった。

それに対し邑久中学校の場合、県会議員を始め、かつて庄屋・豪農・青年団体によって結成された「一志社」によって運動は進められた。

県会議員の森真十郎・馬場亀三郎は自由民権運動の母体となる両備三国親睦会にも参加する。自由民権運動の理論的基盤は、西洋の近代社会思想があったはずである。ならば、その要求を満たすのは学校でなければならなかった。

3つめの違いは校長である。共立中学校の岡田は有能であったが、権力者によって任ぜられた岡山藩士であったのに対し、邑久中学校長児島桑村は淳風館塾主森太郎平の屋敷と道一筋隔てた豪農三宅家に育った。淳風館・興志館の教師を経て、明治5年地租改正惣代の時に出した意見書は、当時の日本人民の提出した中で最も優れたものと評価されている。第一次教育令期には教育行政に携わり、郡内全域を視察した教育行政の熟知者であった。

明治15年23歳の青年教師江川寿太は、山陽新報に「邑久郡小学校教員諸君ニ課ス」として二千三百余字に及ぶ檄文を投書した。

“生徒の将来の禍福は教師の掌中にあり教師の責任は重い。教師は博学多識、品行方正でなくてはならぬ。そのためには研究会が必要である。”といったものであった。

江川は太伯小学校校長桜木雄作（岡師明治14年卒 卒業生5名）と協議し、趣意書・会則を作成、郡主事児島信一と相談、太伯小学校で審議した結果、会は発足した。総理和気辰包・会長児島信一・副会長岡田義孝・幹事桜木雄作・江川寿太であった。

明治18年4月のことであった。県下の郡市単位の教育会としては最初の設立とされている。（岡山県教育史）

事業は、学事奨励会、教育互助会、基本財産蓄積、巡回文庫・講演会・邑久郡誌・邑久郡郷土読物の編集発行・研究授業・学事視察等であった。

64年間続いたが、終戦により昭和21年11月に解消、同月22日に岡山県教員組合邑久郡支部として発足した。



しかし、邑久郡の「教育の心」を根幹とする教育風土を大切にしたいとする先輩諸氏、教育の中正で健全な発展を願う現場教職員が昭和52年再度「邑久郡教育会」を発足させた。

教育懇談会・講演会の開催・教育会誌・会報の発行などを行ったが、再興40年後の平成29年に幕を閉じ解散した。

旭東5郡連合教育会と

小橋藻三衛

旭東5郡とは邑久・上道・和気・赤坂・磐梨の5郡である。5郡が「教育社会の連絡を通じ向後一層の親睦和合を厚くし以て大いに斯道の進歩を希って」明治21年教育5郡連合教育会（明治33年より4郡）は設立された。県下の郡市の半数に未だ教育会の設立されていない時であった。

設立提案者は、邑久高等小学校桜木雄作、有隣高等小学校小橋藻三衛の両訓導であった。

小橋は邑久郡朝日村生まれ、邑久中学校が廃校になり、原泉学舎（西薇山に学ぶ）・岡山師範学校で学んだ。

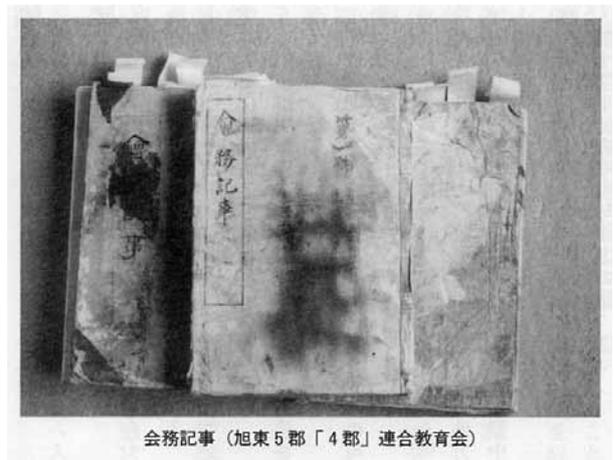
設立の会は福岡妙興寺で行われた。交通・通信手段の乏しい時代に70余名が集まっている。この会を最初として、昭和14年まで各郡持ち回りで63回行われ、多い時は346名の参加があった。2回目に幹事として小橋と岡師で同期の河田多賀蔵、武用宗次が選ばれている。設立の主旨に「一層の親睦を厚ふ」とある。新しい教育を授かった者の同窓の会的親睦の意をもって設立とも考えられるが、最大の理由は発起者小橋の明治18年創立の邑久郡教育会、岡山県教育会への不満・不信と卓越した指導力であったと思う。

会の記録は和綴帳3冊に時の開催郡会長によって記されている。明治の「小学校令」から昭和16年の「国民学校令」実施直前まで初等教育の様子、教育思潮、教育行政の動向、県下特に旭東地区の教育指導者の姿等が現実に蘇える。

来賓、講師としては、県知事、大学教授、代議士、県会議長、県教育会長、県視学・師範学校関係者、郡長、弁護士、新聞社、牧師、教誨師、大正時代に入ると陸海軍人等が来ている。

開設以来度々参加しているのは閑谷巒長西毅一（薇山）と小橋である。西は小橋にとって原泉学舎以来生涯の師であった。

明治29年の会は閑谷巒で開催、以来和気・瀬戸・西大寺高等女学校も加わって実地授業を公開している。



岡山女子師範廃止問題 県議会議場で論争

同門小橋・岡両議員

岡山女子師範は明治35年創立された。教育県を自認する岡山県は、小学校の就学率も高く、高等女学校の設置も他県よりも進んでおり、女子教育の必要性を認めながらも大正3年、岡山県会で生徒の本科一部の生徒募集の中止が議決された。

この廃止に敢然と反対意見を述べたのは、邑久郡選出の岡繁蔵（政友会）であった。時の県会議長は小橋藻三衛（国民党）で共に邑久郡選出議員、しかも二人は少年期、児島桑村に学んだ同門同士で教員出身者であった。岡は心の内を知り尽くした大派閥の国民党議長小橋に、大波に抗うように条理を尽くして正論をもって激突した。

当時の県議会は国民党が全盛の時代で、38名中31名が国民党で圧倒的多数を占め、政友会は4名、中立3名であった。

結果は、文部大臣から廃止はできぬとの通知があり、県知事笠井信一は大正6年11月の県会に復活の提案をし、大正7年度から募集は再開された。

県政で両人は鋭く対立したが、立場は異なろうとも邑久郡教育会、4郡教育会では協力した。特に閑谷巒長西毅一に心酔し、閑谷巒に対しては県議の立場で助力した。

Society5.0を生き抜く資質・能力の育成

— 子どもの未来に責任のもてる教育活動をめざして —

兵庫県洲本市立加茂小学校
校長 美濃 正明

1 はじめに ～地方こそ先に動くべきだ～

地方の学校こそ、積極的に先に動くべきである。下記の表にもあるように、本市の将来の高齢化率は国の平均よりも約10%高く、児童生徒数は25年後、約半数になる。このような課題先進地域では、国よりも早く動き、将来予想できる課題に対し、早く手を打ち、人材を育成しなければ、街全体が行き詰まってしまうからである。

【洲本市の人口と児童生徒数の変化及び高齢化率】

	2020年	2045年
1学年あたりの児童生徒数	約300人	約150人
洲本市人口	約41000人	約26000人
高齢化率	約37%	約47%

(総務省 国勢調査及び国立社会保障・人口問題研究所より)

今は非常に便利である。ICTやインターネットを活用すれば、国の教育施策に関する情報も入手できるし、優れた実践に触れることもできる。さらに指導も支援も受けることができる。

ICTは時間と場所という制約を解消してくれるツールである。あれもこれもないと言うより、子どもたちの未来のために、勇気をもって一步を踏みだそう。

これは淡路島の小学校の取組である。

2 本校の現状

「校長先生、僕わからなかったら、YouTubeで見るよ」これは算数の授業中、子どもが私に言った言葉である。また、職員の「ここに線を引いて。これを覚えてきたら、70点ぐらい取れます」というような指導もあった。どちらも衝撃的な言葉であったが、全職員、子どものために職務に精励しているのは理解できた。

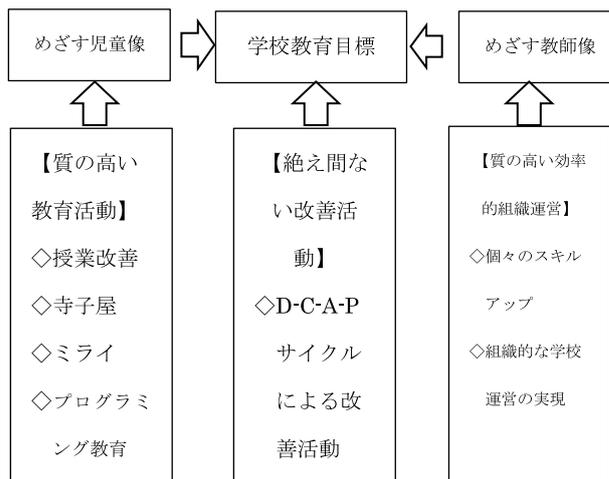
ただ、進むべき方向性を共有しておらず、組織としてどう動くかという意識は乏しいように思えた。

着任して1ヶ月が過ぎた頃、全国学力・学習状況調査や市独自で調査している学力調査、本校の生活アンケートから以下のような課題が明らかになり、再度、

学校経営案を示した。

- ・学力4層分析では下位2層の割合が高い。
- ・自尊感情についても肯定的に答えた児童は42%と低い。
- ・授業は一斉指導が中心で「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業とは言い難い。児童も48%しか、授業中、話を聞いていないことが明らかになった。

3 学校経営の概要



子どもは「未来からの留学生」である。だから、学校は子どもが社会に出たときに、必要な資質・能力をつけることなくしてはならない。それも子どもが生きる時代はSociety5.0と言われる新しい社会である。社会が変われば、暮らしも変わる。だったら、教育も変わるのが当然である。

しかし、私たちは今、子どもの未来に責任のもてる教育を行っているだろうか。

来年度から全面实施される学習指導要領はSociety5.0を生き抜く子どもたちに必要な資質・能力を育成するための改訂だと認識している。

また、校長は職員の意欲的な教育活動が子どもの成長に繋がるよう、学校経営を行う責務があると考えている。このような考えのもと、日々学校経営を行っている。

4 具体的な取組

今の学校で新たな取組を行う場合、カリキュラム・マネジメントが必要不可欠である。

本校のように「授業改善」、基礎学力育成のための「寺子屋」、さらには本校の教育の特色である情報活用能力育成のための「ミライ」の時間の創設など新たな取組を行う場合、思い切った業務改善も必要である。

これまで学校教育目標の目的達成のために、最適の手段でないと判断すれば、学期の途中でであっても、思い切った「校務改革」に取り組んできた。

(1) 授業改善～自分にしかできない教師の一大事業～

校長として赴任した当初、授業中、教室から抜け出す子どもなど、授業規律が甘く、教育活動が正常に行えているとは言い難い学校であったが、授業規律の確保に全職員足並みを揃えて取り組み、ある程度の教育活動はできるようになった。

しかし、授業は一斉指導が多く、子どもの学習意欲は低く、教師の話もきちんと聞いていない状態であった。教師の授業力の有無が、子どもたちの意欲・学力に直結していた。これは仕方のないことだろうか。

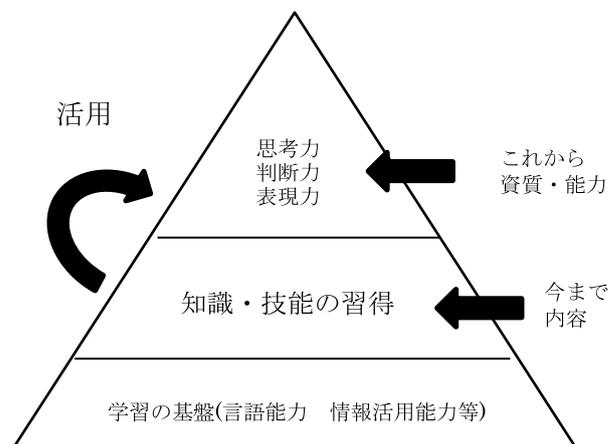
日々、授業観察を行うなかで、疑問が次第に大きくなっていった。

そんなとき、ある私立の小学校を訪問した際「本校は明日、どんな教師が赴任してきても、授業の質は落としません」と言う言葉を聞いた時、大きくひらめくものがあつた。これだ。授業をある程度システム化すれば、誰が担任になっても授業の質は落ちない。毎年新学期になると、教師によって授業の進め方も違う、ノートの取り方も違う、子どもが教師に合わせる。これはおかしい、教師が子どもに合わせるべきなのだ。

そんな簡単なことに気づかなかつた自分が情けなかつた。

それから、過去に全国学力・学習状況調査の結果が思わしくなく、授業改善によって、学力向上に成功した学校を何校か探し、訪問させていただいた。この実践に本校の特徴であるICTの長所を加えて、本校のモデルをつくり、取り組もうと決意した。しかし、急にそんなことを提案しても職員は反対する。そこで、学習指導要領の理念を職員に周知するところから始めた。

【学習指導要領総則のイメージ】



職員に話したのはこれから来るであろうSociety5.0とはどんな時代か、そしてこの時代に必要な資質・能力とは今までと違うと言うことである。これまではコンテンツが大切であったが、今後はコンピテンシーが重要であることを説明した。最後に学習指導要領には当然のことながら、法的根拠があることを説明すると、若手職員はほとんど、納得した。

残るは中堅からベテランである。今まで、自分なりの授業実践があり、子どもに学力をつけてきたという自負があるのだろう。取組のスピードは鈍かつた。これらの職員には先進校を私と一緒に訪問し、そこでの子どもの様子を見学させた。これは非常に効果的であつた。

こうして、本校での授業改善の取組が始まつた。

本校の授業改善の主な取組は以下のとおりである。

○子どもたちに学び方を指導する教科経営を大切ににする。

これまで教員は教科教育を学んできたが、教科経営を学ぶことはあまりなかつた。しかし、「主体的・対話的で深い学び」の重要性が提言された今日、学び方の指導は必要である。そのため、学び方をまとめた「学習過程スタンダード」を作成した。

○基本的な授業過程を①問題提示②問いをもつ③学習課題の設定④問いの共有で「見通し」を立てる⑤自力解決⑥集団解決⑦価値の共有（まとめ）⑧振り返りとする。

特に「学習課題の設定」では今回の学習指導要領では、問題発見・解決能力等が学習の基盤として位置づけられていることから、子どもたち自ら課題が設定できるようにした。また、「見通し」も次の自力学習ですべての子どもたちが取り組めるように

し、「振り返り」では自分の学びを豊かにし、可視化し、学びに向かう力を育てるため、重視した。

○研究授業は全員参加が原則であるため、特設の6校時を設定した。

○指導案はA4版1枚のワンペーパー指導案とした。それは研究授業は授業が終われば終了ではなく、事後研修後、改善策を実践してはじめて終了である。

その研究授業も本校では1人1年に数回行うため、指導案づくりにあまり時間をかけず、授業準備に傾注させるためと、複数回の研究授業で課題解決が図ればよいと考えているからである。

○言語能力育成のため、「言語わざ」を大切にする。

「言語わざ」とは「学習用語」と学び合いを深めるための「対話言語わざ」からなる。本校がめざす授業は、子どもたちが



主体的に対話し、学ぶ授業である。そのため、学び合いの型を大切にしてきた。司会を立てる学び合い、グループ学習での学び合い、言語わざを使った学びなどである。子どもたちは言語わざを駆使し、自分たちだけで、意見交流ができるようになった。

○事後研修は①課題を出す②改善案を出し合う③助言をする④改善プランをまとめるのワークショップ型で30分という短時間でいった。また、ここでは改善案まで討議されるので、内容のある授業改善プランを作成できるようになった。

(2) 寺子屋の開設

～校門を出るまでに基本的な知識と技能を習得～

本校児童の学力面の課題は学力低位層がやや多いこと、計画を立て、自ら学ぶことである。

これらを解決するために放課後、児童支援担当教員が中心となって、デジタルドリルサービス「やるKey」を活用した「寺子屋」を設立した。子ども一人一人にIDとパスワードを配布し、インターネットが使える環境であれば、どこでも学習できる。

子どもたちは放課後、競うようにコンピュータ室にやって来るようになった。

そこでは、予め担当教員から配信された問題に取り組み、できると答え合わせもコンピュータがやってくれる。問題を間違えると、コンピュータがどこでつま

づいていたか判断し、それを解決できる問題が自動的に出題され、問題に取り組むというものである。

教師は子どもたち一人一人のつまずきや学習状況を把握でき、必要に応じて指導できる。

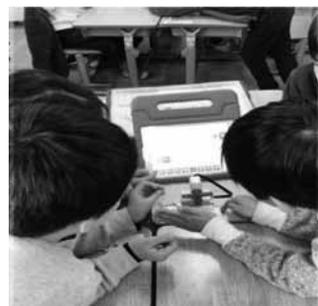
このように一人一人の学習履歴が分かれば、子どもたちに基礎学力を育成していく上で、非常に効果的である。

(3) 情報活用能力育成のための「ミライ」創設

～自分の構想を可視化できる子どもに～

「ミライ」創設の理由は次の二つである。

まず、情報活用能力が学習指導要領では学習の基盤として位置づけられたことにより、この能力は「育成できたらいいな」というものから、「育成しないと、子どもたちが生きていく上で、必要不可欠である」というふうに変ったからである。次に、本市は少子高齢化の先進地域であり、将来、ロボットや人工知能、ICTなどを上手く活用し、社会の課題を解決していかなければ、社会そのものが成り立たない状況であることが予想される。ため、子どもたちには将来「こんなものがあつたら、便利だな」と思えるものをつくることのできる子どもになってほしいからである。



ミライでは「コンピュータの基本的な操作」「プログラミング的思考」「情報モラル」などを育成している。本校ではまず、コンピュータで文字を入力する基本的な操作を「キーボード島アドベンチャー」を活用し、技術を習得させている。

プログラミング教育で学ぶ子どもの姿を見るとこれがコンピテンシーベースの今回の学習指導要領の理念そのものであると感じる。体験しながら色々なことに気づき、友だちと共有し合う。

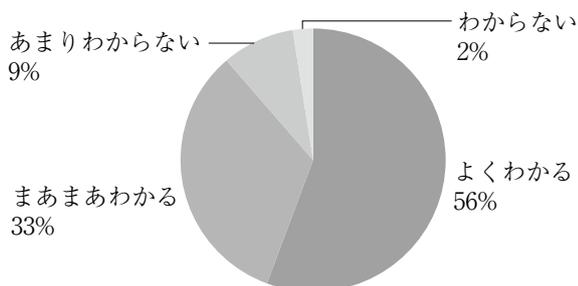
課題が出てくれば、それを友だちと頭を突き合わせながら、話し合い、課題を解決していく。そして、自分が学んだことを振り返ることで、メタ認知して、学びを進めていく。

さらに、メタ認知したものを職員が共感的に理解することで、またやってみようという学びに向かう力につながっていく。こういった授業を見ると、感動で胸が熱くなる。プログラミングの体験は新しい学びのモデルになることは間違いない。

5 成果と課題

(1) 授業改善

【子どもたちの授業理解度 生活アンケートより】



授業改善の結果、3学期末に授業が分かると肯定的に答えた子どもたちの割合が57%から89%に急上昇した。また、授業中、話を聞くというのも48%から89%に、さらに学校が楽しいと答えた児童が61%から、91%に上昇した。

これらは授業改善がすべてとは言いきれないが、授業が教師主体の一斉授業から子どもたち自ら学ぶスタイルに変わったことが大きいのは確かである。

また、授業過程をある程度、職員が統一し、子ども自身が学び方を知っていると、学校経営上、様々なメリットがある。

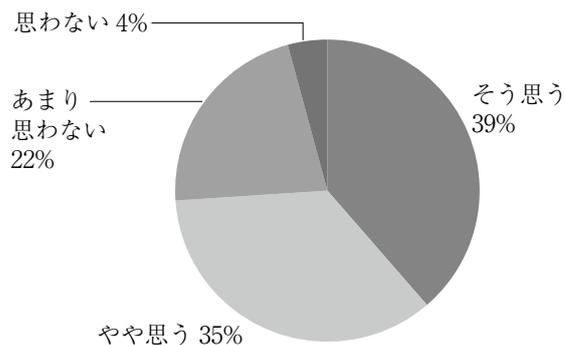
例えば、どのクラスも4月から学級経営が非常に安定するということである。特に本校のように職員の異動が多い学校にあっては担任の学級経営力の差によって、様々なトラブルが生じていた。しかし、子どもたちが授業の進め方を熟知しているため、授業が非常にスムーズに進む。子どもの在校時間の70%は授業である。

その授業が安定することのメリットは、学校経営上とてつもなく大きい。

(2) 寺子屋

計画を立てて、自ら学ぶという児童も42%から「やるKey」導入後、74%と大幅に改善された。しかし、本校の課題である、学力低位層に占める子どもの割合が多いことについてはかなり改善された学年とできなかった学年に差があった。これは学校全体の取組として組織的な取組になっていないのが一因であろう。

【自ら学ぶ時間に関する調査】



反面、デジタルドリルサービス「やるKey」を活用した寺子屋については子どもも職員、保護者も非常に有効であるという結果が出ている。調査結果をさらに分析すると「やるKey」によく取り組んでいる子どもは職員や保護者からのかかわりが、よくあることが判明した。今後、子どもたちの学習履歴を分析し、それぞれの子どもたちにあった、きめ細かな指導が必要である。

(3) ミライ

児童のコンピュータで文字を入力する技能は著しく上達し、学習の道具としてコンピュータを活用できるようになっている。将来、1人1台、コンピュータが使えるようになっても、授業に支障が出ることはないだろう。

「レゴWeDo」や「Ichigojam」を使ったプログラミング学習では子どもたちの発想の豊かさは大人顔負けである。

きっと将来、こんなものがあつたら便利だなというものをつくり出せる大人になるだろう。

6 終わりに

学校はその時代の最先端の知識と技術を学べる場所であるべきではない。そういう思いで職員とともに学校経営にあたってきた。

だから、いい実践があれば、喜んで、出かけていった。幸い、そういった優れた実践をされている方には、私にも丁寧に指導して下さる方ばかりであった。本当に有り難いものである。

最後に私の学校経営をいつも支援して下さった洲本市教育委員会、地域・保護者の方、教頭をはじめとする職員に感謝の気持ちを捧げたい。

生徒の「主体的な学び」を追究した歴史的分野の授業づくり

— 認知や感情への効果的な刺激を考慮した単元構成の工夫 —

石川県白山市立松任中学校
教諭 平 真由子

1 研究の目的

近年、学校現場では、「主体的な学び」が重視されており、授業研究や研修会が全国各地で開催されている。これを機に、自分の授業を振り返ると、生徒の主体性を引き出す授業をしているつもりが、実際は、教師が作った枠に当てはめ、主体的な学習者を演じさせているのではないかという疑念が生まれた。主体的というのは、「なる」ものであり、「させる」ものではない。そのことに気づき、生徒が主体的に学ぶ授業について熟考し、授業力向上に繋げたいという思いが高まった。

一方、今年度の4月に社会科の授業に関するアンケートを実施したところ、歴史的分野に苦手意識を抱えている生徒が多いことがわかった。理由は、「歴史は漢字が多く、覚えることも多い」、「学ぶ意味がわからない」、「過去に何が起きたかは、今の自分には関係ない」などだった。新学習指導要領では、歴史的分野の目標を、「社会事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」となる、知識・技能、思考・判断・表現力、そして学びに向かう力、人間性等を育成することとしている。生徒の歴史学習の認識を変えなければ、目標に到達することはできない。

以上のことから、生徒の「主体的な学び」という視点から授業改善を図り、歴史的分野に対する苦手意識を減らし、歴史学習の意義を生徒自身が獲得できるようにしたいと考えた。これが研究の目的である。

2 「主体的に学ぶ生徒の姿」の定義

生徒が主体的に歴史的分野について学ぶ姿とはどのような姿なのかについて、様々な文献を参考にして、定義することを行った（資料1）。

- ・ 歴史的事象に対して疑問や課題を見出している
- ・ 学習内容や学習方法を自ら選択している
- ・ 積極的に情報収集している
- ・ 学びを積極的にアウトプットしている
- ・ 意欲的に思考課題に取り組んでいる
- ・ 歴史的課題に対して自らの思いや考えを持って、積極的に他者と議論している

資料1 歴史的分野を主体的に学ぶ生徒の姿

3 実践内容

本実践は、学習指導要領の歴史的分野の大項目C「現代の日本と世界」の(1)近代の日本と世界の内容のうち、1926年（昭和元年）から1945年（昭和20年）の内容である。この単元は、世界の国々が、世界恐慌を機に大きく変化し、世界戦争に突入した経過と、戦争が人類全体に惨禍を及ぼしたことについて学習する単元である。この単元において、先に定義した姿が授業内に出現するように単元構成をデザインした(図1)。その際、心理学や教育学の研究成果に基づき、認知や感情に、適切なタイミングで刺激を与えられるよう考慮した。

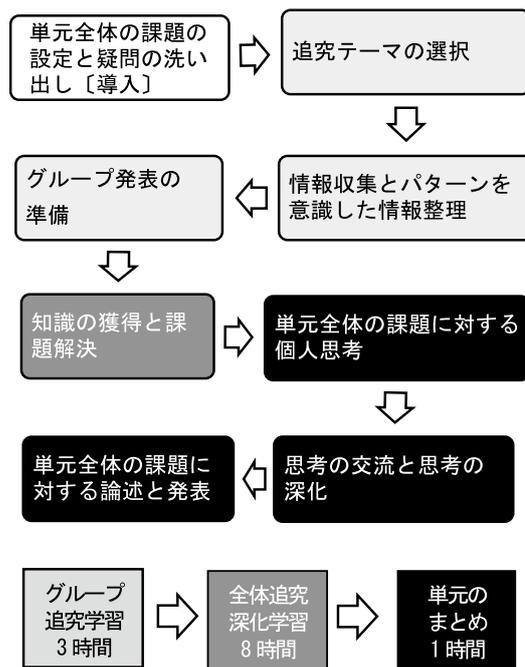


図1 歴史的分野の単元構成

(1) 単元の導入

まず大正時代のイメージを聞いた。生徒からは、「エネルギー」「明るい」「活気がある」といった回答が返ってきた。そこで、「大正時代が終わり、20年たったある日、日本で撮影された1枚の写真があります。」と切り出し、ジョー・オダネル氏が撮影した『焼き場に立つ少年』の写真を提示した（資料2）。



資料2
『焼き場に立つ少年』

「2分間とります。その後で、写真を見て気がついたことを教えてください。」と生徒に投げかけた。2分間の沈黙の時間が流れた。

- T：では、気がついたことを教えてください。
C1：男の子が裸足で手をピンとして立っています。
C2：周りに建物がありません。
C3：お母さんがいません。
C4：服がボロボロです。
C5：おぶっている赤ちゃんがぐったりしています。

C5の意見が出たところで、ジョー・オダネル氏の語りが書かれた資料を読み上げた。教室の空気は一気に固くなり、生徒達は写真が示す状況を理解した。少年が背負っている赤ん坊はすでに亡くなっており、少年は火葬のために、焼き場にやってきたのだ。生徒の中には、泣き出しそうな顔をしている生徒もいた。

「大正時代が終わってから、この20年の間に、一体何が起きたのでしょうか。なぜ、少年はこのような状況に置かれることになったのでしょうか。そして、このような状況を阻止することはできなかったのでしょうか」と投げかけ、単元全体の課題を提示した。

<単元全体の課題>

- ・この20年の間に、世界や日本に何が起きたのか。
- ・この少年のような状況を阻止する選択肢はなかったのか。

(2) 疑問の洗い出し

次に、1926年から1945年に、世界や日本に何があったのかを年表で確認した。それを踏まえて、「自分が学びたいこと、追究したいことを、できるだけたくさん書き出しましょう」と課題を出した。多面的・多角的な視点で、数多くの疑問が出てきた（資料3）。

- ・なぜこの20年はこんなにも戦争があったのか
- ・なぜアメリカのニューヨークで起こったことが、世界に影響を与えたのか
- ・なぜ日本は国際連盟を脱退したのか
- ・なぜ総理大臣が暗殺されたのか
- ・なぜ、ソ連は中立条約を結んでいたのに、日本に宣戦布告したのか
- ・なぜ、広島と長崎に原子爆弾が投下されたのか
- ・当時、国民はどう思っていたのか
- ・なぜ事件名が数字なのか

資料3 生徒から出てきた疑問の一部

(3) 追究学習

生徒から出てきた疑問を学習課題とし、歴史的事象の理解や、自分なりの解釈を深める追究学習を行った。具体的には2つの学習方法を用いた。1つ目は、歴史的事象を背景→経過→結果→影響の視点で捉える“ロジカルプレゼン学習”，2つ目は複数の資料から当時の状況を具体的に把握する，“資料活用レポート学習”である（図2）。

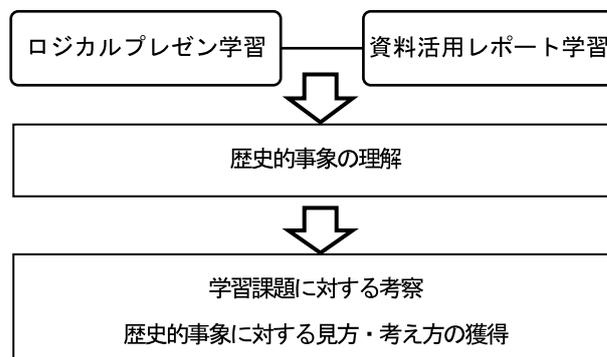


図2 課題追究の方法

ロジカルプレゼン学習

STEP 1：学習テーマの選択

生徒一人一人が追究したい内容を、満州事変からポツダム宣言受諾までの14個の歴史的事象の中から1つ選択した（資料4）。



資料4 テーマ選択の時の板書

STEP 2：グループでの情報収集と発表準備

同じテーマを選んだ者同士でグループになり、情報収集と整理、発表準備を行った。その際、できごとの背景→経過→結果→影響の枠組みで情報整理、発表することを条件とした。グループ内の学び合いでは、結果と影響の区別や、できごとの前後の関連性などについて、活発に意見交換をしていた。その中で、ほとんどの生徒が、背景→経過→結果→影響の枠組みで歴史的事象を捉えることができるようになった。

STEP 3：グループ発表による知識の獲得と課題解決

1時間の授業の中で、2～3グループが、担当した歴史的事象について、背景→経過→結果→影響の枠組みで発表をした。その際、教師の役割として、発表内容の簡潔な板書、曖昧な部分の問い返し、映像や当時の日記などの補助資料の提示などを行い、全員が理解し、課題に対して自分の考えを持てるようにフォローをした。



各授業の終末の段階では、ペアになって、学習した内容を2分間でスピーチするアウトプット活動を取り入れた（資料5）。繰り返し行うことで、背景→経過→結果→影響の枠組みを用いて、ロジカルに説明できる生徒が増えた。

資料5
2分間スピーチの様子

資料活用レポート学習

当時の国民生活を象徴10以上の資料の中から、適切な資料を選択し、レポートにまとめる学中活動を行った。（資料6）。



資料6 戦時下の国民のくらしのレポート

“適切な資料を選択する”という行為は、その過程で、資料を読み込み、比較や関連させる技能を駆使することになる。また、クラスメイトのレポートを見合うことで、同じ学習課題でも、学習者によって、選択する資料が異なることや、同じ資料でも着目する視点が異

なることに気づき、学びの深化につながった。

(4) 単元のまとめ

単元のまとめの授業では、再度『焼き場に立つ少年』の写真を見せ、「どの時、どのような判断をしていれば、悲惨な結末を阻止できたのか」という課題を提示した。

既習事項を活用して、1926年から1945年までの流れを確認した後、“どの時”を各自選んで、ネームプレートを貼った（資料7）。



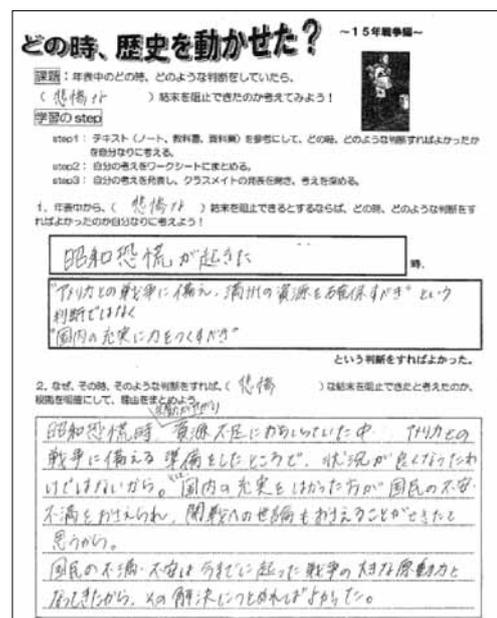
資料7 “どの時”の個人判断場面の板書

満州事変、五・一五事件、国際連盟脱退、太平洋戦争開戦、ポツダム会談などにネームプレートが貼られていた。その後、フリーディスカッションに入った。

C1：7月のポツダム会談の時に、受諾していれば、原爆による被害は防げたと思う。

C2：確かに、原爆による被害は防げたかもしれないけど、そこまでの犠牲についてはどう考えるの？

こうした議論があちらこちらで行われていた。途中、ネームプレートを動かす生徒も何人かいた。フリーディスカッション後に、具体的に“どのような判断”をしていればよかったのかについて、自分の考えをワークシートに記述する時間を確保した（資料8）。



資料8 ワークシート

その後、全体討論に入った。根拠を明確にした主張がなされ、聞いている生徒たちの思考が深まっていく様子も見られた。最後に、ペアで自分の考えを伝え合う場をとった。このことで、全員が自分の考えを他者に語ることができ、達成感の獲得につながった。

4 成果

(1) 社会好きの増加

7月に実施した授業アンケートを分析すると、「社会科が好きだ」と肯定的に回答した生徒は、全体の85%で、他教科に比べ、高い数値だった(図3)。また、「あてはまる」と回答した生徒の割合を、昨年度(2年時)の7月と比較すると、今年度の方が10ポイント高かった。

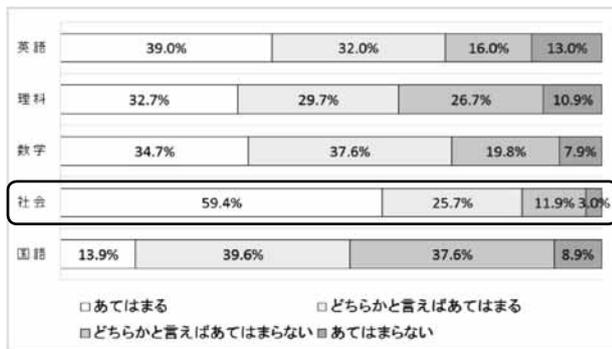


図3 「○○科が好きだ」のアンケート結果

(2) 自分の考えを持って、生き生きと語り合う生徒

全ての生徒が、思い付きではなく、根拠や理由を明確にして、他者と意見を交流させる姿が見られた。学習に対して苦手意識が高かった生徒が、「今日は自分の考えを持つことができ、うれしかった」と振り返り用紙に書いてあった。生徒にとって、自分の考えが持てること、それを他者と交流できること、議論をして考えが深まることは、ポジティブな感情を生起させることが示された。

(3) 歴史を学ぶ意義の獲得

歴史的分野の学習の最後に、「あなたが考える歴史を学ぶ意義は何ですか」と質問した。全ての生徒が自分なりの意義を記述することができた。一部紹介する。

- ・同じ失敗を二度と繰り返さず、良かったことをこれからの社会や自分の人生に生かすため。
- ・成功したことにより+αを考えて、日本や世界を進化させていくため。
- ・人間の生き方を知って、自分はどのようにして生きるのかを考えて学ぶため。

また、「歴史学習を振り返って、思ったことや考えたことを書きましよう」という欄には、多種多様な記

述があった。一人一人の中に、歴史学習に対する考えや思いが醸成されたことが読み取れた(資料9)。

- ・辛い出来事から逃げるのではなく、受け止めて、今までつないでくれた昔の人たちはとてもすごいと思った。自分もそのような人になりたい。
- ・最初は何のために、昔のことを学んでいるのだろうと思ったことがあったけど、現代に近づいてくると、これからは生かすという目的が見えてきたような気がした。歴史を学習して、人間はどこまでも成長できる動物だと思った。
- ・現代の私たちからすれば、「あの時こうしていれば…」と思うことはいくらでもあるけれど、それは結果を知っているからで、過去に生きた人たちは、皆個々で考え方が違って、よりよい未来を目指していて、それが巡り巡って、今の日本や世界の形ができたと考えると感慨深いなと思った。
- ・家でスマホをいじって、ネットに書いてあることだけ見てもつまらないと思った。こうやって昔のことを学校に来て知って、そのことについてどう考えるかを一人一人が発言して、その意見で自分の考えが変わって、学校に行かないとできないことだと思った。

資料9 歴史学習全体の振り返り記述

5 まとめ

今回の研究を通して、生徒の「主体的な学び」という視点で、心理学や教育学の知見をもとに、授業改善に取り組んだ。その結果、生徒の歴史学習に対する認知や感情が向上することが検証された。教師の役割は、知識や技術の伝達だけではなく、生徒の認知や感情に刺激を与え、生徒自らが知識や技術を獲得し、学びを深化できるようにすることだと再確認できた。それ故、私自身にも大きな変化が生まれ、授業準備において、「いかにわかりやすく教えるか」から「いかに生徒が学びを獲得できるか」を深く考えるようになった。

授業中に、生徒が生き生きと議論し合ったり、論理が繋がったときに晴れやかな顔になったり、他者の意見やレポートから必死に学ぼうとしている姿が目に入ると、授業者として、心の底から喜びを感じる。今後も、生徒と共に、教師も生徒も「主体的な学び」ができる授業を創造していきたい。

<参考文献>

- ・ Joe O' Donnell他, 「トランクの中の日本」, 小学館, 1995
- ・ 溝上慎一, 「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの展開」, 東信堂, 2014
- ・ ピーター・M・センゲ, 「学習する学校-子ども・教員・親・地域で未来の学びを創造する-」, 英治出版, 2014
- ・ 櫻井茂男, 「自ら学ぶ意欲の心理学」, 有斐閣, 2009
- ・ 田村学, 「深い学び」, 東洋館出版社, 2018

あ　と　が　き

日教弘岡山支部は、昭和31年、全国に先駆けて教育研究助成事業を開始し、個人研究、グループ研究、教育研究論文・著書助成事業と順次事業を拡大して64年目を迎えました。これまでに延べ1,639人の方々に総額8,844万円を助成しました。

また、平成5年に、創立40周年記念事業の一環として「教育研究集録」を創刊して以来、本県の教育振興に寄与するべく県下の学校・教育機関に頒布し、今回で第28号の発刊となりました。ご多忙な中、ご尽力された教育実践の成果をお寄せくださいました先生方のおかげだと感謝しています。これらの素晴らしい教育実践の報告が更に教育現場に広がるよう願っています。

今後とも、本県教育の振興・発展を支援するべく、本事業の更なる充実に努めてまいりますので、学校現場等が抱える課題の解決に向けた日々の取り組みや、教材研究等の実践・研究を論文としてまとめられ、多数応募されることをご期待申し上げます。

令和2年3月 教育研究集録 第28号

令和2年3月15日発行

編集 公益財団法人 日本教育公務員弘済会岡山支部

発行 公益財団法人 日本教育公務員弘済会岡山支部

〒703-8258 岡山市中区西川原255番地

TEL 086-272-1909

印刷 株式会社 創文社
